とり客になりなん事、又そしりのもと也、切れての後の名殘て更に益なし、金つかふも次に愚か也、たゞしひてしやれをもとめ、とをり者にならんと願ふ人の爲にいはゞ、てれん斗にては僞り也、歌三味線はめん〳〵の備はる所也、傳へ聞まなびて知るは、誠の通り者にあらず、いかなるをか通り者とかいはん、可不可は一條也、いかなるをかわけしりといふ、誠の通り者はてれんもなく、しやれもなし、かげもなく、なじみもなし、誰かしり誰か傳へん、是しくはして金かはらにはあらず、もとよりどんちひんぶく、下戸上戸のたとへに同じ事也、まよひの心を以て名利の要をもとむるにかくのごとし、ゆく者は皆やぼ也、いかぬこそ通り者也、いふにたらず願ふに足らず、

四十段　或人法然上人に

或人すいなる人に、よし原にて酒におかされて、酔さむらふ事、いかゞしてさめ侍らんと申ければ、よわぬほどのみ給へと答られけり、いとたふとかりけり、又女郎は實とおもへばまこと、不實と思へば不實也といはれけり、これも尊し、又疑ひながらもたのもしければ、誠あり共いはれけり、又尊し、

四十一段　因幡國に何の入道とかや云者の娘武藏國に、かんはり入道とかやいふものゝむすこ、美男のほまれ有て、女あまた云わたりけれ共、此間若衆をのみ喰ひて、更によねの類ひをくはざりければ、かかる事かきたるもの、俗に有べからずとて親出家をさせける、

四十二段　五月五日加茂の競べ馬を見侍しに霜月朔日、顔見せを見物し侍りしに、舞臺の前に半疊うり立、へだても見へざりしかば、皆立て切をとしのきわに寄たれど、ことに見物多く入込て、わけ入ぬべきやうもなし、かゝる折に棧敷なる三階に、後家らしき女のらんかんにこしかけて、口開ながら酔て落ぬべき時、はしらに取つく事度々也、是を見る人あざけりあざみて、世のしれもの哉、斯人多き所にて酒によひ、とりみだしたるおふちやくさよといふに、我心にふと思ひしまゝに、我等も瓦をふみしが、ゑひたる時はあのごとならん、夫をしらで酒をふみし事よ、今よりして思ひとまるべしといひければ、前なる人ども、誠にさにこそ候つれ、尤をろかに候とて、みなうしろを見返りて、爰へいらせ給へとて所をさりて呼入侍

りにき、かほどの事わり誰かは思ひよらざらん、なれ共折からの思ひがけぬ心地して、胸にあたりけるにや、人木石にあらねば、時にとつて物に感ずる事なきにあらず、

四十三段　唐橋中將といふ人の子に伏見町玉屋に、大隅とてよき女郎ありけり、人の思ひ有て煩らはしく臥たりけるに、大きなる蛙來りて、枕もとにつきそひければ、人々取捨ければ、なを跡より來て大すみがそばをはなれねば、藥も思らず、やせおとろへたるが、たゞおそろしううはごと云て、目を見だし、顔にあせしてくるしみける、後には坊主の一念かぶろに附、戀のうらみを口ばしりけり、斯てなを煩らはしく成て死にけり、かゝる病もある事にこそ、

四十四段　春の暮つかたのどやかに

ふかくむつびたる女郎の、しとやかに恨みつる、美しき顔のうすもみじして、いとふも腹たてず、打しほれたるさまあしからぬかは、物いひすこし打ふるひて悲しげなるに、うしろむきてつゝくりとしたる又うれし、ふすまのすき間より隣を見れば、かたち見よげなる男の、年三十あまりなる、ぐちなるさま見にくく、したゝるきさまして、よねのひざによりかゝりて顔見居たり、いかなる客也けん、たづねきかまほし、

四十五段　あやしの竹のあみ戸の内より

あやしの豆腐屋の裏より、いとわかき尼の弟子ならんか、其譯さだかならねど、ちいさき尼に、おかしげなる箱かゝへさせて出けり、つやゝかなる木綿の袷打かさねて、黑きはゝせばき帶なんどして、菅笠ふたり共にきし、其すがた又一風有しさま也し、いとふしぎに覺へしまゝ、跡につきたる尼に問けるに、しかじかとも得いはざりし、其後人に尋ねしかば、それなんびくにといへる色にて、むかしは小者やつこなどの遊び物也し、今やうは人によりて、客ぎらひもすなると語れり、いづみ丁八くわん町など宿在て日毎に行也し、わけて桶町たゝみ丁へ行を上品とすといへり、見まほしく覺へて、知れる人もとめてしたひ行し、ほそき路次を過るに、其匂ひゑならず、吹すびたる風にしたがへり、さ迄來るべき人もあらじと思ふに、したしく見ゆる人多くして、物語などしける、我も若きかゝの有内に入ぬ、友なひし人も入たる、二階に見ゆる雜具の、常よりはおかしく、見しれる下人な

どの入まどふに、ひとしほ悲き心ぞする、法師共あがりたり、酒ごとなどそう〳〵して、仕廻てはやふとん敷せり、窓よりさそはれ來る風に、坊主臭き匂ひ身にしむ心地ぞする、頭巾に針させるは鉢卷にて留ける也とぞ、宿の女房の吸物の用意など、人なき裏店なれども心遣ひしたり、心のまゝにしたればとて、暮迄はさら也、しばしもおくれんか、酒屋の御用とやらんかしましくあるきわたり、たいこ〳〵の聲さわがしく、色のさめて覺へより、胸のあしき心地してはやくにげ歸る事、あしも定めがたし、

四十六段　公世の二位のせうとに

嫁しうとめは中のあしき物にや、息子夫婦合のよきを、しうとめ惡みてよめを惡む事はなはだし、金銀多く持たれど子にゆづらざれば、人々ねぢかねばゝとぞいひける、常にやきもちずきなれば、しよがひばゝと共いひけり、其後孫出來けるが、ほどなく孫死ければ、孫くひのばゝとぞいひける、

四十七段　柳原の邊に强盗法印と號する

よし原の内に、是はならぬせうてつ坊と號する針醫有けり、常にくせにて、是はならぬ〳〵といひけるゆへに、此名をつけられけるとぞ、

四十八段　或人清水へ參りけるに

或時中の町を通りけるに、さん茶女郎禿をつれたりけるが、道すがらこと〴〵しくしかりもて行ければ、つれ立たる女郎、何事をか斯は呵り給ふぞと、ひけれども、いらへもせず、なをいひやまざりけるを、度度とわれてうち腹立て、助樣菩より御こし侍し、さつきを見ていらへもせず、何方へか御越侍しと申せば、只今もやもどり給はんかと思へば、爰に待とらやうと云けり、おもしろきわけなんけんかし、

四十九段　光親卿院の最勝講奉行して

或大名の兒小姓御持にて侍らひけるが、奥方へ召れて御前にありしあゆのすしを下されて、食せられけり、尾首共に喰ひて酒のみ罷出にけり、女房だちあらさもしの若衆の參りやうやと申合れけれ、武士の振舞やん事なき事也と、返す〴〵感せさせ給ひけるとぞ、

五十段　老來りて始て道を行せんと

すがれかゝりて、初めてつい禿つれんと思ひたつ事なかれ、ふるき備金、多くは是うはきの人也、はからざるに惡しきさたをうけてより、忽ちに客はら〳〵と切んとする時にこそ、過るかたのあやまれる事はしらるれ、客のきるゝといふは、他の事にあらず、速にもらふ場をもらはず、ぬすんで逢ふべき時を、なりあひにして過にし事のくやしき也、其時くゆともかひあらんや、よねはたゝ正月より煤迄の、身にせまりぬる事を心にひしとかけて、つかのまも忘れまじき也、さらばなどか物日々々の苦勞うすく、つとむる心もまめやかにならざらん、むかし有ける女郎、旦那寺より人來りて奉加の事をいふ時、答へていはく、今盆を身あがりにせし折ふしにて、既に小遣につまれりとて、奉加につかざりけるとぞ、上林十兵衛が申侍りし、二丁目のしのぶといひける女郎は、餘りに節句より節句の近き事を思ひて、假初の物日ならんとは、約束せる事だになくて、常は見世にうづくまりてのみぞありける、

吉原徒然草卷之一　終

吉原徒然草卷之弐

五十一段　應長の頃伊勢の國より

寶永の頃、房州浦より十六七斗なる美しき女と、同じ年頃なる貌よき若衆と、うつぼ舟にのせ、深川の邊へ吹付られしといふ事在て、其比二十日斗り、日毎に江戸中の人彼うつぼ船見にとて出まどふ、昨日は永代橋へあがりたりし、けふは八幡に參るべし、只今はそこ〳〵など云あへり、まさしく見たりといふ人もなく、空言といふ人もなし、上下只うつぼ舟の事のみ云やまず、其頃上野より回向院の邊へまかり侍しに、神田よりかみ樣の人、皆北をさして走りける、淺草川にうつぼぶねありとのゝじりあへり、兩國橋の邊より見やれば、見附の御番所のあたり立込たり、やはりあとなき事はあらざめりとて、人をやりて見するに、大形見たるものなし、暮る迄斯立さわぎ、果はどろぼう巾着切有て、あさましき事共有けり、其頃おしなべて二三日人の咳氣煩ふ事侍しをぞ、彼若衆女を見たがりける戀風也といふ人も侍りし、

五十二段　龜やま殿の御池に大非川の水を奥大名の兒小姓に、顔かたちいみじくしてちゞみ髪有、國者に仰て髪ばかりいはせられけり、多くの油をついやし、一日なでゝもちゞみたる髪のびず、色々思案してなで廻しけれども終に延ず、いたづらに詠られける、ちゞみたる髪ものびて、つとながく前髪立てめでたかりけり、萬づに其道をしれるものはやん事なき物也、

五十三段　仁和寺にある法師

赤坂にあるおやぢ、年寄までよし原を見ざりければ、心うく覺へてある時思ひ立て、朝とく獨かちにていにけり、朝にて在しまゝ、まださんちやに見世も出ず、道中もなし、西がしさかい町など見めぐりて、かばかりと心得て歸りにけり、扨かたへの人にあいて、年頃思ひつる事果しはべりぬ、聞しに過て淋しくこそおわしけれ、そもはつち坊主の多くかけ込しは、何事か在けんとぞいふける、少しの事にも案内しやはあらまほしき事也、

五十四段　是も仁和寺の法師

是も赤坂の屋敷方より、傍輩の國に歸らんとする名殘とて、四五人新宿の茶やに行、各遊ぶ事在けるに、醉て興に入餘り、傍なる砂鉢に沙魚の煮たるを肴に出したりけるに、頭より一口喰に、彼はせをひた〳〵喰ひけり、酌を取し女共をはじめ、滿座興にいる事限りなし、しばし喰ひける內に、獨のをとこ五六寸も有ける沙魚を一口に喰ひけるに、針ありけるを咽にたてゝぎく〴〵として物をもいわれず、酒宴事さめていかゞはせんとまどひけり、とかくすれば咽の內つまりて血なんどたり、只はれにはれみちて、息もつまりける、口よりかの針の糸少し出ける、引ぬかんずれどたやすくぬけず、譽きて絕がたかりければ、叶わですべきやうなく、雌子打かけて三人して手をひきかかへて杖をつかせて、京よりくすしのがり居ければ、行ける道すがら人のあやしみ見る事限りなし、くすしのもとにさし入て、向ひ居たりけん有樣さこそをかしかりけん、かりそめの物をいふもく〳〵もりて、とくと得聞へず、かゝる事は文にも見へず、傳へたるおしへもなしといへば、又赤坂へ歸て、したしき者老たる母など枕がみにより居てなき悲しめ共、答へんとも覺へず、かゝるほどに或者のいふやう、數珠玉をと

きて、口より出たる糸につなぎ引給へ、痛ずぬけなんとおしへけるまゝ、斯してじゆず玉に合せ引しやくりければ、やがてぬけにける、からき命まふけて久しくやみ居たりけり、

五十五段　御室にいみじき兒の有けるを

室町にはいみじき大臣ありけり、二丁目あたりの人もしれる女郎に深く逢ける事、人をせきてひとり客になん成ける、申每にかよひけるほどに、風流の遊興かたのごとく仕盡し、たよりよき折あらば、思ひよらぬ口舌してこまらせんはおもしろからんとて、無理の品々道々思案して、爰かしこの茶やなどあそびまわりて、有つるよねのもとに行けるに、はや晝顏もしぼみ、見世もやがてひけん頃也しに、いまだ宵の床の內に、いたう休み居けるかぶろなんど灯をどろかし、かしましく夢を覺しければ、なをも目覺ざりけれ、よひにいかふさしの過ければ、よく休みけるまゝ、はじめよりの事共しらぬよしさま〴〵に侘けれど、つやつや物もいはせず、かへらんよしにてかけ出しけるを、若い者抔いか斗とめけれど、言葉つきあら〳〵しくいひのゝしり、もがりの有ほど云ちらしかへりたるけしきにて、中の丁のしれる茶屋に來りて、こゝろにあたりつや〳〵ねいりけり、思ふほどねたりければ、黃昏時分にもあらんか目さめにけり、大あくびなどして湯づけなど喰て、きて今は二丁めへ行ておかしがらせんとて見世へ出けるに、隣にてきゝしれる聲して、しばらく聞居けるに、程なくとなりより人人出て歸るを見れば、逢ける女郎見しらざる男とつれ立て出けり、壹口舌して歸りける間に盜めるの也、かの客いと腹あしく聞にくき言葉して、いさかひ腹立てかへりにけり、あまりに興あらんとする事は必ずあいなきものなり、

五十六段　家の造りやうは夏をむねとすべし

比丘尼宿は夏をむねとすべし、冬はせまきとても苦しからず、あつき時はかば燒、はきだめの近きは絕がたき事也、大どぶは水ありても涼しげなし、淺き手洗に石菖うへさせ、こまかなる石をまき、鏈持はさみ箱持の氣をなぐさむ、二階の高きはうけん桶さし出すもふる由也、酒醉のあがりおりもあぶなし、ふつゝかなるぬれを見るも面白く、横町行ぬけ、片長屋こそよしとぞ人も定めあひ侍し、

五十七段　久しくへだゝりて逢たる人の久しくへだゝりて逢たる人の、居つゞけしつる事、數數の恨み哀也事共も、過し後は言葉もつきてあひなけれ、じよさいなくいひかわしたる人も、口舌の後見るはたがひにはづかし、すさまの客は門口より鳴わたり、息もつぎあへず語り興ずるぞかし、能大臣の座配は一坐あまた有こと、物毎しとやかにするを、おのづからよねも心澄るゝ也、はんかの人は大勢の中へ打出て、おとしのしれた咄しを語りなせば、皆人笑ひぞたつる、いとろうがわし、ゑい口ひたゝれなどゝふるひ地口いひても、たいこやくに請取てやるにぞ、金つかひながら人につもらるゝ事など、己れがそだちのあしきに引かけて、いひ出たるいと侘し、

五十八段　人の語り出たる歌物語の人のうた上るりなど一ふし云出たるに、ふしがいごのわろきこそ本意なけれ、其道の上手を聞たる人はいみじと思ふまじ、湯つぼ小やなどにて、云ならいたる人は、かたはらいたく聞にくし、

五十九段　道心あらば住所にしもよらじ道をたつる女郎は、やどかゝにもよらず、たゞほれたる人斗り思わんにかたかるべしといふは、さらによねしらぬ人也、誠は此客をとりはなさず、かならず曲輪を出んと思わんに、何と興ありてか朝夕酒に長じ、身をかへり見ず、人なみに勤る心は、縁にしてとはいへど、うり物なればうわきならずして、此道は行難し、其賣物は太夫格子は申に及ばず、さんちや以下迄も主親のうへをたすくる爲に、さながらばさらなるつとめになれて、道なきしよさなれば、おのづから聖賢のおしへに背く事もなどかなからん、さればとてとられず、さばかり爲に成客を捨んは無下の事也、さすが一たびたが殿達なりと、たとへ心にいらず共、一言の情にてちりげもとをぞつとさせ、しんしよも命もむしる程になれば、紙小袖の一通りのくわん禿、仕着せもいくばくか人のついへをなさん、かたちにはよらぬ物か、さはいへど惡にはうとく、美なるにはたがひに近付く事多し、全盛に生れつきたるしるしには、いかにもして氣のとをりたる人と、二世も百世もそはん事こそあらまほしけれ、大臣にほだされ偏へに歎を先に立、おか樣にならんはよろづに畜類にかはる所有まじくや、

六十段　大事を思ひたゝむ人は大事を守べき後家も、去がたきは色なんめれ、若年にわかれぬれば、しか〳〵の本意もとげず、さながら捨がたき道を、子ゆへにしばしかの事たへ果て、其事かの事と思ふ折から、さそふ水にうかれて、いな舟のいなにもあらず、人の嘲りもかへり見ず、行すへの難義も思わず、ひたすらに年頃の思ひもさぞと、其日待んほどいそがしく、何となく物さはがしきゆへ、後見の方へもしか〳〵のさた事のやふつくる者有、たびかさなればあらわに見ゆ、いひかわし候ことの葉も、いたづらにさそわれ人に身を任せ、思ひ立るをよしあしの沙汰にもあらず、一つくへが斯なん、一生何ほどの事かあらん、身をたすけんとすれば恥をかへり見ず、家財を捨のがるゝぞかし、命は人を待ものかは、無常來らば嵐とも成なん、老たる時古への子を尋たらんとて、いかで便りあらんや、身を立んと思はゞ捨がたき情をも堪ざらんや、

六十一段　眞乘院に盛親僧都とて京町の三浦に几帳とて、やん事なき全盛の女郎有けり、そば切を好みて多く喰けり、揚や歸り茶屋に客待、文かく片手間にも、まして煩はしき時にも、猶部屋に籠居てりやうじほどに覺へ、ひとりもくはず、折折やり手あひ部やの女郎、がぶろ下男迄も喰せける、客よりの附屆けは、小袖の外皆そば切と成ける、それのみか來汁は愚痴也と、江戸汁のみこのみ、其外人あつめしくわせける程に、出る時半分はすみのつるかや拂となりにけり、斯計らひける程に、茶やのごて樣いしやさま、揚屋のおかさま髪ゆひどの迄、有難き女郎と皆人申ける、此女郎のまねして、いまも二三人、そば切ずきの女郎在けるとぞ、其女郎太夫にも限らずくせ者にて、萬自由して張つよく、大がた人に隨ふと云事なし、氣にいらぬ客をばひとりそばにおき、つい立て歸る事もあり、夜なり共壹成共、ねむければ客腹立るもかまわず、目さむる迄寐たると也、又氣に入たる男なれば、幾夜もいねず、よのつねならず我まゝ大やうなるしこなしに、折々ぞつとする程うまき事在ゆへに、客もいとはずよろづゆるされけり、德のいたれる女郎なりけるにや、

六十二段　御座の時こしきおとす事は若き女の左の腕こよりにて結びくれよといひし、い

か成形にやと思ひし、そら手のをこる時のまじない也、わけしらずあしく心得、こゝろときめきてうれしがりしに、ふるき人に尋ければ、小うでのまじないとて、末に生れたる男の子に、左りの手を小よりにてむすばせぬれば、治するといひ侍りし、

六十三段　延政門院いときなくおわしましける時

山口の初ざくかぶろせし時、客衆へいゝづてとていひやりし歌、

ふたつもじ牛の角文字すぐなもじ
　ゆがみもじとぞ君はおぼゆる

こひしく思ひまいらするとなり、

六十四段　後七日の阿闍梨武者をあつむる事

芝居に通り者をあつむる事、狼藉けんくわの爲也、見廻の衆とて、一年中此者共に木戸をわたして、名題者を用む事おだやかならぬ事也、

六十五段　車の五緒はかならず人によらず

ふとん三つ重ねはかならず位によらず、全盛によりてきわむる、能客にあひぬれば成事也と、或人仰られし、

六十六段　此ごろの冠は

此頃の盃臺は、むかしよりははるかに高く成たる也、古代の臺持たる人は、内證の客に用る也、

六十七段　岡本關白殿盛なる紅梅の枝に

山口の小主水、盃に紅梅の折枝をしほらしく書てくれよと、田町のぬしやに仰られける、朱の盃に紅梅かく事、とり合あしからんと申ければ、傍輩の女郎衆と相談有て、又ぬしやに、さらば其方の思わんやふに書て給われと在しに、黒き盃に朱にてつぼみたると散たるとをかき、しべを金粉にて色どり參らせけり、青染にて五葉なん共書、枝のなかば小鳥なんどつけてもしほらしからん、松の枝に相生の枝も有、いとめでたからん、ふきはしゝらのよらぬやうに二重にぬひ、火のしをかけ、うづ高く包むべし、初雪の一座なんどに、白梅のもよう地白の小袖なんど、をもしろからず、雪に跡やくそくなし、あまたの者にはなを出さるれば、ひたひにあてゝはつ〳〵と云て退く、初ゆきといへど、下駄のはの隱るゝほどはめでたし、數多にはなちらす事は、いつに限らぬ事なれば、鷹のおとし餌のやうにやる大臣こそ、いかなるゆへにかあらん、

はな時しもわかぬといへる事、伊勢物語に見へたり、紙ばなはくるしからず、

六十八段　加茂の岩本橋本は

めうがやの但馬は新丁角丁也、人の常にいひまがひ侍れば、或時兩町の女郎の事、茶屋の亭主に委しく尋ね侍しに、新丁の但馬は下樣より經上り給へば、しなし少いやしき所見へ侍る、すみ丁の但馬は格子也、座しき大やうに古へのかた殘りて、やさしき女郎也と皆人申侍れど、我等より中々御存知などもこそさぶらはめと、いとこまかにいひたりしこそ、いみじく覺へしか、新丁の但馬も人々思ひつく風にて、能客あまた有ける、兩丁のめうがや共に家の立物也、誠に二人共にはやりて人々の取さたよし、文體手跡いみじき女郎也、

六十九段　筑紫に何がしの押領使

築地に浪人妾あつまりて居ける宿有し、女共四五人も浪人して有し事久し、或時亭主夫婦留守にて、館に人もなかりける隙をはかりて、盜人しのび入ける、館の内に水牛の甲冑を帶し數多の兵出來て、命もおしまず戰ひてみな追かへしてけり、いとふしぎに覺へて、女子共とひけるは、日頃爰に物し給ふとも見へぬ人々の、かく今の難義を救ひ給ふは、いかなる人ぞととひければ、日頃たのみて、ゆふな〳〵めし遣わるゝ物にて侍ふといひて失にける、ふかく愛しぬれば、かかる德もありけるにこそ、

七十段　書寫の上人は

長湖法師は、すいじやれの功つもりて、好色の道にかなへる人也けり、びくに宿の二階に立いられけるに、下に居ける比丘尼の申けるは、てんがいちこはひかわではないかと聞へけるを、二階の客はわるひ客かと申と知り給ひけるに、二かいに居けるびくにの、いやあちばこちばじやきち申けるを、あちらよきとぞ申としり給ひける、

七十一段　元應の清暑堂御遊に

四ッ谷地照寺にて花みせし頃、かす都といふ座頭三味線を引けるに、座につきてまづ調子をあはせたりければ、三の糸切たりけり、若きおのこ懷より糸取出したりければ、皆どよみてかんじける、女房達あまた有けるが、さゝやきていひけん、いか樣色ある人とおぼしき、折もあらばいゝよるべきなど聞へけるとぞ、

七十二段　名を聞より頓て面影は

名をのみ聞て、其をもかげもしらであこがれ、まして風俗しなしなどよき女郎は、極て三ケの色町にも限らず、當世にも有馬のふぢ、伊香保の江川など有とかや、むかし物語を聞ても戀にかわりはなけれど、家の風も全盛する女郎のしなしによる也、まして道中の出女などは、所々の國風あつておかしき事共あり、此頃も大磯の出女、砂のふりけるにつけて、十郎さまよき時からのかたき打との沙汰、見ぬむかしの虎が心中同前と、思われたきとおもふにや、

七十三段　いやしげなる者居たるあたりに

深く思ふよねのあたりに、したるき客のおほき、引込し禿の多き揚屋に、若ひ者のおゝき、夜るの物のふるふ成し物、前の文にことおほく書のせたる、多くてあしからぬ物、白小袖重ねたると、爲になる客、

七十四段　世に語り傳ふる事

女郎に久しく逢ふ事、誠にあぶなき事にや、多くはみなそらごと也、あふ人久しく物入たるに、少しの内に曲輪へのあゆみべだゝりけるに、約束の日を忍びて外の客にあひぬれば、やりてたいこのわけしり共集りて、いみじき手立などたくみ出して、はじめの深き客を出しぬかんとす、其事しりたる人はにくゝ思ひて、ケ樣の事きゝ傳し何事も替るは常也、かつはさたあしき事詮義し給へなど云時、その客誠しからずば、おもひながら人のしらせしまゝに氣をつくれば、空事にもあらず、何とやら心におちぬ事のみ出來て、人の云しつまに合て俄に水くさく成事あり、わがため面目なき事に云なせば、いたくあらがはねど、皆人のあしき取さた、さほどにもあらず物をなどいへば、いさめたる人も詮なくて閑居たる程に、後にはたれ有ていふ人もなし、とにも角に僞り多き里也、たゞよねにある珍らしき事と、つねに心得たらん、萬にたがふべからず、惡がしこき人は友をたのまず、すいなるは人をたのみてよしあしを聞、かくはいへど女郎の心によりて、あい方の氣によりて誠なきにもあらず、かくいふも詮なければ、大かたは相應にあいしらいて偏に信せず、またあらそひ嘲るべからず、

七十五段　蟻のごとくに集りて

蟻のごとくぞめきて、大手をいそぎ左右にはしる大臣あり、かんざぶあり、すいあり、やはあり、行もの

有歸る者あり、ゆふべにたのしんで朝にどゞ打、樂所何事ぞや、色になづみほだされてやむ時なし、よねをかけ込みて何の益かある、たのしむ所たゞ情と年の明るにあり、其間金つかふ事日々にとゞまらず、是をまつ間さぞまち久しからん、はまりたる者は前後わきまへず、色におぼれて借金の增事をかへり見ねば也、すいなる人は又これをかなしむ、おのれ一人にきはまりたると覺へて、外に色ある事をしらざれば也、

七十六段　つれ〴〵侘る人は

せかれたる人はいかなる心ならん、まぎるゝ方なくたゞ部屋にこもり有のみこそよけれ、世にしたがへば、心の外の客にもあはねばならず、爲になりがほにいふほどうるさく成て、座しきにある心地もせず、ことばじりをとり、まざ〳〵とした事をあらそひ、一度はなぶり、一度はかぶろを呵る客のおもしろき事なし、無分別度々をこりて、腹立やむ事なし、むせうに酒のみだれてねた内に、客のかへるを夢にしらず、ただひとりにほれて忘るゝ事なし、女郎の身持みな如ゝ斯、後は狹き局におろされからき目にあはん、誠の道をいはゝ、やぼふ男也とも、緣にまかせてふげんぼさつ請られ、西がしのあたりのおかさまとなる、心をやすくせんこそしばらくたのしむともいひつべけれ、大酒、ぶしまつ、短氣我まゝ、うはきをやめよとこそ、ばかしくわんにも侍れ、

七十七段　世の覺へ花やかなるあたりに

色の多くはなやかなる一座に、三味線も有小うたも有て、こよなふしめやかなる中へ、わかいものゝ玉子なんど鉢に入持出たる、さらずとも見ゆれ、さるべき故あり共、やり手は座しきへ出ずと有なんかし、

七十八段　世の中にもてあつかい草をいろふべき人ならぬ

世間に此頃人のうたひける小歌共、笑ふべきにはあらねども、色のあらん人の、またうたわんせうかにてもなし、さればはやり唄のはやく思る事、今宵二町目にて唄ひ出せしも、明日は角丁にてうたひまふに、片ほとりなる座頭法師などは、世の人よりはやく我ものゝごとく唄ひしれる、いかでかばかりはやくしりけんと、覺ゆる迄ぞいひちらすめり、

七十九段　今やうの事共の珍らしきを

よし原の珍らしき事ども云ひろめ、我しりがほなる

こそうるさけれ、江戸に事ふりたる迄、しらぬ人は心にくし、屋形衆のたま〳〵づにて見聞したる事、草屋敷へ歸りて、心得たるどちかたはし云ちらし、目見合せ笑などして、しらぬ人に心得ずおもわする事、きわめてやぼなる人のかならずある事なり、

八十段　何事も入たゝぬさましたるぞ

何事もしらぬさましたるぞよき、とふり者はいふべき事とて、さのみしり貌にやはいふらん、かのさし出たる人こそ、萬のみちに心得たるよしの貌付はすれ、されば世にはづかしき人のおもはくといふ事もあれど、みづからいみじと思へるけしき、かたくなゝるよくがてんしたる、すいは必らず口おほくうはつかず、出來口などもいはぬこそいみじけれ、

八十一段　人毎に我身にうとき事を

人ごとに我身に相應せぬ事のみぞこのめる、法師は小歌をならい、女郎はそろばんをしり、揚屋の女房はきやしやに見られたがり、茶やのてい主は客あいしらいをしらず、佛法をのみしらんとす、されどおろかなるおのれが道より、なを人におもひあなづられぬべし、夫のみにもあらず、太夫格子かみさま迄おしなべて、間夫をこのむ女郎多かり、百度忍て百度かくすとも、いかでてれんの名を隱さまし、其ゆへ色と名づけて內證の世話さするは、よくらしきにあらずといふ人なし、つれ聞つけ客しりなばつゐにすがるべし、客計大事にして、後は身請など名を顯わすべき道也、つとめ出んほどは色にほこるべからず、よめ入に近くなり、ちまひつとめんに、ちかきふるまひほむる事にあらず、このみて益なき事也、

八十二段　屏風障子などの繪も文字も

屏風懸物なども、うは繪かき又は菱川葉のうき世繪書たるが見にくし、亡八も女郎もつたなく覺る也、大かた持る調度は、床逆ひ棚出格子に取ちらし、たんすつみかさねたるは、尼店に似たるなんど長潮も書たる也、萬の物すぎは、いき過たるやふに見へて人形はくぢ也、たゞ女郎は身の內の道具ふそくなく、床の內のよきのがよき也、

八十三段　うす物の表紙は

すゞしの羽織は、とく損するが侘しきと、しわひ人のいひしに、又通り者はかるくてよし、羅紗のはおりは雨に逢たる後もいみじきと申侍りしこそ、心まさりて覺へしか、一むれに屋形女郎の行に同じやふにあらぬを、見にくしといへど、かうしや者が時服など、かならず一やうにそろへたるは、づたなき者のする事也、ふそろひなるこそ人々の物すき方も見へてよけれといひしも、いみじく覺し也、もやうもしつこからずしのこしたるを、扨うちをきたるは、おもしろくいきのぶる業也、

八十四段

市村竹之丞かゝへの若女形坂田荻之丞、一枚かんばんにあがり給わんに、いかなるゆへんかおはせんなれ共、めづらしげなし、横かんばんにて居給ひけり、とをりものゝ評判師此事をきゝ、若ひがこうしやと、月みちてかけ、狂言當りては又替りに淋鋪、萬の事みなかくのごとし、さきのつまりたるきせるは、がん首のやぶれに近きみち也、

八十五段　法顯三藏の天竺にわたりて

龜やまに花の六藏といふまど、關に思ふ者ありけり、中仙道へゆかで叶わぬ事の有て、心ならず程經にければ、古郷の事を思ひてはかなしまず、かの女の事をしたひて病に臥にけり、割のかゆを願ひけるを聞て、さばかりのおのこの、無下こそ心よわきけしきを、よその國にて見せけると人のいひたりし、關の小まんはいふに情有ける女にて、六藏にちぎりてより、山川をこへて龜山へかよひて、二度こと人にまみへざりしこそ、心ざしやさしく覺へし、

八十六段　人の心すなをならねば

よねの心すなをならねば、僞なきにしもあらず、されどおのづから色にうつる事などかなからん、隙なる女郎は、傍輩のはやるを見てうらやむはよねの常也、いたりて情しらぬ女郎は、たま〳〵すなをなる女郎見て、是をにくむ、よき客と見ては、初會より且親方をだましてかはゆがられんとす、おのれが心にたがへるによりて、只わるロをいふにて知ぬ、かやう成女郎能客附べからず、ぎうやり手にもにくまれぬべし、かりにも情あり顏にせよ、奴の眞似とて道中を大またにありかば、則ちやつこ也、張りつよきとて、やぼをふるはどうよく也、つとめてこそうそつく斗にもあらず、まして能客斗はたのもしきにもよらず、僞ても情らしうするをよき女郎といふべし、

八十七段　惟繼中納言は風月の才に

玉屋新兵衛は好色をたのしむ人也、三國一のやさおのこにて、歌にも作りて世の人唄ひはべりける、或時めかけ密通の事ありけるを、いと腹立て髪をそりて追出しければ、皆人嘲りて、いまより比丘尼玉やとこそ申べけれといひけり、おかしき秀句なりけり、

八十八段　下部に酒のまする事は

下部に酒のまする事は心すべき事也、番丁へすみけるおのこ、京町へかよひ、みなとやのみなとに、常に申むつびけり、或時夜ふけて歸ること在しに、はるかなる程也、供のお人に先一度させよとて、酒を出したれば、さし請〳〵よゝとのみぬ、脇ざし打はさみてかひ〳〵しげなれば、たのもしく覺へて相具して行程に、土手の取付にて、怒龍昇のあまた立て居たるにたち向ひて、夜更也あやしきと脇差抜ければ、人もみないきづへふり上げなどしけるを、主人手をすりて、うつゝ心なく醉たる者にて候、まげてゆるし給わらんといひければ、各嘲りて過ぬ、おのこ主に向ひて、さて〳〵口おしき事し給ひつるもの哉、おのれゑひたる事侍らず、高名仕らんとするを、ぬける脇ざし空しくなし給ひつる事と、いかりてひたと振廻して、扨どろぼうとの〳〵じりければ、人々おこりて出合、彼をこそ追はぎよとい〳〵て、走りて切まわりけるを、數多して手をお〳〵せ打ふせてけり、扨みなとやへおのこ共數多はしらかしてければ、主人はみの輪にゑいふしたるを、求出てかきもてきつ、からき命いきたれど、やしきへをそく不首尾になり、どらを打にけり、

八十九段

或者酒のたはぶれに、お名をば得申まいらせぬとうたひ、是はりうたつが端唄より出たるなど、いと興じけるを、或人それは戀草と云うたひ、曲舞の留なるを、りうたつがうたわん事時代やたがひ侍らん、覺束なくこそといひければ、左候へばこそ、小歌上るりなどに、うたひの文句を取たる事多し、是も戀草のうたひを龍達取なしたるべし、めでたし〳〵とて愈唄ひけり、

九十段　奥山に猫またといふもの

二町目の萬字屋に、猫またといふ者ありて、人を喰ふなると人のいひけるに、本丁大黑やのわかいもの聞て、獨りゆく身は心すべき事と思ひける、二丁目のあたりにて、音に聞へし猫また、あやまたず足もとへふと寄來て、やがて飛つくまゝに、首のほどくわんとす、肝心もうせてふせがんとするに、力もなく足もたたず、見世の内へころび入て、たすけよや猫またよや〳〵とさけべば、家々よりぎうどもはしりよりて見れば、見知れるもの也、こはいかにとてだきおこしたれば、賣懸の帳、ごふくもの、符帳抔、ふところに持たりけり、よごれぬ希有にしてたすかりたる樣にて、ほう〳〵曲輪を出にけり、麁相なるかぶろ、客衆を取ちがへて飛つきたりけるとぞ、

九十一段　大納言法印の召仕し

巴屋の矢橋が召仕し松彌といふ禿、扇やの茶やとむつまじくて、常に行通ひしに、有時出て歸り來るを、矢ばせいづくへ行つるぞと問しに、扇やほれん山さまの客のおわせしが、うつくしき若衆見候と云、其客は町人衆か屋形衆かと又とわれて、袖かき合せて、いかゞ候らん、其わけは見候わずと答へ申き、などか其風がらもしらざりけん、

九十二段　赤舌日といふ事陰陽道には

借錢日といふ事こよみにはあらず、物日大晦日の事を、此頃何者かいひ出しておそれけん、此日かりたる物をなし、諸事を定る事也、誠に大三十日には、時ならぬ神參り年籠りなんどして夜明て歸りぬ、女郎なんどは、馴染ある客に無心いひかけて、其日と延ばされ、煩ひにして引込、醫師の藥でも祈念でも、なおらぬ物は物日也、此日に限らず萬事の淺ひ拂方あらば、有にまかせておくるべし、時ならぬに送りたるとて、腹立者有まじ、女郎は常に不器量に見ゆるとも、たのもしき方あらば、大切にしたるこそ本意ならめ、顔能に任せ、たま〳〵にもらひたる物迄、色にふけりおくりたわむるゝゆへ、外のなじみもなく、物日などはとりわけ常より勤なんどもみやすからず、さあればとてたのむべき方もなし、金銀は形よきにあらず、人によりてある也、心中も人がらにはよらず、まづしきにもあり、金は兩替屋の見世にあり、色町の夜見せにはあらず、

九十三段　或人弓ゐる事を

或女定まれる夫をきらふて、間夫を持事あり、間夫をいとをしみ、實の夫に氣をかへ、向ふ見る人の男女二人夫を持事なかれ、間夫をたのしみて誠の夫を失わんとす、定れる夫をたのまば、賢女ともいひつべけ

れ、間夫に節にする事、物事定らざるにもあらず、又色にもあらじ、いたづらに心うばわれて、終に其身を失ふ、假初のたはむれにもゆるさるゝは此常也、念比なる言葉さへ人の咎るぞかし、ゆうべに糸など取て、晝はぬいものして、萬事に心遣ひあらんこそ世帶の身持其いふべけれ、なんぞ實の夫を他になして、間夫を好は甚だふときこゝろ也、

九十四段　牛をうる者あり買ふ人

女郎を買ふ者あり、つとめなんど、拂て物せんとせしに、其夜なじみの客來てもろふ、買ふ人損有と腹立、ぎうの云、もろふ人は買ふ人よりも常に損あり、なじみ深きゆへに、物事に付て元のかねのついへいくばくぞや、一時のたのしみ萬歳のたのしみ有、女郎のあたひは野郎よりかろし、好色を學んで家を失なわん人、損有といふべからず、皆人遊興の床にて、おくせざるぞたのしからんや、また女郎にねたみあらば、物日などたがへたるこそ、存外のわるじやれおかし、約束のたがひたるにへだてられ、せひなくいもきかけ的勝負事なんどもつらなり、財を失ふ、又他の財をうらやむは、手の長き方にやはべらん、一生定をる事なければ子孫もなく、年のよはひに恐れて、他に家をゆづらんと斗れども、ざいなければ其義もあらず、近附の方に便り、家代をやす〳〵とせられて手を打てのく、人いよ〳〵あざける、

九十五段　常盤井の相國出仕し給ひけるに

下やしき守りの若き男、釜拂になじみ有けるが、旦那の來りて掃除拭いひ付居けるに、かのみこ、御やくそくに任せ、參りたるよしいひはべりければ、とかふの挨拶もなく、たゞうつぶき居たりぬ、又其後來れば、殊の外立腹して、鈴の音さへあらば來りぬとはしるべきに、色のいたらぬ者也とて、深き契りをやめけるとぞ、

九十六段　箱のくりかたに緒を付る事

羽織の胸ひぼつくる事、ぬい付たるがよきかと、たのもしの人に尋侍りしに、ちゝを付ていろ〳〵付るやう取かへて付る有、是しまつにあらず、ふんどしははゝ廣なるがよし、ゆくにひぼ付る事、色里にはあらず、

九十七段　めなもみといふ草有

女にろくろ首といふ有、ろくりに赤き筋三すじ有といふ、見しりて置べし、

九十八段　其物に付て其物を

其物につきて、其物をついやしそこなふ、數をしらず有、身に色有、家に妾あり、國に遊女あり、やぼに鼻毛有、君子に腎張有、僧にお大黒あり、

九十九段　たふとき聖りの云おきける

たふとき比丘尼のいひおかれける事を書付て、一生有樂とかや名付たる草紙を見侍りしに、心に叶へる物あらば、かたりても求めたるがよし、女のいたづら事も、一人二人も心にかなへる方あらば、幾人も寐たるがよし、後世なんど思わん事、しんださき一人も見たる事なし、持佛堂の本尊も、作法などおかぬがよし、

上良も喰たき物あらば、しんこなどはいふにたらず、くはしくだ物に至る迄袂に入、夜はふとんの下に入置、下良の眞似したるがよし、

金物はめつたにつかひ捨、一生たのしみたるがよし、一門の異見用ぬがよし、家財もなくして後には乞食の聟に成、三國一のとり打濟したなんど、唄ふも、色なればたのしからんや、此外の惡所をのがれ、高木にかけられぬやうにたしなみたるがよし、

百段　堀川相國は美男のたのしき人にて

巴屋の玉川は、全盛のたのしき女郎にて、其事となく過禮をこのみたりけり、かぶろ小鷹を風流に殊にしたて〳〵遣ひけるに、雨のふりけるおり、笠斗にては小袖ぬれ見ぐるしとて、いたいけなる木綿合羽を、めで度拵へ改めて着せられけるに、上古より禿の合羽を着たる事、其はじめをしらず、數十年を經たれ共聞ず、累代子共はこましやくれざる以てよしとす、新敷事たやすくさせられ難きよし、名主殿も申ければ、二三度きせけれど其事やみにけり、

吉原徒然草卷の貳　終

吉原徒然草卷之三

百一段　久我相國は殿上にて

山口の小夜衣は、桐屋の臺所にて朝酒をまいりけるに、かぶろ盃を奉りければ、茶碗まいらせよとて、ちやわんしてぞまいりける、

百二段　或人任大臣の節會の內辨を

或人新町巴屋關の井に、初約束にて逢ける、歸りける途いかゞしけん、年比いとしと思ひける若衆の、よみて歌書ける扇子を取おとしける、きはまりなくおしけれど、立歸り取べきにもあらず、思ひ煩ひ玉鉾に立やすらひけるに、關の井かぶろを語らひて、かの扇をもたせて忍びやかに奉らせけり、いみじかりけり、

百三段　尹大納言光忠入道

三浦のにし木々新丁へやられ給ひけるに、糸櫻殿に次第を申請られければ、おいわ女を師とするより外の才覺候わじとぞ宣ひける、かのお岩は老たるやり手の、能事になれたる者にてぞ有ける、或時揚屋丁にてあひたりける客來り給ひける時、にし木々たばこ入を忘れて座敷を立給ひければ、お岩はし子の際に候ひけるが、まづ湯づけを召るべくや候らんと、しのびやかにつぶやきける、いとおかしかりけり、

百四段　大覺寺殿にて近習の人共

揚屋にて女郎集り、なぞ〳〵を作りてとかれける所へ、たいこの與助參りたりけるに、關といふ大臣、與助は此國のしよく人にあらずと、なぞ〳〵にせられけるを、から紙やとときて笑われければ、腹立てぞ歸りける、

百五段　荒たる宿の人目なきに

荒たる宿のさま哀なるに、親にはいかる頃にて、つれづれとこもりたるに、なれにし若衆の訪らひ給はんとて、夕づく夜の覺束なき程に、忍びて尋おわしたるに、犬の事々しくとがむれば、宿のかゝの出ていづくよりぞととふに、しか〳〵と云て入給ひぬ、心細げなるあり樣、いかでか過すらんといと心ぐるし、あやしき上り口にしばし立給へるを、鹽たれたるけはひ哀らしき聲して、こなたへといへば、丸太はしごがたがたとしたるよりぞ上りぬ、二階のさまはいたくきれいならず、心かなしく火はきたなき火燈なれども、物のあやなど見へて、俄にしもあらぬ匂ひ、いとしたるふ住なしたり、門戸よくさしてよ雨もそぼ降、よごれにしやくわんは窓の下に、御供のでつちはそこそこにといへば、今宵ぞ蚊にせゝられぬべかんめれと、打さゝやくも忍びがたし、味噌するも程なければほの聞ゆ、さて此ほどのかなしき事ども、こまやに聞へ給ふに、夜更鳥もなきぬ、あやしき夜の物うちかけて、まめやかに御物語に、此度は鳥もあわたゞしき聲に打しきれば、雨はのし背の板間よりしたゝり、夜ふかく廻る拍子木の音しげく、ちとまどろみ給へるに、反古張の窓のひま白くうつり、豆引臼のひゞきにわすれ難き事なんど云て立出給ふに、紙張も珍らしく鳴渡る蚊のかしましく、時鳥のかよふ曙の艶におかしかりしをおぼし出して、かなしさも忘れ、門に豆腐桶の大きなるが隱るゝ迄、今も見送り給ふとぞ、

百六段　北の屋かげにきへ殘りたる雪

北八丁堀邊を通りけるに、夜更ぬれば往かふ人なく、こぎ寄たる舟の笘も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれ共、隈なくはあらぬに、積置たる炭薪の濱に、下部にはあらずと見ゆる男、女としめやかに物語する樣こそ、何事にかあらんと聞給ひにし、夜だかなりけれ、髪かたちいやしく見へて、得もいはれぬ匂ひの、靑くさきこそおかしけれ、餞ばらひのおとかすかに聞へたるも笑止、

百七段　高野の證空上人

大名もどりの手かけ、用の事ありて本所邊へ行て、暮て兩國橋をわたりけるに、夜だかとかやに行合たりけり、夜鷹に附し男あしくよけて、手懸者をつき倒しけり、手懸者いと腹あしくとがめて、こは希有の狼藉かな、素人ではないわいな、妾者より傾城はおとり、傾城より茶屋者はおとり、茶屋者より綿つみはおとり、わたつみより比丘尼はおとり、びくにより夜鷹はおとれり、如レ斯の夜がたの身にて、未曾有の惡行成といゝければ、おとこ、いかに仰らるゝやらん、得こそしらぬといふに、なを息まきて、何といふぞ、非修非學の男めと、あらゝかに云て極りなき放言しつと思ひける氣色にて、濱町の方へにげられけり、おかしかりけるいさかひ成べし、

百八段　女の物いひかけたる事

よねの物云かけたる返事取合ず、能ほどにする男は

有難き物ぞとて、中の丁の茶やにて知られたる女郎共、客達の參らるゝごとに、喜世三に逢んしたかと聞て心みられけるに、何がしのさんとやらは、數ならぬ身は得逢も候はずと答へられけり、まへ小紫にあひける男は、ゑびやにてちよと逢ひて候ひしやらんと申されたりけり、是はなんなし、數ならぬ身むづかしとの取さた也、すべておのこはよねに笑はれぬやうに心がくべしとぞ、伊勢やにて花紫に逢ける男は、おさなくよりよく誰人かおしへまいらせけるやらん、揚屋丁はじめてより太夫にぞかゝりけるとかや、屋形客は茶屋の下女の見侍しにも、いとはづかしく心づかひせらるゝとこそ、山口の音羽はかける、女郎のなき世なりせば、衣紋も髪もいかにもあれ、引つくろふ人もはべらじ、斯人におもはるゝ遊女いか斗いみじき物ぞとおもふに、傾城の性皆さもしく、貧なる親賤しき兄のかなしき暮しにて育ち、おかべのから買にありきけるにてそだち、父母はらからの爲に今の勤也、されば色はもと也人我の相ふかし、貪欲多くはふかきかち也、物の理をわきまへず、たゞうそをかざり詞もたくみに、苦しからぬ事もとふ時はいはず、用意あるかと見れば、又あさましき事迄とはず語りに云出す、ふかくだましかけん事、男の知惠に增りたるかと思へば、其事跡より顯るゝをしらず、すなをならずしてつたなきものは遊女也、其心に隨ひてよくおもはれんは心うかるべけれ共、又一筋にさにもあらず、されば何とかして恥かしき事も、人目外聞を捨て取みだしぬるも有、是等はうそも有まじ、たゞ色をあるじとして、物云内にもはづる内は、やさしくもしたわしくも恐ろしくも覺ゆべき事なり、

百九段　寸陰おしむ人なし

遊山金おしむ人なし、是欲をわするゝか愚か成か、おろかにしてむだづかひする人の爲にいはゞ、揚錢かろしといへども、是をかさぬればいとしき女郎を請出す業もなす、されば茶屋の一角を悅ぶこゝろ切也、せつなしといへ共此たのしみやまざれば、身體を失ふ期忽に至る、されば有德なる人しわく金銀をおしむべからず、只今の一念空しく過る事をおしむべし、若人來りて我あい方明日は必里を出べしと告しらせたらんに、けふのくるゝ間何事をか賴み、何事にて歟心を慰ん、我等かひけるけふの日、何ぞ其時節にことならん、一日の内に食悅床入手れんこそ、たはけ止む事を得ずして多くの寶を失ふ、その餘りの餘情いくばくならぬ内には、無益の費へをなし、無やくのふりをして金をつかふのみならず、さたにあい、純にいはれでたはけを盡す尤愚か也、すいは人目につかいかくるやうなりしかども、常に心にしまりてむだづかひなし、野郎女郎の一座をせざりき、人はかたくな也とて、若き中のまじわりをゆるさゞりき、暫くもこれなき人は死人に同じ、あたら光陰何の爲にかたのしむとならば、内にりんきなく外に借錢なくして、やめん人は止め、修せん人は修せよと也、

百十段　高名の木のぼりといひしおのこ

高崎の旅人念比成人に異見しける、前揚屋へ行て太夫に逢ける時は、いふ事もなくて、いまさんちやへ逢けるにいき過すな、心して異見しはべりしを、以前金つかふ時はさもなく、今かばかり物もいらぬにかくいふぞと申侍りしかば、其事にも物むづかしき太夫にあふ時は、おのれが恐れ侍りし、什廻しはやすき所になりて必ず仕る事に候といふ、あやしき田舍人なれ共、すいのいましめにかなへり、

百十一段　双六の上手といひし人に

遊女をかけ込上手といひし人に、其わけをとひはべりしかば、かけんと逢べからず、かけられんと逢べし、一度成とも圖に來らんに、肩を入て逢べしといふ、情をしれるおしへ、よねにかはひがられん道も又しかるなり、

百十二段　園恭双六好みてあかし暮す

横間夫このみてくどきあるく人は、四重五逆にもまされる惡事とぞ思ふと、或やり手の申し事耳にとゞまりて、いみじく覺へ侍る、

百十三段　明日は遠國へおもむくべしと

明日は遠國へをもむく客衆也と云は、もろふ時の言葉定まれるかく也、こゝろしづかにもらいなん時には、きやく腹たつまじ、俄のやうにいとそうぐしくなす事は、客も氣を持、他の事も聞入ず、女郎のふきげん悅びをもかまわず、問ずしてやと恨もせず、又まいるべしなどいひて、やう〳〵歸りたるやうにして、行跡のさみしさ去れば、夜もやう〳〵たけ臺所も鎭り、いはんやあたりの咄しの音も絶たらん比、又思ひ出すべし、獨座敷に寐て知らぬよるの物打きて、いづ

れの事、さり堅からぬ世間のもだし難にまかせて、淋しくあかせば、心も苦しくいとまもなく、寐ずの男をよび、わかしざましの酒にて心をたのしむ、我より深き客にさへられて、今宵過なんか夜明待遠し、曉すでにね入たる、諸事をがてんすべき時也、色をも思はゞ此里の義理守らじ、此心をも得ざらん人は物狂ひともいへ、うつゝなし情なしとも思へ、そしるともくるしまじ、ほむる共聞いれじ、

百十四段　四十にもあまりぬる人の

三十にも近からん女郎の、いまだじまひつとめんに、おのづから借金あらんはいかゞはせん、殊に茶やなどへ打出でず、かれを隠さんとせば、人の上猶たけはづむ程ならん、その身かはつるゝ禿など、心いつばいとおもへど、いしやう付にげなく見苦しけれ、大形見ふるし、脇の目笑止、すがれし遊女の時、老人に交りてくろめんと氣ぜうはりたる、數ならぬ年間の世の覺へ、妹女郎をいやしみたる言葉つき、まづ敷女郎のうまひ物好み、數もなき客にひたと無心斗いひたる、

百十五段　今出川のおほゐ殿

菱屋の若紫殿揚屋町へおわしけるに、雨降にければ乘物にて出給、ひぬ、禿のしやりん、茶や町の前やり給へといひければ、見世先を昇て行けるに、茶やよりあやしき水なん表へ捨けるとて、怨籠へかゝりけるを、お祝い跡より參けるが、希有の童かな、かゝる所へ御乘物やるものかと云たりければ、若紫殿御氣色あしく成て、おの〳〵賤しき禿の呵り樣かな、希有のやり手成とてあて〳〵しくとがめ給ひけり、此かぶろは若紫殿秘藏の禿ぞかし、此わか紫どの其比かぶろ三人侍りけるが、禿の名共一人はいろ香、一人はしやりん、一人はかせんとつけられけり、

百十六段　宿河原といふ所にて

源太郎といふ比丘尼、人々戀したひて逢たがりけるまゝ、全盛繁昌の女郎のごとしとぞ申けるに、外より入來る人々をばさもなく、米やのむすことかやと、行末は髪をもたて、ひよくの枕をもかわさんと深くいひむつびけるに、何院とかやいひける山伏の、ふかく思ひ妻とせんよし、かのびくにの師なる法印に度々いひ送りけるまゝ、わりなく思ひてやりてんよしを答へければ、比丘尼かなしく、彼男に逢奉りて、がうかうと語りて、此事申さばやと思ひて尋申也といふ、

色男、ゆかしくも尋おわしたり、去事侍りき、爰許にて思ふまゝになし奉らば、主じの恐れ侍るべし、便りよからん方へ參りあはん、あなかしこ脇指持給へ、何方へもさたし給ふな、餘多の耳へいらば、心中のさまたげに侍るべしといひ定めて、二人深川へ出合て、心ゆく斗につらぬき合て死にけり、びくに遊女のごとく成事、むかしはなかりけるにや、近き比に、小つる小りんなどいひける者其はじめ也、世を捨たるに似て色をかざり、佛道を願ふ事はなくてうかれ女の如くす、放逸無慚の有樣なれども、死をかろくして少もなづまざる方の、いさぎよく覺へて、人の語りし儘に書付はべる也、

百十七段　寺院の號さらぬ

女郎の名、さらぬかぶろに名づくる事、むかしの人は少しももとめず、たゞ有のまゝにやすくつける也、此比はふかく案事、才覺を顯はさんとしたるやうに聞ゆるは、いとむづかし、今むらさき、はつ櫻などめなれぬ名を付んとする、益なき事也、何事も珍らしきを求め、異說をこのむは、うは氣なる人の必ず有事也とぞ、

百十八段　友とするにわろき物七つあり

腎藥によき物七つあり、一つには地黃丸、二つには玉子、三つにはうなぎ、四つにはとせう、五つにははまぐり、六つには山の芋、七つには午房、あしきもの三つ、一にはくわね、二にはさんせう、三つにはにんにく、

百十九段　鯉のあつ物喰たる日は

鯉のあつもの喰ひたる日は、髪そゝげずと、男色好む人はおこたらず喰べし、こいの指身こそ女中もまいる物なれ、やん事なき魚也、なまこ得て好む物也、松茸などは其形おかしく心うき事也、座敷持たる女郎の袋棚に松たけの有つるを、客見出して歸りて次の日文して、ケ樣の物さながら其姿にて棚におかれし事、見ならはずさまあしき事也、はか〳〵しき姉女郎のさふくはぬゆへにこそと申送りける、

百二十段　鎌倉の海にかつほと云魚は

新場の肴店にふぐといふ魚は、河さかいには左右なき物にて、此比もてなす物也、夫も品川の年寄の申侍しは、此魚おのれらわかゝりし世までは、はか〳〵敷人の前へ出る事侍らざりき、おく病成は下部もくは

ず、ケ様の物も世の末になれば、今は中の町の茶屋にて、よね達の口へも入たつわざにこそ侍れ、

百廿一段　唐の物は薬の外はなく共

揚屋の喰ひ物は玉子の外なく共腹立まじ、酒は下戸成共色の道引なれば、吟味して出してん、おあしのたやすからぬに、無用の物ども数多くこしらへ、所せくならべおくいと愚かなる、客衆はくわずとも又女郎はまいらず共、とりきみ出したるいとおかし、

百廿二段　やしないかふ物は

養ひかゝへおく物には、かぶろのいとけなくてつとめくるしむこそいたましけれど、斯せでは叶はぬ物なれば、いかゞはせん、やり手は守りふせぐのつとめ、おとこにもまさりたれば、必ず有べし、されど家毎にかしづくわざにぞすれ、こと更にもてなさずとも有なん、其外としま新造すべてむごく、いたまわりなき物也、太夫格子は揚屋にこめられ、さん茶は見世に入られて、客をこひ古郷を思ふ愁ひやむ時なし、其思ひ身にあたりて忍び難くば、心あらん人間夫をたのしまんや、生を苦しめて金をもふくるは亡八の心也、客の女郎を愛せし茶屋に出て遊ぶを見て、友として慰とらへ苦しめたるにあらず、凡大門より外へはかぶろならずして出さずとこそ申侍る也、

百廿三段　人の才能は文明らかにして

女郎の才能は、文すら〳〵として客の目によめるを第一とす、次には琴線事、むねとする事はなくとも是を習ふべし、客のなじみなきうちのけしきあらん爲也、次には小唄を覺ゆべし、客をかけ人を慰め、全盛のつとめも小歌、かり初にもなくては有べからず、次に三味せんひく事女郎の常也、かならず是を心がくべし、小歌さみせんの道、誠にかけては在べからず、まなばざらんを景のなきよねと人云べし、次にかけは女郎の情也、よく味ひを覺知れる人は、大きなる德とすべし、此和歌の道少し心がけたし、萬の助けになりなん、此外の事共かるたなんど、色かざる身の恥る所也、夫もつい待内なんどはくるしからまし、古歌多く覺へ、香きゝ、手跡つたなからざらんは、妙なる女郎の業、客も是をあなどらずといへども、いまの世には是を嗜みて全盛をきわむる事、漸愚か成に似たり、二挺立勝れたれど、駕籠の益き多きにしかざるが如し、

百廿四段

無益の事をなして金遣ふ人を、やぼなる人とも、あほふなる人とも云べし、樂しみの爲女郎の爲に、止事を得ずしてなすべき事多し、其むだ遣ひの金銀いくばくならずと思ふべし、色の爲止事を得ずしていかなむ所、第一に金子、第二に着物、第三に腎水也、好色の大事此三に過ぎず、懸られずそゝらず、たいこにだまされずして、しづかにたのしむ事すいとす、たゞし人みな腎虚あり、きよふんにおかされぬれば、其愁ひ忍びがたし、腎薬を着るべからず、是をかへて四つの大事求め得ざるをひん客とす、此四つかけざるを大臣とす、此四つの外色ととらんとするをやぼとす、四つの事儉約ならば誰の人かしはむしならずとせん、

百廿五段　是法師は淨土宗に

彌法大師は若道の元祖也といへ共、衆道の法をたてず、ぼんのふをはらし出家を立らるゝ有様、いとやぼらし、

百廿六段　人におくれて四十九日の佛事

つまにおくれて一周忌の法事に、旦那寺を請じ侍りしに、ふじゆ文哀にして、皆人泪をながしけり、和尚歸りて、彼日行の人ども、いつより殊に殊勝に覺へ侍るとかんじあへりし返事に、或者の曰、何共候へ、あれ程跡經に似候なんうへはといひたりしに、哀もさめておかしかりけり、さる御寺のほめるやうやは有べき、又客をせきておのれひとり客に成なんとするは、下戸の酒をしゐんとするに似たる事也、のみもせざる身にて人をしゐる時は、先我ことふなふ醉て人をば得つぶさぬ也、おのれ先つかい懸て客共をきらすとも、人はよもほめまじと申き、大酒して醉くるひてもしたりけるにや、いとおかしかりき、

百廿七段　ばくちのまけきわまりて

節句前になつて、うれしき文來らば、あわてゝ行べからず、極めてせつくたのまるゝとしるべし、其時をはづす、かひずき買人といふ成と、或者申き、

百廿八段　改て益なき事は

金つかふて益なき時は、つかわぬをよしとする也、

百廿九段　雅房大納言は

山口の初いとは情深くよき女郎にて、若狹屋の客請出ばやとおぼしけるころ、わる口成女郎、只今淺ましき事を見侍りつと申されければ、何事ぞと問けるに、

初いとかぶろをせつかんし給ふに、しゆろ箒にて息もたゆる斗に、ちよふちやくし給ひしを、見侍りつと申されけるに、うとましくにくゝ思ひて、日比のかわゆさもたがひ、身請もし給わざりけり、さばかりの女郎禿をしかりたりけるは、思はずなれど、しゆろぼうきは跡なき事也、空言は不便なれども、かゝる事きゝてにくみ給へる客衆の心ざし、いとふとき事也、大かたいとけなきものをしかりつねりたゝきて、つよく呵らん人は、ちくせう殘害の類ひ也、すべて禿は、ちいさきより此里にうられ、多くの人にいじられ、親にすてられ、姉上郎にしかられ、ねむたきをこらへ、夜晝のわかちなくつかわるゝ事、偏に子共成ゆへにつかわるゝ事甚し、渠に苦しみをあたへて强くしからん事、いかでかいたましからざらん、すべて幼なきものを見て、慈悲のこゝろなからん人は人倫にあらず、

百卅段　顏回は志し人に傾城は心ざし人に全盛をおとらじと也、物をもらいだます事、恐ろしき盜人の志しにもおとるべからず、又やぼなる人をかけ、てれんにはづませて身をうたする事有、すいなる人は心得たれば、はまる事にあらずと思へど、初心成心には、身にしみて面白くうれしく、いとふしく思ふ誠に切なるべし、是をだまして遣はする事慈悲心にあらず、すいなる人に笑かけ、し口たんかけ、身振かけ、おもはくかけ、皆空言なれども誰かしんじつのまこと、思わざる、身をはこぶより心をいたましめるは、人をそこなふ事なを甚し、物日を請るも、多くは心よりうく、外より來るもの入りは少しもなし、盜みてあふをたゝ成と悅ぶ、げには揚錢なき事なれ共、一節句あてがわるれば必ずあて違ふ也、てれんのしかけ也といふ事をしるべし、地黃をのみて間もなく、かう物をくひて白頭の人となりしためしなきにしもあらず、

百卅一段　物にあらそわずおのれをまげて人と爭わずおのれを枉ひて人をそだて、我身を後にして人を先にするにはしかず、好色の遊びにも、口舌を好む人は女にあやまらせんため也、おのれが通り者なるを爭わず、さればつよき女郎にふられて興なく覺ゆべき事、又しられたり、よはくかゝりて女郎を悅ばしめんとおもはゝ、更に遊びの興なかるべし、咄しのはをぬいて我が心を慰ん事誠に背けり、寐物語にはたはぶるゝも、女郎の心をはかり、さきくゝりして通り者也とじまんす、是又よねの心おく所也、されば、はじめて口舌よりおこりて、大分金つかふ類ひ多し、是皆口舌を好む失也、人にしられん事を思わゞ、金つかふて人よりかき取んと思ふべし、わけ者とならばかさどらず、人にけなされていふ事をせんとすべし、自だゝぬ金をつかひ家をすつるは、たゝうはきなる事也、

百卅二段　まづしき者は財を持て貧しき者は百そうを愛し、老たる者は女郎の一座を樂みとす、おのが分をしつておよばざる時は、速にやむをすいといふべし、跡先しらぬはやぼのする所也、金なくして吉原へ行はあやまり也、まづしくてやすきを好み川岸へ行ば病をうく、

百卅三段　鳥羽の作り道は新吉原は、境町よりひけて後の名にはあらず、むかしよりの名也、明暦年中にかはれり、いにしへはあし生る原にて侍る、

百卅四段　よるのおとゝは東御枕也三浦の太夫は二人禿也、さはいへど全盛なる女郎は、格子も二人禿也、大かたは皆禿一人也、若むらさき暫らく三人禿也けり、先はなき事也、金山は太夫なれども、かぶろ一人つれたる事いかゝと人申けり、たゝし新造にて自身の働きならざるゆへ、二人かぶろにはあらず、

百卅五段　高倉院の法花堂の京町の白菊とかやいふ女郎、或時鏡に向ひ貌つくづくと見て、我顏のいとおとなしくすがりたる事を餘りに心うく覺て、鏡さへうとましく心地しければ、其後は客をせず、久しくなじみたる客一人にあひて、終に其方へ行侍りしこそ難有覺へしか、うは氣なる女郎は人の上をのみはかりて、我身の年のあゝるをもしらざる也、我身のすがりをしらずば、借金濟す事成べからず、さればおのれをしるを利發成女郎と云べし、すがるれ共しらず、借金あるをもしらず、人の惡口いふをもしらず、新見世へやられん事をもしらず、客のよしあしをもしらず、禿の比立をもしらず、身のうへの悲をしらねば、まして客の切るをもしらず、たゝし顏は鏡に見ゆ、年はかぞへてしる、我身の

事しらぬにあらねど、おち付の了簡なければ、しらぬに似たりとぞいはまし、形をいろどり美しくせよとにはあらず、たのもしき客と思わゝ、なんぞ誠を盡さざる、ていしゆ腹立ばなんぞ色を止ざる、すべて女郎のはやらずしてお茶を引は恥也、年明れば自前に成て出見世につとめ、かしに出てぬにまじわり、年寄てはやり手になりて、雪のかしらをいたゞきて色なる座にまじわり、況や及ばざる色になづみて、叶わぬ事をなげき、切たる客をわび、亡八に呵られ、傍輩にわらはるゝ、人のあとふる恥にあらず、さもしき心にひかれて、自ら身を恥しむる也、さもしき心の止ざるは、らうすべき大事何爰に來れりと、慥かにしらざれば也、

百卅六段　資季大納言入道とかや

末廣大臣とかや聞へける者、揚屋にて若ひもの共をあつめ、和ぬしのとわれん程の事、何事成とも答へ申さゞらんやといはれければ、若いものいかゞ侍らんと申けるを、さらばあらがいて見よといはれて、ばかばか敷事は片はしもしり侍らねば、尋ね申迄もなし、何となきそゞろ事の中、覺束なき事をこそとい奉らめと申ければ、何として此里の淺き事は、何事成とも明らめたらんといはれければ、揚屋若きものよね遂も、興あるあらがい也、同じくはかけ事であらそはるべし、まけたらん者は尻をふり然るべしと定めて、人人わらいあはれけるに、揚やの男、おさなきより能き習ひはべれど、其譯しらぬ事はべり、かくれんぼうにまじらぬものは、ちつちや子持やかづらの葉と申事は、いかなる心にか侍らん、承らんと申けるに、大臣はたとつまりて、是は子共のいふことなれば、いふにたらずといはれけるを、もとより能事はしりも侍ず、そゞろ事を尋奉らんと定めつと申ければ、大臣まけに成て、せひなく尻をぞ振れけり、

百卅七段　くすしあつしげ

たいこの半七、揚屋町の茶屋にさぶらひて、大臣にいひけるは、今お通り侍る女郎達の名も紋所も御尋あれかし、一々申侍らでは、ていしゆに聞あはせられ侍れかし、ひとりも申あやまりはべらじと申ける、時しもかすい坊參りあいて、然らば某尋侍らんとて、まづ鼻の高き女郎はいづれの家にか侍るとひけるに、三浦の隱居の小衣こそと申たりければ、すいのほど

既に顯はれにけり、今はさばかりにて候へ、ゆかし所なしと申されけるに、笑になりて歸りけり、

吉原徒然草卷之三　終

吉原徒然草卷之四

一段　花は盛に月は隱なきをのみ

女郎はとしまに、若衆は兄分なきをのみいふ物かは、親に向ひて若衆を乞、云かけてくれぬも哀に恨ふかし、袖とめて角入たる額の青きこそ見所多けれ、書ちらしたる反古の内にも、いもがりけるに首尾惡しけれ共、障る事ありてまかしてなど書るは、逢見てといへるにおとれる事かは、女郎のすがり若衆の元服をおしむならひは去事なれど、ことに片くなる人ぞ、前髪おち袖とめにけり、今は見所なしといふめる、いきちも是迄也とおもふ事こそおかしけれ、女郎の情も、茶屋にて横ぎらせたるをのみいふ物かは、逢で歸しうさを思ひ、仇名の立を隱し、闇き夜をひとりかへり、おやじが宿におわすを忍ぶこそ、色好とは云はめ、若衆のくまひたるを二十五六迄前髪置てながめたるより、元服近く成ておしみたるがいと心ふかう、青みたるやうなる二才の身、せば角袖細作りの大小さしこなしたるは、振袖にも增りて又なくたのもし

き物也、誓詞など取かわし、念者を力に思ひ心中立たるこそ、身にしみて心あらん若衆もがなと俄かに戀しう覺ゆれ、すべて女郎若衆をば、さのみ目にて見る、物かは、女郎はすがりても若衆は前髪なく共、捨ぬこそいとたのもしうおかしけれ、晬なるは偏にすける樣も見へず、愛するやふもなをざり也、片田舍の人こそしつこく、兩道ともに見へず、愛する樣もなをざりなり、片田舍の人こそしつこくもて興ずれ、女郎のひざにわぢより取りつき、あから目もせず守りて酒のみ附さしをのみ、果は大き成ころして唄うたひ、女郎の肌へつめたき手をさし入、庭には小間物見せを出し、人のさげすむをもしらざる也、左樣の人女郎の道中見しさまいと珍らか也き、道中いとま遲し、其程まち久しき成とて、中の町の裏にて酒のみ物喰ひ畫寐などして、揚屋丁には供の奴を置たれば、只今お敵のお通りといふ時、各肝つぶるゝ樣に爭ひ、腰の物さし違へて羽織をあたまにかぶり、りきみおし合つゝ、獨も見もらさじと守りて、やくやちよい〳〵などいつて通り過ぬれば、錢多顏して歸りぬ、只顏をのみ見んとする成べし、晬のゆゝしげなるは、茶屋の二階へ上りていとも見ず、しどけなく髮など打あらひでなまめかしきに、白き汗拭なんど結びて八文字にふり出したる道中のしこなしを、夫か渠かなどおもひよすれば、牛遣手などの見しれるあり、おかしくもにくらしくもさま〳〵に行かふ客衆も色かあり、暮る程につみかさねたる葛籠共の所せく揚屋に有て、客衆もいつ方へか行つらん、程なく稀に成て、禿共のさわがしきもやみぬれば、見世々々の御簾たゝみ戸へさし込て、夜のけしきも思ひやられて哀也、さん茶見めぐるこそ、すがゝきの音に心うき立物なれ、格子の前をこゝら行かふ人の、見知れるがあまた有にて知ぬ、世の人律義なるは多からぬにこそ、買人皆女郎にだまされぬべきに定りたれば、ほどなくどら打べし、有德成大臣成とも、末社あまた召連大樣成貌付するを、ぎうやり手茶屋などとりはやして、五町の禍の神さまと云共、おこたる間なく此里へかよわるゝ、やがて金盡ぬべし、江戸の中に身上よき人の此里へ來らざる日は在べからず、一日に一人のみならんや、堺町木挽町品川護國寺にもゆく人、かず多かる日はあれど、多からぬ日はなし、されば比丘尼夜だかの類ひ迄隙なるはなし、若きにもよらず、つよきにもよらず、思ひの外なるは此まどゐ也、今日迄猶かゝざるは難有不思義也、少しも實有と思ひなんや、駒とりといふ事を子供の寄合てするに、尻へに取附たるを取れん事、いづれの子ともしらねども、追廻し獨を取ぬれば其外はのがれぬと見れど、また〳〵追廻しぬれば、彼是まぬけ行ほどに、いづれものがれざるに似たり、屋鋪衆のやしきを出るは、目付のたはけをよくしつて歸る事を忘れ、首尾のよしあしをも忘れ、主をそむける人の浪人の身と成、子共をあつめて是を樂しみと思へるは、いとはかなし、讓り得し寶を失ひ、好色にのみほこらば、いかゝ天命に盡ざらんや、其色になづめる事、屋敷衆のやしきへ歸る事を忘るゝにおなじ、

二段　祭過ぬれば後の葵ふよう成とて

盛過ぬれば、まゆおく事ふよふ也とて、年ま達剃らせられ侍しが、色もなく覺へはべりしを、よき女郎のし給ふ事なれば、さるべきにやと思ひしかど、つとめの内眉おとす事、太夫格子はなき事也、比過ぬればとやかふし給ふ程、ふる〳〵しく見へ給ふぞかし、周防の内侍の歌に、

かくれどもかひなき物はもろともに
　みすの葵のかれ葉なりけり

嫁入もいひかはせし客うはの空なれば、はまりたるの也、年は何ほど、としはいくつなど、客のくせ寐物語の口切の詞也と、大黑屋藤野が手帳に書り、古きよねのぢまいをいまだ年〻の内のやうに見せかけ、雇ひ禿のまいらぬをも、氣立のよき顏してつかひけるとも侍れ、床談義にも、床の内はとしまこそしたはしき物、又は隙がちなる新造とかけるこそ、このもしうなつかしう思ひよりたれ、西鶴が遊色の物語にも、傾國は眉にてこそ顏のしほにもなり、愛有て見ゆるとぞかける、おのれとうすかりしは、墨さすだに在を、名殘なくいかで剃すつべき、道中の袷かたびらも、八月十五日より小袖に召かへらるゝといへば、禿の袖は菊の折までも有べきにこそ、三浦のみよし野隱れ給ひて後、古きたんすの内に、髮の爲とてたしなみけるか、びなんせきの葉の多くかれたるがはべりけるを見て、折ならぬ音をぞかけつると、白妙のいへる返事に、あやめの草は有ながらと、もと禿のたのもがふる事を思ひ出しける、しほらしきぞかし、

三段　家にありたき木は松櫻松は五葉もよし

家にありたきは、高尾うす雲小紫昔からよし、道中はすらりと中肉なるが見事也、かせやまは三浦ならではなきを、此比は川岸に迄多くなり侍る也、よしのは寛文の比の太夫也、近き比は格子の名となりぬ、いと櫻はのび過よりいと古びたり、出見せにぞ在なん、おそき家出にてしさひらし、虫が痛てなどうそらし、女郎はしづかにうづだかく、色深もはりのつよきが床の内のめでたきも皆おかし、永くつとめの女郎は、全盛のよねの一座にどこやらけしきのあしきも、顔にしばみ附たるゆへと心うし、しとやか成が酒に酔わさ〳〵と成たるは、心よくおかしとて、京の旅人もしとやか成をなん約束ながく逢れたりける也、たて出しの屋口北むきにいまも門のそとに侍るめり、野郎又おかし、女道とはかわりて、輪ほうしのけはひ、棧鋪の酔よりすぐに寄など、左右にはない圖にてめでたき物也、野郎陰ま、いづれも大き成よし、ぬれは曾我小栗愛子、武道は志田、哀なるはしんとく隅田川、女郎とかわりふる由になきは、蟲の間にちよとかるなど、夫だけの慰にあり、あたまからくづしていとつたなからず、何事もしやんとしてよし、此外名字いひかけて名聞にくし、花も聞なれぬなつかし、女郎の名など附たるを珍らしく難有がるは、やぼのもて興る物也、女子の名はなくても有なん、

四段　身死して殘レ財る事は

費われて名代とする事は、睟のせざる所也、よからぬ新造呼たるも心悪し、能女郎はかわりにも呼れず、誰をとあてがわれたる、まして口おし、又大一座の初會、盃の間おかし、我こそ夫をなどいふ者どもあつて、身仕廻に立ける跡にて爭ひたるさまあしゝ、又誰にと志すよねのあらば、ざしきへ出ざる内にぞ極むべき、つゞいてあひぬべきものこそあらめ、其外は何事も物このみせでぞあらまほしき、

五段　悲田院堯蓮上人は

さつま外記太夫は、いにしへは淨雲が弟子とかや、淨瑠理の上手也、故郷の人來つて物語すと聞て、江戸よし原のよねこそ、云つる事はたのまるれ、都のよねは事請のみよくて誠なしといひしを、太夫、夫はさこそおゝすらめども、おのれは都に暫くすみて馴て見侍るに、よねの心おとれるとは思ひ侍らず、なべて心和らかに情ある故に、女郎のいふ程の事せやけくはりなくて、よろづ得いひはなたず、心よわく事請しつ、偽りせんとは思わねど、水がらにて和らかなれば、をのづから實とふらぬ事多かるべし、あづまのよねは我方なれど、げにははりつよく、活にして心すぐれ、偏にすくよか成物なれば、初會はよき客をもふり付、ひんなりとも氣に入たる客なれば、身を捨て逢成とことわられ侍りしこそ、此太夫聲高く荒々しくて、狂言に上るりの乘ことわり、いとわきまへずもやと思ひしに、此物語の後こゝろにくゝ成て、多かる中に芝居にて用ひらるゝは、斯和らき所あつて、其わけしらるゝとこそ覺べし、

六段　心なしと見ゆる者もよき一言はいふ物也

心なしと見ゆる者も、よき一言はいふ物也、あるおそろしげなる河岸に、局しつらひて住し女の、位の君達にあひて、おもわくはおわすやと問しに、いまだ持侍らずと答へしかば、さては物の哀は知り給わじ、情なき御心にこそ、いと恐ろし、おもわくと云たりしに、さも在ぬべき事也、道ならぬつとめの内、假にも妻といふ物のあればこそ、親里の戀しさも忘れ、人の情をさとり、物の哀も是よりぞ知るといひしもさる事也、たとへ萬づにするすみなる人成とも、一筋の心を無下に思ひ暮すはひが事也、其人の心になつて思へば、誠に悲しからん、主親の物を盗偽りて通ふも色ゆへ也、是をいまめかしく罪せんよりは、世の中の若き子共にはやく女房をもたせ、寢覺のさびしからぬやふにはからはゝ、家も納り子孫も續て、誠になさけしりとはいふべき、

七段　人の終焉の有樣のいみじかりし事也

初の床入の有樣かたるを聞に、ひたすら閑にしていきも亂れ、地よねと違ひ諸事いんぎん成といはゝ、心にくかるべきを、愚なる人はあやしき事也、同じ金出して氣の詰る事に、本意にもあらず、いつど、護國寺、品川がましならんと覺ゆれといひける、床入の事通り者も慥に定むべからず、おのれが作を以てしこなすか、又はなじみといふ物に惜からずうちとくる首尾もあり、床の有さまは人の目利にはよるべからず、

八段　栂尾の上人道を過給ひけるに

あみすき又兵衛、淺草の觀音へ詣でけるに、二人通りながら、さばほんと云ければ、又兵衛立とまりて、あ

な尊とや、幼けなふして普門品の唱ふるぞや、いかなる御娘ぞ、餘りに尊とく覺ゆるはと尋ければ、江口さまの禿衆と答へけり、こは難有事かな、普賢ぼさつにあなれ、まさしき佛を物しつるかな迚、感涙をのごはれけるとぞ、

九段　御隨身秦重躬北面の下野入道

御眼北母妙開出入の仕立や新兵衛の內義は、若衆の相有人也、よ〳〵つゝしみ給へといひければ、いと恥しそうにして歸りしが、程なくうせにけり、誠に老たる人の一言神のごとしと人思へり、扨いか成相ぞと人のとひければ、きわめて色わろく酒ずき也、色のわろきは、亭主の鼻の大きく曲りたるを思ひやり給へ、酒をすきたる女にきらいなるはなし、いづれか違ひ在まじとぞいひける、

十段　明雲座主相者に逢給ひて

妙月比丘尼相人に逢給ひて、自分きらせんすじや在、見て給へと有ければ、相人誠に其すじ有、いかなる事やらんと問ければ、先御身の器量常の人にあらず、定めていか成お上人さまもやはかゆるし給ふまじ、是災ひのもと也と申き、果じて深川の御寺と不義して捕われ人となり、鑓先にかゝり失給ひけり、

十一段　灸治あまた所になりぬれば

女郎あまた所々にて逢ぬれば、能女郎にやくそくの時、さわりといふ事近く人のいひ出せる事也、わけよくだにしてけばかまひなきとぞ、

十二段　四十以後の人身に灸をくわへて

五十已後の人、よねの座にて色とればほてくるし、大口きかば必いやがるべし、

十三段　鹿茸を鼻に當てかぐべからず

にんにくを喰ふて色の座へ出べからず、ゑならぬ匂ひ在て鼻をつまむといへり、

十四段　能をつかんとする人よくせざらん程は

脾にならんと思ふ人、よし原の事しらんほどは、なまじいに人と一座せじ、おゝかたわけ覺へてさし出たらんこそ心にくからめと、やぼのいふめれど、斯いふ人よき座配しる事なし、いまだ初心なるうちより、とふり者とまじりて笑わるゝにも恥ず、よねに度々なぶられたる人、天性其おしへはなけれど、色になづまずうわ氣をせずして年をおくれば、金つかふ屋形衆よりはついは脾の位にいたり、名有よね達にかわゆがられて、双なき名をうる事也、お江戸の通り者といへ共、始はやぼの聞へもあり、下戸のさゝ酔もありき、されば其人よきふうを見習、金なくなさで放埒にせざれば、人のそしりなく、女郎と一座する事平生と替るべからず、

十五段　或人曰年五十に成まで

或人の曰、年五十になるまで脾に至らざらん人は、色を止べき也、はげあたまを作りたるもうるさし、老人の事をば人も得笑わず、酒にまじわりたるもあいなく見苦し、大形萬の色を止て、談義まいりこそめやすくあらまほしけれ、好色にたづさわりて、年の寄たるをうらむは下愚の人也、ゆかしき事あらば咄しにて聞べし、其わけしりなば覺束ならずして止べし、もとより望む事なくしてやまんは第一の事也、

十六段　西大寺靜然上人腰かゞまり眉

廣德寺前の名高き宵女、其かたちうるわしく誠に色ある氣色にて琴彈きければ、金銀內大臣殿、あな尊しことのきんの音やとて、大錢十疋はづみければ、光次卿是を見て、目くらの琴ひくにて候と申されけり、後日に鎹市といふ座當をめして琴彈かせて、此氣色たゞとく見へ候とて、內大臣殿へ見せられけるとぞ、

十七段　爲兼大納言入道めしとられて

三浦の小紫請出されて、迎ひの人おほくつきて曲輪をつれ行ければ、光次卿中の丁にて是を見て、あなゆゆし、世にあらん思ひ出かくこそあらまほしけれとぞいはれける、

十八段　此人東寺の門に雨やどり

此人根津の茶屋に雨やどりせられたりけるに、女共集り居たるが、手も足もふとく目つきしだるうして、顏には白粉ことゞ〳〵敷つけたるを見て、夫々にはしたなきは茶屋者かな、尤愛するに足れりと思ひて、守り居ける程に、やがて興つきて、見にくゝいやらしく覺へければ、たゞ傾國のよねにはしかずと思ひて、歸て後、年比目かけ者を望みて、はで成者をかゝへ置てたのしみと思ひつるは、根津の茶やものを愛するに似たりけりと、興なく覺へければ、年ごろかゝへ置ける目かけ者、皆いとま出しけり、左も有ぬべし、

十九段　世に隨はん人は先機嫌を知るべし

大臣にしたがわん太皷持は、まづきげんをしるべし、

ついであしき事也、女郎も耳にさかい、客衆の心にたがいて物もろふ事ならず、さやうの折ふしを心得べき也、但し大屋より斷を請、扨はせん義のおこりぬる事は、きげんをはからず席口あしとて止事なし、生住衰滅のうつりかわる誠の大事は淺草川のみなぎり流るゝがごとし、たゞ人よりくるゝ斗りを待、しばしも滯りぬればたゞちに氣のつくやふな惡じやれを云はざれば、もろう物あてにして、必ずもらわんと思ふ事は、わうちやくならずといふべからず、大晦日迄餅米の用意なく、まして店賃の心がけ在まじき也、春！れし人は夏になり、夏もらいし物はまして秋くるゝにもあらず、春はやがて大臣達へおとりを懸て無盡を催し、夏より既に盆前迄は、帷子ゆへ心やすく出あるかるゝ、十月は最早冬がれの景氣、二の足なる大臣は、おのが下やしきへさへつれず、いはんや色らしき一座へはさたなし也、わる切にてまかるゝをしらぬにはあらねど、まかるゝをおしかけては、座敷の躰おかしく、鼻あいしらになり、さながら歸れがしの座つき、盃の廻り甚だはやし、こ新らしきぢ口言ても、座中にが笑にしてすゝまず、大臣ひたと座を立、來るまじき物をと後悔す、四季の衣服なをさだまらず、一生我紋ならぬ紋所を着て、夏は小袖をも我宿におかねば、盜人の心遣ひせざり、人皆みのなき事をしりて、少しの事然も才覺ならざる宿に、明日の八木なきも覺へずしてさわぎありく、思ひがけなく物もらひたらん時に、店ちん米屋も濟すべし、七草のかゆはるかなれど、はやせきぞろの來る事をしるべし、

二十段　大臣の大樫は

大臣の大さわぎは、さん茶を惣仕廻にして、かさ取常の事也、八町堀の大盡殿は、二丁目中松屋にて惣仕廻し給ひけるに、松風立ぬ物也ければ、さしきへ出ざるまゝ興なし、他所にて遊ばんとて立給ひける、四つ過にて見世なければ、江戸町ゆふきやへおわして、井筒をもらひて遊び給ひける、

廿一段　筆をとれば物かゝれ

女郎を見れば逢たくなり、野郎を見れば心うかれ、三味糸をとれば桴をおもひ、廻る若者を見れば金やらん事を思ふ、心はかならず事にふれて來る、かりにもばさうのたはむれをなすべからず、冬枯になりて、さん茶の見世を見れば、何となく口きく女郎も見ゆ、思わずして他年の望をはらしぬる事もあり、さむ空に今宵見物してあるかざらましかば、此女郎にあはざらんや、是則淋敷所のしるし也、こゝろ更におこたらず共、座敷持の見世にありてきせるなんど持、かりそめに遊ぶ風情して居たらんは、隙なると見て逢べし、つとめもとより二角ならず、外聞を思ひて身あがりすれば、内證かならずせつなし、恥也と思ふべからず、こゝろまちなりと云にて、初會をばくろむべし、

廿二段　盃の底をすつる事は

さん茶の見世くすぼる事は如何心得たると、或人の尋させ給ひしに、凝油をとぼし侍るゆへ、くすぼりてあしき匂ひの候らんと申侍りしかば、凝油にてはなし、魚油也、いわしをしぼりて其油をとぼしけるゆへとぞ仰られし、

廿三段　になひむすびと云は

吉彌むすびといふ事、吉彌といふかぶき子の、帶にむすびしよりいふ也、もとたまづさ繕ひ也、吉彌がむすび初しといふは誤り也、

廿四段　門に額かくるをうつと云は

門のはしらに行燈かくるはよからぬには、自身番の寄合に止たり、辻々のあんどふは常の事也、みぞにたの高あんどふは、今二ッ三ッも有なんと、元と名主隱居も仰られき、其外常に心附たき事のみ多し、

廿五段　花の盛りは冬至より

女郎のさかりは十七より十九二十とも、水あげより七年ともいへど、二十三四過れば、すがるゝ事おうたがわず、

廿六段

伏見町の蔦屋にて禿をころせし遊女に、其夜逢ける客は法師也しよし、綸旨をふところに持居ける、此法師とらへられけり、淺づまとひとつに禁獄せられにけり、山田や次郎左衞門名主せし時になん侍りける、

廿七段　太衒の太の字

太田屋太の字、點打うたづといふ事、若き輩相論の事有けり、もりといふ男はしり見て來にけり、太田屋のうれん點打たるを書たると申き、

廿八段　世の人あひあふ時

鉦者あつまる時、かりそめにも金言いふ事なし、必らずそら言有、其事を聞に多くはよねの事也、音羽町のひばん、よし原の是悲せい咄し多く、誠なる事少な

し、是を語る時たがひの心に無益の事也といふ事をしらず、

廿九段　あづまの人の都の人にまじわり

あづまの人都のよねになじみ、つれてあづまに下り身を立る、又もとの本妻わかれぬるを恨み、喧嘩我儘をふるまふ、有様都のことばと違ひ、物毎ぶこつなるも見苦し、

三十段　人間のいとなみあへる業を見るに

町人の傾國へ行を見るに、よねに能見られんとて、ゆるしなき紗綾ちりめんの衣服を着る事、武士におとらじとするに似たり、其ゆるしを得ずして、みだりに用る事なかれ、たとひ衣服にてかざるとも、屋形衆のしなしにはよもうつるまじ、夫を似する事甚だわろし、

卅一段　一道にたづさわる人

女道にたづさはる人、若道のたのもしきをにくみて、哀わが道ならましかば、斯よそに見侍らるゝ物をと云、若衆を好事非義成事なると、偏にわろく覺ゆるなり、しらぬ道のうたがわしく覺へば、あな浦山し、などかこのまざりといひてありなん、我すける事のみ云出て人と爭ふは、あばれもの〳〵けんくわを好み、世間の者のがさつに物い〳〵ちらす類ひ也、武士としては女にほこらず、言葉のたがはざるを本とす、よねにたわぶる〳〵は大きなる失也、定れる妻女にても、ながれを立る遊女にても、後家のうつくしきも、女にほれられんとおもへる人は、たとひ詞に出てこそいはねば共、心中にそこばくの咎あり、つゝしみて是を忘るべし、色にも見へ人にもゆびざゝれ、災ひをもまねくはたゞ此女難也、衆道を專らとする人は、心たのもしく武の道を知るゆへに、禮義常にみだらずしてさらに女にほこる事なし、

卅二段　年老たる人一事勝れたる才の在て

年まなる女郎、わけて勝れたる繁昌にて、此人の出し跡にては、誰かかほどなる全盛あらんなどいわるゝは、とてもうきふしの身なりせば、つとめもかなしからじ、さはあれど夫も身詩する客もなきは、年〻の内同じはり合にて過にけりと、つたなく見ゆ、今はもなかぞと思ひて、爲にならぬ客なんど麁末にせば、必ずかれなん、大形はよわ〳〵としたる客をば、こしにつけてすゝろに逢ちらすは、さばかり情のあらぬにや

と聞ゆ、おのづから屋形衆はすなほなれば、うちつけにいふ人もありなまし、てれんとさだかにもわきまへしらぬなど、わるじやれもいわざるは、猶誠に客の至りとも覺へぬべし、まして小姓あがりの色殘れる顏にて、あどなく萬もどきぬべくもあらぬ人を、功のいかぬよねははき違ひて、かげ口言きかするを、さもあらずと思ひながら聞居たる、いとやさし、

卅三段　何事の式といふ事

わかいがきどく能しつてといふ事は、寶永の始め迄は人毎にいわざりけるを、近き頃よりよし原にて言詞也と人の申侍しに、天和の頃妙心高尾が、ふかき客の何方にか來居るを、禿に尋とひし時、新造の小紫が、いせやへ御出と其まゝ答へしを、若ひがきどく能しつてと、ほめしためしもあり、

卅四段　さしたる事なくて人のがりゆくは

べしての事なくば、人の約束に行はよからぬ事也、用有て行たりとも、ちよと逢たらばとく歸るべし、久しく居たるいと惡し、人のやくそくなれば事むづかし、せきもいで、腹もたち、心も靜ならず、萬の事さわりて互ひの爲益なし、いとしつこげにおらんもわろし、心のごとくなき事あらん折は、中々其よしにてはあらじ、同じ心にむかはゞ、逢つる客のおろそかならん、ふたかたを心よくしのがんには、女郎の心づかひ苦しさ限りはあらざるべし、人の約束にゆきて、思ふまゝに逢たらんは、誰も有たき事也、ことなるわざありなば、客の來らざらん間に、茶屋抔にてのどかに物語して歸りぬるいとよし、又かぶろなんど附ぬるに、歸らんなどいと久しければ、文にて又こま〳〵といひおこせたるいとうれし、

卅五段　貝ををほふ人

性のわるき男の、我内なる女房をばおきて、よその内にして下女の袖をひき、鼻の下を永くして目をくばる、又近所なる人の小むすめ、かたち見よきは、うばか〻迄わりなくくどくとは見へずして、とやかふしておうよう手に入、磯せゝり斗ならず、遊里の色酒に身をひたし、端々の色へもたづさわり、野良をかわゆがりて、又おどり子をかこひ、精進日には比丘尼とたはぶれ、宿の夜食ぶくす事は稀也、女房の心いかにぞや、胸の内くら〳〵とすれど、さながら走りてもゆかれず、爰に立たるこゝろせいもん、必ずほぐるまの惡

念、色め外に見ゆるもとむべからず、只爰元をたゞしくすべし、すくなる心終に顯るべし、井筒の前の歌に、沖津白波たつたやま、夜ふけてひとり行、ふけてひとりゆく道のほどをあんじてよめり、さきにての事わざ思ふ事なかれといへり、身をかためん道もかくや侍らん、うちをつとめてたんのうさせて、うれしがらせ、心やすくほしひまゝにして、遊びたき物なれども、腎水必ず限有時、はじめて療治をもとむ、色にふけりきよにしづんで病を醫者にめづくるは、愚成人也と竹齋がいへるごとし、目の前なる妻の愁をやめがてんさせて、折々たのしまんは其悅久しくなからんや、伯父舅の來りてにが〳〵しくせいするとも、かくほぐれかゝりたるは、長刀あいしらいにして歸し、直に其あしにてかけ出す、かゝる人には藥もなからん、

井六段　若きときは血氣内にあまり

新造の時は、たんき内にあまり、心物がなしく、ひがみ多し、やり手を師匠さまのようにこはがり、身を姉女郎に任せて、部屋にては腰元のやうにつかわるゝ事、かぶろの時に替らず、わるさ止ずしてはな紙をついやし、名代の外の客は、おやぢ座頭さてはたこ持也、是等の人にいまだ盛りなき身を任せて、心に人をはぢ人をうらやみ、好む所日々に定らず、かぶろの時の色を心に込ておもへど、なまじいにはしたなく、かけあるかれもせず、いつまでもかくあらんかとおもへば、身をいたはらん事もなりあひにして、身の全くひさしからん事をば思わず、たまさかにすがる客に心ひきて、長き夜も客の歸る迄いねずしてつとむ、かかる客は二度と見へず、おのづから汲すつるひさくもなければ、心ならずいやなる男にも、まことの枕をかわす、老ぬる客はせいしんおとろへ、其くせ愚痴にしてしだるうして心うごく所なし、おのづから比たちしに袖とむる客なければ、無益の心をくるしむ、果は姉樣のせにして愁なく、人の笑わん事思ふたぐりもなくなるめり、わきふさぎては、節句物日などの心づかいの悲しさ、又新造の時にまされり、茶屋揚屋にて樣つけられいでも、禿の打の心やすき、新造よりまされる也、

井七段　小野小町が事きはめてさだかならず

西條高尾が行衛きわめてさだかならず、世高尾おとろへたる樣を、近き頃い香保へまかりし人、あゆのいづる邊にして見たりといへり、全盛は躰は大萬字やの小さつまが咄にて聞りと云說もあれど、小さつまは延寶のすへに懸川の客と里を出ぬ、高尾が盛り成事、其後の高尾がことにや覺束なし、

井八段　小鷹によき犬大鷹につかひぬれば小高はよきかぶろ、長門がつかひぬれば、小高わろくなるといふ、つかふ女郎の全盛によることはり、誠に然也、禿おふかる中に、客をだましつれをかけ、唄うたふかぶろはなし、是小鷹斗也、ひとたび里を出て、又歸りて長門が禿となる、いづれの時か誠に出ぬらん、何事をいひけるもおとな恥しき程也、されどおろか成客といふ共、かしこきかぶろにおとらんや、

井九段　世には心得ぬ事の多き也

世には心得ぬ事多き也、先女のりんきも、折ふしは興にも成なん、男の氣のどくそうにはげ廻るを、面白く心得てりんきするも、さもなくして目のほそきを見ても、何方にか心を通し給らんなどゝてせくもあり、めのそほきも男のとがぞかし、斯氣をつくるに隨い、よろづにうとましく成て、狂人のごとくに成、息才なる人も病者となり、いはふべき日にも髮かたちをも作らず、食事をも喰ずして、腹立顏成も氣のどく、他の人來りても靑女房のごとく也、折ふしの咄し抔男としすれば、何事歟身の噂を云合、わらひのゝじるなんどと腹あしく見ゆ、斯思ふから我身をたしなむ躰もなく、髮はおどろのごとく亂し、まゆひたいなど剃事もなく、齒は種茄子の雨におひしごとくしらばけて、手足の爪は猫のごとく、一日いがみ合、聲の限りに內外の者までしかり廻し、下女やはしたの老女迄引出し、しつとの妬みするは目も當られず、勿論若き女のけはひするも白目がちに見る、淺ましくもおそろしく、心のよこしま成ゆへに、おつとの日待ばなしなんどに行しにも、大形色里の通ひならんと、夜明まで軒の下にたゝずみ、老母の心ざまあしくうみ付給ひつらんなどゝて、得ならぬ方まで打うらみ、行先行先へ附そひてもゆかれず、歸りぬればまづ小者でつちをとらへ、何方へかゆきつらんとせめとふて、しつとの心深く持て、此の世も後の世もゑき有べき業なく、いかゞせん、斯くうとましけれど、女にはあやまち多く、寶をもうしなふ、病をもまふく、むつ事も

たのしみ也といへど、萬の病も災ひも此道よりこそおこれ、子供にはる子をわするゝといへり、別れぬれば過にし事ども思ひ出してなくめる、いか成智者も女子には智をうしない、善根をやく事火のごとく、悪心をまし、萬の戒めをもやぶりて地獄におつべし、女の手より物を取ば、五百生が間手なき物に生るとこそ、佛も說給ふなんめれ、斯いましめし女なれど、捨がたきは色也、月の夜は諸共に月よりなをながめ、初雪はやくそゝく在とて、寒ぎをもいとわず足ばやによねの方へはこび、花の盛成には打連立て、花よりも猶愛し、うさをもわするゝ也、雨中の淋しきには起もあがらず、ひとつしとねに打ふし、心とけたるもよし、夜はせばき巨燵にてせゝり燒などして、喰あひたるもいとおかし、旅のかり家野山にても、女子はしたしみ有、芝の上にも打とけて、さゝへの酒をしひまいらせ、折もがなとたはぶるゝもたのしみぞかし、上さま方へもの申度事ならんにも、男は遠々敷、色よき女はよき便りぞかし、斯女に心とけてしのびあひぬれ共、ゆるさるゝは此みち也、夫らの引あげたるにまどひ、ねぼれたる顏つきにて物をきあへず、ちどり足してうろたへ廻るも、心のまよひ也と思ひながらも、又あやうし、

四十段　黑戸は小松御門位につかせ給ひて

爪戸とは、紫の君たゝ人におわしましゝ時、姉女郎の雜遊びに、まさな事せさせ給ひける時の間也、にくさげ成猫のより來て、調度をけがせし程に、手ばそにておひ給へば、塀のかたへにげゝり、其時猫のかけ上りたるあとあれば、いまも爪戸といふとぞ、

四十一段　鎌倉の中書王にて御鞠有けるに

いばらぎ屋にて、松の君達まわり花の在し時、河骨のしほれければ、さしでたる男の扇のほねをさしてまはせければ、少しの内其わづらいなかりけり、下々にはきて成事哉とて人感じ合りけり、此事を有者語り出たりしに、六條の僧の、かうほねは水をあげかぬる物なれば、さわら木杉のたぐひこそ、よく水をあぐる物也、すぎばしはなかりしかと宣ひしかば、はづかしがりき、いみじと思ひし扇子のほねむげに成し、花の手つだひする人、さわらはり金などたしなむ事故實也とぞ、

四十二段　或所のさぶらひども

屋敷方の女中達、つれだちて道中見物し給ひけるに、かぶろ二人つれしこそ、みな太夫也といふを聞て、供がましき女房、かぶろ二人つれてでも、格子もこそあれと忍びやかにいひたりし、こゝろにくし、其人ふるき女郎のはてなりけるとかや、

四十三段　入宋の沙門道眼上人

念佛の沙門道鐵上人、常念佛發起して、土手のほとり聖天町のうちにおはしき、かの岸々に談義を催して、庵室を取立て西住寺と號す、此ひじりの申されしは、吉原の大門は北むき也と、かの翁が說といひ傳へたれど、細見の圖などにも見へず、更に所見なし、かの翁はいかなる才覺にてか申けん覺束なし、上方のしま原の北むきは寒き事勿論也と申き、

四十四段　さぎちやうは

三浦の几帳はいづみやよりぞ身請しける、几帳を京町より淺草邊へ出して、かみさまにたる也、願成就したればとてくわん音さまの繪馬おろしける也、

四十五段　ふれ〳〵小雪たんばの小雪といふ事

たねんねやおころ〳〵と、御子樣がたをすかすも、上ンつかたのうば達のむつ事ぞかし、夫を下つかたにては、ねろ〳〵此子よといふ也、ねん〳〵ぼうしや小ぼうしとすかし給へと有者申き、むかしよりもいひける事にや、厩どの王子いとけなくましゝし時、后達のかく被仰けるとて、太子傳記にも見へたり、

四十六段　四條大納言隆親卿からさけといふ物を

揚屋町いせや惣三郎、初ての客衆へ鹽がつをを燒物に出しければ、かくあやしき物まいるやうあらじと人の申けるを聞て、夏かつほと申魚まいらぬ事にてあらんにこそあれ、鮭の鹽引何條まいらぬ事あらんかわと申けり、

四十七段　人つく牛は角をきり

物もらいたがる野郎をば、欲のふかきといひ、ひたと無心いふ女郎をば、熊手性也と名をつけてしるしとす、それをしらせずして、やぼをはまらせぬるはつれの咎也、つかみづらのはりたる牛をば、養ひかふべからず、是皆とが有すひのいましめ也、

四十八段　相摸守時頼の母は松下禪尼とぞ申ける

山口の太夫初菊の姉は、しら糸とぞ申ける、初ぎくを

はじめて新造に出されける時、尾張屋にふがき客ありて、初菊をつれてけるに、酒宴こと興じて、禿白いとが上着にきける小袖のつまへ酒こぼしける、白糸禿をしかりもせず、其小袖其まゝぬぎけるが、おはるにやらんけしきにて呼けるを、太皷の興左衛門さゝやきて、何某其儘よふしてまいらすべし、さやうの事に心得たる者の候と申ければ、其人よも元のやうになし侍らじ、おはるにとらすべきと答へければ、興左衛門又さゝやきて、餘り大氣にこそおわしませ、少斗のしみ物あらんは、夜る召たるもよく候と重て申ければ、わしもさのみうわき也、女郎は人中にてしまつらしき事を見せず、さもしき心もたぬやふにと、若女郎に見ならはせて、心づけん爲也と申されける、いとやさしかりけり、色をかざるつとめいやしからぬを本とす、繁昌也しもことわり、全盛の心かなへり、すへながくさかんに太夫つとむる程の人を、新造にもたれける、誠によのつねの遊女にはあらざりけるとぞ、

四十九段　城陸奥守泰盛はさうなき馬乘也けり世之助椀久は、そうなき好色の人也けり、めかけをかかゆるに、物言つかへすくわのなき女を見ては、是は助べい也と歸しけり、又顔の色青ぐしてよは〳〵としたる女を見て、是は白血か長血あるべしとてかゝへざりけり、道をしらざらん人、かばかりおそれなんや、

五十段　吉田と申馬乘の申侍しは

ゆうぜんと申法師の申はべりしは、道中の出女こわき物なり、かならずやまひ有と知るべし、かうべき女をばまづよく見て、髪の毛うすきかあつきかをしるべし、次に目のいろわるきか、顔に吹出物やあると見て、心にかゝる事あらば其女をよぶべからず、此用心をわすれざるを第一とするなり、これ秘藏の事なりと申き、

吉原徒然草卷之四　終

吉原徒然草卷之五

五十一段　萬の道の人たとひ不堪なりといへ共よろづの道の者、たとひ茶屋女也といふ共、性とくてれんの女になじむ時は、かならずつかい過る事甚し、たゆみなくかけこまるゝに、心附なく人より自由に廻ると計思ふゆへとく打也、遊女のみに限らず野良也とも、おふかたの振まひ立居にも氣をつけたしなめるは德の本也、たがひに心易くつくろいもなきやうなるは失のもと也、

五十二段　或者子を法師になして

或者子を唄うたひになして、世わたるたづきにもせよといひければ、おしへのまゝに作右衛門が弟子と成、うたうたひにならん爲に、先兵法をならひけり、供あまたつれぬ身は、下谷番町のすへにて、狼藉もの酒ゑひに逢たらんにせびらかされん、逃はしるも心うしと思ひける、次にくがひする身の、座敷にて茶など出る時、呑やうしらぬも人々のふつゝかに思ふべしとて、茶の湯をならいけり、ゆるし印可も取たし、立花かざりて迄もいよ〳〵よくしたく覺へて、たしなみけるほどに、うたならふべき際なくて年よりにけり、此男のみにあらず、女郎のうへに此事あり、若きうちはいかほどばさらに身を持ても、色といふ物にて大臣大名どもしたひ戀しがられ、世をのどかに思ひ、萬年も若いものゝやふに心得て打過ぬ、次第におとろへ、終には八九月の澁あゆのやふに、かさ〳〵と成て手足も青すじふとく肉脱して、鏡に向へば我身ながらぞつとして、むつとする顔は、丸寐にしたやうにしわだらけに、目は落くぼみ借錢はふへ、名代には出られず、見世に日をくらす、後には遣手のぬり下地とはなりぬ、身をもだへ悔れども、取かへさるゝよはひならねば、衣紋坂を下る大八のごとくにおとろへ、おわり賄とはなりぬ、永くつとめの間に、むねと思ふ客あまたのうちに、色を捨ていづれか實うわきをよく思ひくらべて、一時もはやく身を片付事を第一とすべき也、たとへば俳諧する人、一句もいたづらにせず、人より先に仕舞丸をすて、長をと句つくるが如し、又三點より十點物を取はやすし、十點をこへて十一點につくは難し、一點也ともまさらんとこそ

あんじつ〳〵べき也、やり句せん事をおたと覺へて、此趣向あの句作になづみ、かれも得ず是をも定めず、其内に人にとられて句はおくるゝ也、京丁の女郎やりての方へ用在て、既にゆきつきたりとも、西がしのあたりにてきげんのあしき客を見附ば、門より取てかへし、其客をとらへ、晝夜を逢て機嫌を直し、末々深くして逢べき也、みち中にて聲高に云出んもはづかしければ、朝の歸を大門にてとらへんなどゝ思ふゆへに、夜の内にかへりぬれば死る迄の損、是を恐るべしとせり、あわんと思ふ客ならば、小袖羽折の破るゝをもいとふべからず、人のつもりもはづべからず、人のあまた在ける中にて、土佐流の三味糸にかしはいでと云手あり、庄右衞門こそつたへてしりつるといひければ、此道のすきなる男其座に在けるが聞て、雨のふりけるに、合羽からかさや有、貸給へ、かの手を習ひに庄右衞門方へまからんといひけるを、餘りに物さわがし、雨やみてこそと人のいひければ、無下の事を仰らるゝ物哉、人の命は雨の晴間をも待物かは、我も死庄右衞門もうせなば、尋てんやとてかけだしけり、行つゝ習ひ侍にけるとこそ申つたへたるこそ、ゆゝしくきどくに覺ゆれ、死て又來はてぬめる身かと、多門もうたひし也、此かしはいでいぶかしく思ひけるやうに、一大事因緣をぞ思ふべかりける、

五十三段　歸婦は其事をなさんと思へど

今日ばかりは酒を飲ぬやうになさんと思へば、見捨かたき口說をとり持、せびなき大酒にのみ暮し、心待の人はさわり在て、いやなる人は來たり、賴たる紋日は斷、差合在方よりは約束しげく、きげんあしかるべき人はさわなくて、少しの事を氣にかけて切るの歸るのとわめく、日々に過行さま、兼て思ひつるには似ず、一年の内もかくのごとし、よその女郎衆も又然也、新造の時より兼ていひかわしたる事も、たがひゆくかと思ふに、おのづからたがわずしてつれ行人もあれば、いよ〳〵物は定めがたし、不定と心得ぬるのみまことたがわず、

五十四段　妻といふ物こそおの子の持まじき物なれ

野良といふ物ごそなしとて逢まじき物なれ、いづれ紫ぼうしのひたい附、大ふり袖の氣色なんどこそ心にくけれ、誰がしが身請して所帶するなど、又手懸物

をかこひて相住など聞つれば、無下にこゝろおとりせらるゝわざなり、とし若き野良は色にまよひて、もしはわりなきわけにて隱居たらめど、若衆心も手前かせぎの心のほどおしはかられて、增し年ふけたる野良ならば、ふり袖着て茶屋なんどより歸り女房を守り居たらんは、さばかりにこそと覺へぬべし、まして家の内しまつさせん爲にむかへたらんは、なをはづかしからん、扨ふり袖の盛なくなりて後、他者方に成てまゝ母役などをつとむる、むかしの物いひのこりたる迄あさまし、いかなるうつくしき子共なりとも、なじみかさ成てひそりの靑きあと見んには、いと心つきなく見にてかりなん、女狂ひすとも女郎などはひた物こそなからん、時々かよひあわんは、年月經ても人もゆるさゝらめ、あからさまにとまり居つゝけなどせんは、判形の時はくろむとも、內證しりたる人はうとみぬべし、

五十五段　夜に入て物のはへなしといふ人口をし

夜見世の景氣こそ賑はしく面白に、烏の寐に行比すた〳〵歸る人は、六つ切の門を恐れて也、萬の遊び酒ごとのしむも、夜のみぞめでたけれ、晝は物ごとはげはげしう、中の町過るにも編笠きすしては、ばつとしたる姿にぞ在なん、夜は少しふるめなる羽折、じみ物したる小袖にてもいとよし、見世の氣色はあんどうのほかげにても、よきは能もの〳〵いひたる聲は、くらやみにても知たるは心にくし、大一座などはたゝ夜ぞ一きわしみ〴〵しき、さしてやくそくにてもなきに、夜うち更て來る人の、きよげならぬ夜着の內に客の歸たる待居たるいとにくし、心合たるとぢ心實にて逢人は、時をもわかぬ物なれど、ことに夜こそうちとけぬべき、晝は道中見侍らんこそ折ふしは面白からん、茶屋などへ出る人も遣はれなくひきつくろはまほしき、よき女郎のてうちんとぼさせて茶屋にいて、新造も夜食の膳とるゝ程に、身仕廻にすべりていづるぞいとしけれ、

五十六段　神佛にも人のまふでぬ日

さん茶にも、客の大勢ある日、夜はくひ物よし、

五十七段　くらき人のひとをはかりて

位なき女の奥さまとなりて、歷々なる物の顏せんはさらにうつるべからず、百姓の娘御前さまとなりて、

青草を見て何といふ草ぞと、つき〳〵の女中にたづねければ、茶せん草と答へしを、よき青ざし比と申せし事、ためしなきにあらず、文字も覺へざれども、文など取ちらし、腰元などによませ、やう〳〵いろはも見へわかたぬさまにて、そこ〳〵のよみくせにひなんを打、おのれが境界にあらざる物を本妻になすべからず、家納るべからず、

五十八段　達人の人を見る眼は

とうり者のやぼを見る眼は、少しもあやまる所在べからず、たとへば能女郎のてれんかけ口を言て、客をはかる事あらん、初心ゆへ誠と思ひて、いふまゝにかけこまるゝ人あり、餘りに色深くして世に有がたく、てれんをくう人あり、又何ともおもわで心をつけぬ人あり、又少しかしこ立して、誠にやあらんうそにやあらんと、案じ居たる人あり、又誠にはあらねど、よねのいふ事なればうれしと思ふ人もあり、又さまざまにさきくゞりしてすいなる顔つきすれど、つやつやしらぬ人あり、又少ししりた顔に、さにはあらぬなど爭ふ人もあり、又よねのいふほどの事、打込てあざけり笑ふ人あり、又よくしりけれど、しらぬ顔はやぼなる風情にて、よねにうれしがらせんとする人あり、又此かけ口の本意を、はじめよりがてんして、少しもあざむかず、いつわりをも誠にしなす人有、好色の中のたはぶれだにしりたる人の前にて、此さまざまの得たる所、詞にてもしなしにても、かくれなくしられぬべし、ましてすいならざらん人の、まどへるやぼを見ん事、虫目がねにてのみのひげを見るがごとし、但ケ樣のおしはかりにて、聖賢のみちをおしはかりいふべきにはあらず、

五十九段　或人久我縄手を通りけるに

或人本丁河岸を通りけるに、小袖より髪かたちまでいみじき女郎、梯のうれんの内へぞ入ける、心得がたく見るほどに、鑓手と男二三人出きて、爰におわしましけりとてぐしていにけり、三浦の高尾どのにてぞおわしける、よの常におわしましける時は、全盛にやん事なき女郎にて、二代目にもおとらぬはんせう也ける由、戀といふ物には人目もおもわぬ物にや、

六十段　東大寺の神輿東

新町の九郎助稻荷初午の神事とて、三浦の女郎達參られけるに、此君新造の時にて先にたゝれけるが、髪をとしま衆のやうにつくろい、けもなくかい結びて出給ひければ、隱居の津川、新造の髪ぶりにはいかゞ侍るべからずと申ければ、太夫の振廻は其女郎の知ることに候と計答へ給ひけり、さて後に仰られけるは、此津川古風の情を覺へて、當世の說をこそしらざりけれ、おいなりさまへの恐れあるゆへに、髪を洗ひけるがひざりしまゝ、ついむすびてぞ出ける、物は其おのがなりなるこそつくろはで能とぞ仰られける、

六十一段　諸寺の僧のみにもあらず

千番品川の出女のみにもあらず、八まんの茶屋のよね衆といふ事、古き小歌に聞えけり、洲崎の茶屋にあるよし、すべて一軒に食もりと名づけて、ふたりづゝ數さだまりてのおきてにこそ、

六十二段　揚名助に限らず

傾城茶屋者に限らず、くふものといふ勤女あり、西鶴が一代女にかけり、

六十三段　横川の行宣法師が申侍りしは

ふとの吉左法師が申侍りしは、野郎は片歡也、悅の氣味なし、女郎は和合の道理にて愁の氣味なし、

六十四段　呉竹は葉細く河竹は葉ひろし

勘三郎は間口挾く、竹之丞は廣し、大芝居と云は竹之丞、上寛に入たるは勘三郎也、

六十五段　退凡下葉のそとばは

三破品の古都婆、さばは名代、品はその品なり、

六十六段　十月を神無月といひて

十月を神無月といひて、萬事にいめども、物日よの月に違ひなし、たゞし夷講は當月をおもとする也、此月の上のいのこより、正月事の初也といふ說あれども、此頃はおさめの時分迄、正月のきわまらぬも在よしなれば、其格もなし、十月いのこゑびすこう、べちべちの客に逢ける人其例多し、但多くはふはんせうの人也、

六十七段　勅勘の所に紐かくる作法

ほれたる女の家に錦木たつる事、今は絶てする人なし、いにしへ陸奥歸婦の里にて、女にほれたる時は其家のそとに錦木をたつる、けふの細布といふも戀に添たる事也、あふべきおつとの立たる木はとりいれ、あふまじきをば取いれず、此事絶て後、今は金銀にてはやく心なびくといへり、

六十八段　狂人をしもとにてうつ時は

すいな女郎を手に入んとする時は、手くだにかけて逢かくる也、手くだのしなしも逢方のふりも、いまはがてんして、あふかたのわけにてははまるよねなしとぞ、

六十九段　比叡山に大師勸請の色ざとに女郎僞の起請といふ事、つとめ計の客にむかし上林の葛城書はじめける、女郎の起請文にまじないあり、むかしはよほどがてんしたる客も、起請ほしがるよし、近代はさもなし、又心中に髪をきりゆびをきりて、錫の香箱に入て送る、貰う人穢をたてず、入物にはけがれあらず、

七十段　德大寺右大臣殿檢非違使別當の時八丁堀大臣殿、回向院にて開帳の時、手代共出して靈寶の世話やきをせさせけるに、何某の女狂ひ來りて、小屋の内へ入て靈寶の口したる棚の上にのぼりて、髪打さばきてふしたりけり、おそろしき事也とて、女をとらへ暫く休み所へ入ておくべきよし各申ける、父禪門聞て、氣違に分別なし、足あれば何國へか上らざらん、女物狂ひをしばらくの内も、お寺のうちに置るべきやうなしとて、女をばぬしにかへして、臥たりける棚をばなをされけり、あへてそんじたる所なかりけるとなん、おつとにはなれてあまりなげきつよく、心亂れたるといへり、

七十一段　龜山殿建られんとて屋敷がたの女中密通の事ありけるに、つひはらみたりけり、三月四月は袖にてかくしたれども、はや七月顯れ月になれば、女心うく覺へて、男にかくとつげけるに、おろし藥なんど用ひけれ共、つひにおりず、尤いのこつちやうの療治もあれど、人躰をやぶりたるつみの程もおそろしきと申に、中條流の醫師申は、小の虫を殺し大の虫助るに、なにのとがゝあるべしと申ければ、たのみてさふなくおろしてけり、更に主人へはしれざりけり、

七十二段　經文などの紐をゆふに新造などの髪をゆふに、下より上へ在平とうのやふにまげて、かうがいを横さまにさし出す事は常の事也、さやうにしたるをば、三浦太夫小紫ぬしの新造をば、ときてなをさせけり、是はいにしへの勝山といふ女郎ゆひはじめけると也、今はいと見にくし、うるわしくはたゝくる〳〵と結ひて、うへよりちよとかう

がいさしたるぞよからんと申されけり、全盛の女郎にてかやうの事いひける人になん侍ける、

七十三段　人の田を論ずるもの人の客を論ずるよね、なじみへかへられてねたさに、其客をつけとらへてこよとて、禿新造まじり大門へ遣わしけるに、よひたふれてたはひもなく、ぶらぶら歸る客をひきずり來る、是はつけさする客にはあらず、いかにかくはと云ければ、つける子供其つける客とても、とくゆくべき事ならねば、ひが事せんとてまかるものなれば、いづくの客をかとらへざらんといひける、ことわりいとおかしかりけり、

七十四段　呼子鳥は春の物也とばかりいひてかんこ鳥はさびしき物也と計いひて、いか成鳥ともさだかにしるせる物なし、或説に、おさな子の小袖を外面におかずと、夜あやしき鳥の來て、おのが血を付けるとなん、是は鵺ならんか、俗に云ける夜鳥とかならん、色女集の中の歌に、宵々に川原のはしにたち君の五條あたりの月ひとり見るなど書り、かの夜鷹鳥の名はきけ、たち君の名にうばわれしと聞ゆ、

七十五段　萬事は賴むべからず萬の事たのむべからず、女子はことにおろかなれば、ふかく物をたのむゆへに恨みいかる事あり、勢ひ有とてたのむべからず、ふけん問屋とてたのむべからず、德政さかりに合てたおれ安し、景色者とて賴べからず、朝湖も時に合ず、いたり者とて賴べからず、椀久も不幸也き、御前奥樣になるもたのもしからず、氣がつまりてつひ死やすし、かぶろより仕立たるとて賴むべからず、繁昌につれてぞんきいぶり成事あり、人の志をも賴べからず、かけちらしてついとびたがる、身をも人をも賴まざれば、せいゆふてもかゝらず、貧なるはけくかわゆし、右手もめでもうそのかたまり、國が遠ければしんだもいきたも知れず、近ければちよろ〳〵と無心をいひたがる、せめてねいりたるうち、昔を忘るゝ事少しきにして、氣がみじかければ諸事けちらしく客を追だし、ゆるくすれば內甲を見て一時も寐せず、つとめは旦那への禮也、親方の欲限る所なし、女郎の姓なんぞ鐵石にてもなし、くわんたい虛外をすればきげんあしく、是にさはらずしてどこもかもゑいやうにどうなる物じや、

七十六段　秋の月は限りなくめでたきもの也

月見ほど限りなくめでたき物はなし、いつの紋日より女郎のかたにいかふ心付の在事也、夫をうが〳〵と思ひわかざらんは、心うつける事也、

七十七段　御前の火燼に火を置時は

婚禮の規式にのしめ著る時は、腰かわりを用ゆる事なし、かちんか花色の無地なるべし、さればかわるかへるといふ事をきらいて言葉をもいむ也、地下の婚禮にとり持人、子持すちの上下にて罷出られければ、ある有職の人、地下の人は小紋の上下にてもくるしからずと申されけり、

七十八段　想夫戀といふ樂は

さばほんといふことばは、餞別の詞に非ず、相破品文字のかよへる也、相違ひに色になづみて、身をも家をもうしなふ義也、是よりして相破品といふ、てれんも天連也、ばてれん宗とてゑびすのこわき宗旨あり、其こわき宗旨に引いれんとするがごとく、だます事をてれんといふ也、

七十九段　平の信時朝臣

佛師の民部わる口に語りし、淺草院あんらく或宵の間よばる事有しに、やがてと申ながら、袴のなくてとかくせしほどに、又使來てはかまなどのさふらはぬにや、夜なればことやうなりとも疾と在しかば、やぶれたる紙子はおりに、寐まきのまゝにてまかりたりしに、かんなべにわかしざましの尾もて出て、此酒を獨りたべんがさうぐしければ申つる也、肴こそなけれ、人は靜まりぬらん、あまりぬべき物やあると、いづく迄も尋給へと在しかば、しそくさしてくまぐまをもとめしほどに、臺所の隅に蛸の足一本ありけるを見出て、是ぞ求へてさふらふと申しかば、事たりなんとて、數獻に及て興にいられ侍りき、出家にもかくのごとく成もの侍りしと申されき、

八十段　最明寺入道

淺草院あん樂、八幡しやさんのついでに鹿の武左衛門がもとへ先使を遣わして立入られたりけるに、一獻にどぜうの吸物、二こんにうなぎのかば燒、三獻にかすてらにて止ぬ、其座には亭主夫婦多賀長潮あるじ方の人にて座せられけり、扨おとしのよき珍敷はなし聞たきと申されければ、おかしき咄し色々かたりて笑わせければ、女房子共迄紙ばなにて請させ、後に遣はされけり、其時見たる人の、ちかく迄侍りしが語り侍りし也、

八十一段　或人大福長者のいはく

或大ぢんばりのいわく、人はよろづをさしおきて、ひたぶるにぢん藥をたくわへべき也、きよ性にしてはいける甲斐なし、つよきをのみ樂しみとす、達者ならんと思ず、すべからく先其心持を修すべし、其心といふは他の事に非ず、人間常住のしやう山ほどの事ありとも、かりにも氣をうつ事なかれ、是第一の心がけとすべし、はあ〳〵と思ふたびにぢんのへる事速か也、次にいせい見ざるやうに心づかひすべし、人の夜いぬる、自他につけて所願おこると也、くよ〳〵と思ひて心をいため、つや〳〵とねいりたらんは、心つかれ氣おとろふゆへに、いせい見るなり、ぢん水はつくる期有、限りあるらん水を持て、限りなきたのしみにむざと腎水を失ふ事なげかし〳〵、ひよと心にきざす事あらば、我をほろぼすべき惡念きたれりと、齒をくひしばりてかたくつゝしみおそれて、つまみ喰などなすべからず、次に腎水を手洗水などのごとく覺へて、つかい捨る物としらば、わかく共ぢん居をまぬかるべからず、臍くり金のごとく、人參のやふに大切にたうとみて、むざとつかひすつる事なかれ、次にすき成女の耻しむるとも、其言葉にのりいかりてつゝけなどする事なかれ、次に息才なるをたのみにして、立合事堅くすべからず、此義をまもりてぢん藥をもとめん人は、せいつよからん事、大錢二百文をも持あげ、張たての障子をも突破るべし、腎水つもりてかさなる時は、大酒ぼう食を事ともせず、女房に限らず男色をもすてざれども、心とこしなへにしてやすくたのしと申き、抑人は此たのしみをなさん爲に、寶をも願ふは、身のまつたく堅固にしてたのしまんが爲也、財寶有て何不足成事なし共、此一つのたのしみかけたらんは、まつたく貧者の腎張よりおとりたり、何をかたのしみとせん、此おきてはたゝいたづらに腎を失ふ事をたちて、末永く樂しまん爲と聞へたり、間男をなしてたのしみとせんよりは、しかしきよせうにしてかゝる事なからんには、たばこのまざるやぼの、女郎のさし出す吸付を呑てせつながらんよりは、のまざらんにはしかじ、こゝに至りてはきよせうも息才なるもわく所なし、畢竟はよわき方久しからんか、柳の枝に雪をれなきにひとし、つよきはよわきに似

たり、

八十二段　狐は人に喰つく物也

小僧は人に喰つく物也、傳通院にて小法師共寐たる所へ、さかんなる同宿者忍びて行けるに、小僧三人飛おきて喰付ければ、しかりて是をふせぐ間、二人はにげぬ、法師はあまた所くわれながら、一人はとらへてがてんさせけり、

八十三段　四條黄門命せられていはく

四郎左衞門殿語られて曰、かうがいざふはたいこ道にとつてはやん事なき者也、先日來りて曰、短慮のいたりきわめて荒凉の事なれども、いま格子持五間はいかゞいぶかしき所侍るかと、密かに是をぞんぜず、其故は、三うらに高尾うす雲小紫、さん茶などにて名を附る事無下の義也、其内にも初きく若紫など苦しかるまじき也、いにしへ山本の小主水、長崎やのちとせ、山口の初音、巴屋にこゝく山ぶき、是なん今時のよねにくらぶるにも足らず、先内をふみ出すより、世界を我ものにして、天地を一のみにのみ込、あひかたをたなごゝろにおさめ、道中端手にしてしほらしかりし、其頃はろの袷かたびらと云もなく、勿論二人かぶろといふ事もなかりしかど、道中なか〳〵賑かなりし、今はつい禿にて氣を取といへど、風情律義にして、隣へ茶をのみに行やう也、むかしは帶のはゞもせまし、胸高成しゆへ、おいどちいさく殊にむすびめもなく、ついはさみたるゆへ、取なりもほそく丸く、尻のひらたきよね一人もなし、當世は帶もしゆすの一はゞを、ふじ三里のあたりまで引下げ、むすびめは大き成まないたのごとし、それ故すそびろにあづちなどを立たるやう也、せいのひくきよねは、一しほあし、あいかたは律義に後世大事と見へたりと申き、他日與太夫が申侍りしは、むかしにかわらぬは間夫のぬすみあひ也、惣じて女郎五間の家に限らず、さん茶むめ茶局共に内には實をつくすとも、表には端手を專らにさせたし、ことわりかなや、今時はれき〳〵やん事なき衆中も見へ給はねば、おのづから文盲恐癡にもなる也、女郎のとがには非ず、買人のしつ也、

八十四段　何事も邊土はいやしく

何事も東は物事いやしくふつゝかなれども、近江が三味線は耻ずといへば、江都のしやみせん屋の申侍し、近江に限らずいづれの細工人も、外より勝れたり、故は江戸のはんゑいに付、れき〳〵の籠中奥方より、高直にかまわずあまた打出ゆへ、しせんと其妙を得たり、殊に近江は古作名人の、つゞみの筒のうちのかんなめなどよく考へ、しやみせんのどうの内に一つのかんなめを工夫したり、是秘藏のもと也、此かんなめにていづれの音をも調へ侍と申き、凡しやみせんは、わづか三つの緒を以て何れの調子にも叶ふ也、西國がたのやん事なききみ、京都にて打せらるべしとて、あまた度々うたせかへられけれど、調子かなはざりける、遠國より江都にてうたせられけり、近江が三味せん又くるわずよき調子也、

八十五段　建治弘安の頃は

源氏物語にはあふひ祭の事あり、七月七夕まつりとて、屋形女中は色々の衣類などかけならべ祭とす、町方にてまねたきとても、衣類の美々敷事は、屋形女中には成まじとて、町方には竹の葉に色紙短尺に、ゑならぬ歌おのがさま〳〵書付、家の軒にさし祭とす、屋形女中の緣付したるは、いにしへを學び衣類かけならべけれど、古びぬれば、いかにも〳〵古著見世を見る心地こそすれ、百姓は麥俵にて馬人形を作りて、高き木のうへにかけならべまつりとす、いづれか祭る志しにうへしたや有べき、

八十六段　竹谷乘願坊

ふとの喜入坊、やん事なき方へ參りたりけるに、女郎への送り物は、何事が爲になるべきかと尋させ給ひければ、金銀あまたつかわされてかしと申たりけるを、近習の若きもの共、いかに斯は申給ひけるぞ、調戸卷物に增る事侍らまじとは、など申給わぬぞと申ければ、やぼのしり給はぬ事也、手道具たんものは客よりも送り、内よりも仕著せ、買がゝりもやすし、金は内からはくれず、茶屋もたやすくはかさず、物前に客より送る遣ひ金も、心あてとはちがふ也、部屋にての出錢、又は大切成子を道ならぬ勤に賣ほどの親、一つなればさやうのやつばら、大かたちよろ〳〵と小無心をいふ、さすがに女子なればこゝろよわく、少づつも送りたき志しあれば、其時まげずと埒明に、金子とは申上つるとぞ申たりけり、

八十七段　たつのおほいどのは

山口の初ぎくのかぶろは、松彌とおとづれ也、おとづると申はひが事なり、

八十八段　陰陽師有宗入道

からくりし彌三五郎、大阪より下りて江戸の女郎見まほしく、先吉原にさし入て、此さとのさびし事あじきなく、聞しほどにもなき事也、道をしるものはこふる事をつとむ、格子三四人のこして、皆さんちやにおろし給へと亡八共にいさめ侍りき、誠にひとりの女をも、いたづらにおかん事は益なき事也、食物仕著せもさる成べし、

八十九段　多久資が申けるは

ちんば新助が申けるは、中村勘之丞扇の手に、舞のうちにて振のよき事をゑらびて、笑顔のおかつと云ける女におしへてまわせけり、器量勝れ風俗目だつほどなりけり、なるやうにてならず、ならぬやうにて又なりけり、後に袖留けれど、人皆おどり子とぞいひけり、おかつが妹松野といひけるこの藝をつげり、是舞子の開山なり、折ふしのはやりうたをわけて唄ふ、其後かめやの小三郎多くのおどり子共を取立たり、釜はらいお梅がすゝのふりもあり、水木おはるにおしへけるとぞ、

九十段　後鳥羽院の御時

京四條おやま瀬川竹之丞、藝子のほまれ江戸へ聞へける程に、市村竹之丞芝居へかゝへ、竹之助と改めて顔見世より出けるが、ひよと心おくれしけるか、折あしく心地なやみけるが、其さま見にくゝ、物いふも聞ぐるしかりけり、氣の違ひけるとあしくさたしける、心うき事にして、役者を捨て遁世せんとて引込居たりけるを、神明の定芝居七太夫といふ座本、不便に思ひければ、此竹之助をかゝへたりけり、此竹之助上方にて立物なりけるゆへ、わけて此所にてははやりける、されば角太夫ふじの道行を歌上るりに作りて、我も語り、小三郎といへる野郎におしへて語らせける、さて都の名所をことにゆゝしくかたれり、ぶんやぶしは江戸にて知らざるゆへにや、多く人も語らず、上方女郎の風は、竹之助京者なればよくうつしけり、かの竹之助がふりを、今の七太夫が座の子共はまなびけると也、

九十一段　六時禮讃は法然上人の弟子

小舞のふりは、京四條大和屋傳助が弟子右近源左衛門海道下りを作り、赤手ぬぐひをかつぎ小舞にしけり、其後澤之丞といふ野郎、帽子の左右をたれてかつぎけり、小娘おどり子などのぼうしの最初也、元祿始の比より廣まれり、女形のおゝひしてげいに出る事も、同じく澤之丞初めたるなり、

九十二段　手本釋迦念佛は

三浦にて全盛の女郎、惣男共にしきせしける事、元祿の頃出し花鳥是をはじめられけり、

九十三段　能き細工は

よきやらの油は、香具に念を入つかふといふ、せむしが油はいたく松やにを遣わず、

九十四段　五條の内裏には

五條の河原には、そうかといふ物あり、鹿の武左衛門語しは、ある夜川原を通りけるに、胡座をかゝへて行者あり、誰と見むきたれば、そうか男と物いつて、ついねたるを、あれはそうかといはれてまどひにけり、みれんのそうかうり損じけるにこそ、

九十五段　園の別當入道は

石川の何がしは、そうなきこきうの達人也、或人の許にて日待の有しに、いみじきこきういつたか持たるを出したりければ、皆人石川が曲をきゝみたくと思へども、たやすくのぞまんもいかゝとためらいけるを、石川さすがの者にて、此ほど宵彈をつとめ侍る、今夕よひ彈きかき侍るべきに非ず、まげて申請んとてひかれける、いみじくつきぐしく興ありて、人とも思へりける、ある人やん事なき方に語り申たりければ、かやうの事ひきつりうるさく覺る也、彈べき人なくばたべひかんと云たらん、おもたく覺へしと人の云給ひける、いとおかし、大かた知たる事を興有よりも、おもひげもなくてやすく成がとうり者の樣也、まれ人の響應なども、けいはくがましく馳走したるも、誠によけれ共、たゞ其事ならでたいてい有べきかゝり成いとよし、ぎうやり手に物とらせたるもついでなくて、是をとらせんといひたる、まことに心ざし也、しさいらしく盃などさし、無理おさへにことづけなどしたるむづかし、

九十六段　すべて人は無智無能

すべて子共は、こしやくになきやうにそだてたき也、或人の子の見さまなどあしからぬが、父の前にて人と物いふとて、おとしの咄しぢ口などいひたりし、さかしくは聞へしかども、尊者の前にてはさらずともと覺へし也、

九十七段　又ある人の許にて

また或人、よし原にて女郎をあつめ香を聞んとて、よき名香をたきければ、よね遠も段々につぎけるに、ある男の中に、あしからずと見ゆる名香を、口に入しめしてたきける、うつり香の香を水に附て、あしき匂ひをとるといふ事こそあれ、其道に心得たるにやと片腹いたかりき、香を口に入しめす事たへてなき事也とぞ、能き人の仰られし、若き人は少しの事もよく見へわろく見ゆるなり、

九十八段　萬のとがあらじと思はゞ

よねにかわゆがられんと思はゞ、いかにもむつくりとして人をそだて、うわきになく、詞少からんには、然し牛遣手みなしづかなる客よけれといふ、ことに若くかたちよき人のしとやかなるは、女郎も思ひつく物也、大形は事しりたるさまにすいめきて、しこなしたる氣色して、人をないがしろにするたぐひ多し、

九十九段　人の物をとひたるに

人の物ずきを見たるにいくすじも在し、ありのまゝならんはすいらしきにや、心の見へたるやうなる風俗、前へ後かへり見たるよからぬ事也、色どりたるあるきつきも、なをよき事にやと思ひてするらん、又誠にすいなる人は、など物つくろへるさません、かたまへさがり、帶さへねじれずば、其まゝの姿ならんはおとなしく見へなまし、とりてのやぼなる人は、おびをも大事にかけてむすび、あゆむ足付も仕舞などするやうに見ゆ、扨も其人の風俗はよきぞとうり者ぞといふさたすれば、其まゝ其形に氣を付、うつし似するこそ心根のほど愚ちなれ、屋形衆の風こそいみじ、しまちりめんの羽をり、しゆすの帶も、おのづから目に立ず、黒茶うの袴おぼつかならず著なし、紫さげ緒のながく刀のさやべうち懸たる、はなやかならぬかは、かやうの客にはほれる新造も有ものなり、

百段　主ある家には

ぬしある座敷には、客の外に心のまゝに入來る事なし、主なき座敷は、あたり合の客みだりに立入、のら猫きうやうのものも、人げに構ねば所得がほに畫る寐し、禿のかくれんぼうの隱れ所也、又から紙には何のかたちもなきむだがき、萬の人の手かゞみとなりて見苦し、かゝるざしきにて遊びたらんは、得てきせるそろわず、牛どもは爲にてもほしきまゝに、かわりがわり來り伺ふも、やる客のなきにやあらん、禿もまわし禿なれば、座敷の内に足を入ず、廊下の内にてかしましく狂ひさわぎ、床へいるよりいなや呼でも來らざらまし、

百一段　丹波に出雲といふ所有

本庄に見めぐりと云所有、稲荷山をうつし目出度つくれり、使者のみやうぶに飯をあたふる老女あり、是はいにしへの風呂屋者、太夫迄に成し丹前勝山がすがれたるの由、橘屋佐兵衛近所しる所なれば、秋の頃いせやのせん、扇屋のばゞ、三浦のまん、其外古きやつばらあまた誘ひて、萬日のついでにいざ立寄給へ、かれを訪わんとて竿さし寄ていきけるに、かの老女狐をよび出し飯をあたふる、佐兵衛いみじくかんじて、いかに人々此老女の有様御覽じ咎めずや、無下也と泪ぐみていへす、各あやしみて、いかさまにも思ひなしにや、ちよのばゞとは違ひ、どこやらいにしへ床しくおもかげのかわらで、年のほど〻思ひいとゞあわれにかんるいを催しけり、佐兵衛なをゆかしがりて、おとなしく物知ぬべき顔したる神官を呼で、此老女いかさま由緒あるべき人なり、何の苦しう候わん、子細かたり給へといひければ、其事にて候、此寺の譜代門番の妻にて候が、血の道にや心そゞろになり、何の役に立ぬやつにて候を、慈悲の爲に狐のゑかいをいたさせ候、左様の名も有者にてはさら〳〵なく候といへば、各舟ちん損にして、佐兵衛がかん涙もいたづらに成けり、

百二段　やない箱にすゆる物は

三味せん箱おきやうは、竪ざま横ざまによるべきにや、舟などには横ざまに置て、ふなばりのあわひへ通しゆひつくべき竿はいかやうにもおきたる、箱みじかくひらたきゆへころばぬよし、遊臣だちの仰られき、かんとふふねばかりにものすべからず、ゆれていと卷くつろぐよし仰られ侍りき、

百三段　御隨身近友が自讃とて

そのかみたいこ休麗が通り者じまんに、口をまげて大臣の品七ケ條在といひたりし、皆遊女白拍子等があいかたなりなんぞ、金つかい捨る事を、聖賢のおしへのやうにこと〴〵敷云たり、其ためしを思ひて自讃の事七つあり、

百四段　人あまたつれて

人あまたつれて見物にありきし、上林の邊にておのこの酒さげんに、禿を押てみぞばたをひたとはしらしむるを見て、さきの井戸がわ行當りすべりたをれて、かぶろを落べし、しばし見給へとて立とまりたるに、まだ禿を追てはず、果して行あたり酒よひもたをれ、禿もどぶの中へころび入、思慮なき事と皆人我身をかんず、

百五段　當代未だ坊におわしまし〳〵頃

右衛門いまだ部屋ごもりしてましまし〳〵頃、元祖かせやまの部屋なりしときわの君の水に歸りて、たんすの四五六の引出しをぬきひろげ給ひて、むらさきときれさんした時、わけあしく客をうばふと書しにくひ文を、かせやまさま御覽せられたきこと在て、ひたとたんすを御覽ずれ共、御覽じ出されぬ也、何とぞよく尋見よと仰ごとにて求るなりと仰らる〳〵に、九つの引出しのそこ〳〵に侍りしと申されたりしかば、あなうれしやとて參らせ給ひき、これ程の事は禿共も常の事なれど、むかしのよね達は、おろかにも悦び給ひし也、越後高尾ひな形の注文に、袖と袂と二所に書候事あしきやと、うす雲の君へ仰られたるに、秋の野の草のたもとか花す〳〵きほに出てまねく袖と見ゆらんと侍れば、何事か候べきと申されたる事も、其時の女郎は情をもと〳〵し、歌の道にかしこくましまし、みやうが也理り也などことゞ〳〵敷云侍りし也、

百六段　常在院のつき鐘の銘は

古文前集のうち長恨歌は、白樂天の作也、佐々木玄龍にか〳〵せて卷物にせんとせしに、こしやくなるおのこ彼歌を見侍しに、後宮佳麗三千人、三千寵愛在二一身一といふ句あり、一しんのしん一の臣と書たる誤りならんと申たりしを、ようぞ見せ奉りける、おのれが高名也とて、筆者の許へいひやりたるに、あやまり侍りけり、一心と書なをして返し侍りき、一心もいかなるべきか、もし一人の心か覺束なし、誰に一心なを不審、心は三千の内何にかとゞまらん、たゞ貴妃一身にとゞまる心也、

百七段　人あまた伴なひて

若き者あまた伴なひ野遊せし事侍りしに、道鐵の念佛堂の左に妙信院とかける古き石塔あり、うす雲高尾の問うたがひ在ていまだ決せずと申傳へたりと、堂僧ことゞ〳〵しく申侍しを、女郎野郎の印しなれば、

大形は裏書有物也といひたりしに、裏はこけむしてさだかならざりしを、よく洗て各見侍しに、三浦内高尾と記し年號さだかに見へ侍しかば、人皆興に入る、

百八段　那蘭陀寺にて道眼聖り談議せしに

なん大臣よし原へ忍びて出しに、頭巾忘れて道より取に歸りしを、人皆心づかざりしに、女房氣を附是々にやと云て出したれば、いみじくかんじ侍りき、

百九段　賢助僧正に伴なひて

宿おりの女中をともなひて堺丁を見侍しに、いまだ果ぬ内にかの女中歸りけるが、ざしきに侍らざりしまゝ、用事にや立ぬらんとしばしまてど見へず、表迄出て見けれ共見へざりけり、茶屋の男をたのみ求めさするに、同じさまなる屋形女中多くて、得求めあわずといふて程久しくて歸りたりしを、あな心うや、いかゞせんと思ひける内に、かの女中の下女歸りぬ、夫もとめておわせよとしかりければ、何屋とかやいひける茶屋の二階より、やがてぐして出ぬ、

百十段　一月十五日月あかき夜

三月十五日、隅田川あさちが原など見めぐり、端場の草淺寺へ詣て、友もなくひとりふらめき、觀音の茶屋を心ざし侍しに、じたるき女の顔、花のつゆにて光らせたるが、あとさきになりて側へよりそへば、かけ香の匂ひうつる計りなれば、いやらしく思ひてすりのきたるに、猶居よりて同じさまなればはづしぬ、其後若者度々だまされけると咄し合れけるに、さればこそ心得侍らねと思ひて止ぬ、此事後に聞侍りしは、筒持せとて、男がてんにて女房をむまくこしらへ、すみよりなるものを引込、首尾よき時分、夫出合ひ見出したる體にもてなし、ねだりて金銀を取ける事度々也けるとぞ、

百十一段　八月十五日九月十三日は

八月十五日九月十三日は、名月とて大物日也、しかし此ごろは約束ばかりにてゆかぬ人多し、

百十二段　しのぶの浦のあまの見る目も

有馬の湯女のしなしもおもしろく、伊香保の山の食もりも、情かはらん心の色こそ、淺からず戀しと思ふ折々の忘れがたき事も多からめ、おやはらからゆるして二世迄も迎へたらん、いとまばゆかりぬべし、なかれを立る女なれば、知らぬ國の人也とも、初より心打とけて、かわるな替らじなどいふを、女のくせとて

心輕きさまにいひなしてかくれば、しらぬ人を賴母敷思ひつめたるあひなさよ、何事をか寐物語にせん、所の事共いひ、古郷の事など語らわんこそ、つきせぬ言の葉にてもあらめ、すべてよその人の珍ら敷咄ししたらん、面白き事多かるべし、よき女ならんにつけても、愛著の心深くなりなん、男は斯あやしき女の爲に、あたら身をいたづらになさんやはと、さりとは心おとりせらるれ、わきがの匂ひも名香のごとく覺へなん、胸こそわるからめ、ごまの油かうばしき、夜の寐顔にきは墨まだらにはげ、髮もみだれ、あばたづらもあらはにしのばるべくもなからん人は、たゞ色このまざらんにはしかじ、

百十三段　望月のまどかなることは

望月のまどかなることは暫らくも住せず、やがてかけぬ、一夜の勤めの内に、さまでかわるさまも見へぬにやあらん、ふさはいの事あれば、客住する隙もなく、して、きる〳〵事既に近し、ちよろくおもひ、常住平生の念にひかれてあふ中に、多くの我ま〳〵をなして後、床にてしつぽりとかけんと思ふ内に、客に欠出されて大門へ附にのぞむ時、日ごろのてれん一事も成就せず、いふかひなくて年月の惡性をくゐて、此度もし腹だち直りてあふ事あらば、夜もいねず晝も立さはがす、此しづかの事おこたらずなしてんと、はやく出る願ひをおこして、けやけく無生にまわり、いひ次第に酒のみぬれば、我にもあらで取みだしあかれ果ぬ、此類ひこそあらめ、此事まづよね達よく〳〵心得置べし、年〻あけて後悔とりてかへらず、しかりてもなき身と思はゞ、借錢つくべからず、勤めの内はみなもうぞう也、よき男に逢たき心來らば、亡八の釜ふだいに成としりて、うわきをなすべからず、實體なる客に心實をつくさば、曲輪を出る時障のなく、たゝりもなくて、身上永くしづかなり、

百十四段　とこしなへに

とこしなへに全盛せんと思ふには、ひとへに苦樂あり、樂といふは、つかへぬ町衆を愛する事也、これをせぐほど止時なし、全盛する所一つにはあいきやう、あいきやうに二種あり、酒ふり藝能也、其外顏の少し不道具はけくして物ずきにも成べし、兎角氣隨よりをこりて、そこばくの借錢ともなる也、しかしくわほうはいふにおよばず、

百十五段　八つなりし年

八つに成し年、父に向て曰、暦とはいかなる者に候らんと云、父が曰、すいは人の成たる也と、又とふ、人は何として暦にはなり候やらんと、父又すいのおしへによりてなる也と答ふ、又問、おしへけるすいをば、何がおしへはじめ候けると、又答ふ、夫も又先の暦のおしへによりて成也と、又問、其おしへはじめ候ひける第一の暦は、いかなるすいにか候けるといふ時、父金つかふてやなりけん、たはけつくしたるうへにてやなりけんといひて笑ふ、とひつめられて得答へずなり侍りつと、諸人に語りて興じき、

此一書、元祿末寶永の始歟、北柳江戸町結城屋來示述作也、此節者晋子色邑に晝夜夢を結びて加筆を加ふといひ傳ふ、其眞僞は知らず、往んじ年柴山東雲より此部かりもとめ、愚筆に寫しぬ、其後何方へか貸し紛失に及ぶ、今半白に至て如〻斯の戯書に筆を勞することおかしき業ながら、長遍よく本文をかりたる事を愛して、後のそしりを不〻耻書留ぬ、

吉原徒然草卷五　大尾

新つれ〴〵草

徒然翁手叙

膩言竹東離邂矣、而伊勢語、而源氏談、而枕草蕊、而榮花語、毫を競新を弄、其辭故々たり、其文奇たり、足利王の時に、沙門吉氏出て徒草藁成ぬ、其辭稍俗に近、其文當時を感せしむ、相如が唇あた〳〵かに、左太仲がしたあまし、猶いまだ漢宮妃怨の雅々と、青樓妓館の艶雅嬌情、寡婦宗女、炊婢怨妬、浮屠歳少の遊戯、見べからず、人の好尚は人々の面の異が如し、聖者も多欲多情、妨ぐことならず者の見て歌發の階梯ならん、述て作せざるは道の常なり、吉氏ふた〳〵び出とも、余解をかへじ、

文華盛隆の載閏月望

如意山下肖不如山人識

新つれ〴〵草

○徒然なるまゝに、うつかりとも暮しかね、心にうかぶことをかきならべし、此段よりさま〴〵のよしなし事を、筆につゞけ侍りぬ、

逸民には、伯夷しゆくせいなどゝ、名にうてし中華のすねもの、此日本にも、はるかむかしはしらず、西行頓阿けん好の輩、臍くり銀を利口にまはし、浮世をあぢにのがれ、逸民の數にいり來る人もなし、山寺も庵にかしやふだおほし、喰ものさへ在ば、いまも世をおもしろくわたり、腰折の一首もよみかねぬ人もあらんかし、干要の金なく、山中の庵もかるには、請判ことやかましく、居士衣を服にしても、宗旨改は出ねばならずして、彼是さしつかへおほし、西行の修行等も、江口のときやらふがざれごと、鳴たつ澤の無常、兼好は師直がちわ文のしたがきよりも、思ひつゞけし此草紙を、ならびのおかの草庵にて、編笠かぶりし浪人も、北野の森、または座敷に毎夜わき錢もとうかうだんずれども、ことゞくすかたん、つれ〴〵とは徒にきよろりが味噌もねぶりて暮すも退屈也、借錢もなく苦もなく、腹ふくらかして念佛計もあくびの種にて、おとがひのかけがね心もとなく、かのちわ文かきしついでに、心につゞりゆくせかいのことを書つけたれば、我身のうへも人の事も、ひとつゞきになりてあやしく、いでや此世をむまれて、ねがはしき事おほきうちに、かねほどほしいものはなけれども、それにもかへぬは色の道、たれ人おしき銀金と、壽命とを捨て、じんきよするこそおゝかめれ、王樣は申に及ばず、竹の園のそのむかしより、こうやずまひの鼻たれ迄、木のまたからも出ず穩婆が手にかゝり、生し人げんのたねならんとは、その種まきのさとへ、持てゆくありさまを、硯にむかひかきつゞくるに、不夜城は中の町上の町下の町、にしのとういん中堂う寺新柳町、東には祇園ぼんと、東西の石がけ、宮川の上下、縄手八軒、新地こつ堀、高臺寺八坂、五條坂ほたる、頂妙寺しらみのづし、北野に上下七軒、ばくらうしんせい、うち野、あり合ひら野、南に七條、平安の地をはなれしふしみ十丁め、墨染どろ町、中せうじま、その外風呂やかこひもの、出合比丘尼に野郎中居、つとめ娘

月切まひこ、され子後家間男、かれこれかぞふるにいとまなし、およそ皆銀のいらぬはなし、抑此みち計は天下の老若公家きんぴら迄も、とれやすきものにして、いかなる人もみかけとはちがひて、色にはいかふとろきことぞかし、つり髭さかさまに生しげり、鍾馗もどきのおとこが、茶やの色をだいてねしそのむつごとは、身共をかはひがつてくれめせといふときは、女の心にさぞかしおかしいやら、ばかなやら、ことばにはのべ紙にてはねをつけこと小い、御寺樣はひとに木のはしのやうにおもはれと、清少納言がわるくちもことわり、女にはどれやらがほんそくよりはかくべつ人間の種ならず、和尚さまのあとゝり、身もちはらもちかまひなし、當時わかひ娘や女房などが、お寺まいりに夜だんぎをきゝこみ、ごじう相傳を授かると、腹が大きうなり、亭主がひまをやるとが一度なり、二度わかひ時はないものにて、下戸ならぬこそおのこはよけれとは、きびしい粹かな、一盃機嫌にて、一日銀をつかひ覺へては、後悔することおゝし、下戸のあそびはいつも素面にて、たとひ一夜に五百め壹〴〵目をつかふても、よくおぼへ、いつも本氣なれば中々以てやむときなし、あくせうとあそびずきとは、似たるものにて大きにかはり在、それ遊びずきは、祇園先斗町に行、素人牽頭をよび、座おもしろくもたせ、酒などのみあかし、一月には一度か二度ほど宿坊をきはめ、外へは行ずして、茶やより寒暑の見まひ、鷄卵まつわ瓜、玉水了郭がかうせんも、けんぺいにとれること也、あくせうものは、素人をきはめておいてかい、扨つれのよぶはく人をわきの宿にてせゝりさがし、中居娘をもやつかし、祇園先斗町家なみに行かとおもへば、新地に尼のはく人が出る蟹の如く、よこになつてはい入、闘子のおくへかいにゆく、かみ切をやくそくする、うちのめしたきをかぢる、東どなりの女房に手みそつける、これらが酒にも醉ず、あくせうものゝ所作ならんかし、町かたの女も、あく性ものと又のらものとちがひ在、のらといふは、襦袢の袖口をたんご島にてふくりんとり、穐花染のうらを見せかけ、子供の小手袖見るように、五寸計も長して、むらさきがのこのくびたま入、志賀から崎を黑の引かへしの、しどけなくつまをあはせかゝへ、帶もせず淺黄ぼうしをおとがひにてくゝりつけ、成程しつか

りと男でも持た風俗にみゆれども、さやうな色ごとはせず、はんきの奉公も身にしまず、せつ〳〵ひまをもらひて、北野かう堂あたりをのらつきて、小やどをこしらへ、おなじともだちとだしやい、けんどんくひ、ひるねをして、すこし主人の内へはつかへがおこりし、またはおぢきがせんきのかんびやうのと斷をいふ、主人も二度三度はりやうけんもすれども、さうさうは聞入れず、時ならぬひまをもらい、うろつきまわりてすそもきれ、うら付のせみかわもぬけがらにて、げぢ〳〵のやうにほつき、たかのしれたせいをいふて、出かわり時ぶん、人より壹番に口入の所へゆき帳面にのり、難波の十文ぞうかつれだつやうにして目見してすわり、三月の月中は得ありつかず、五月雨ふりしくころ、かびたる菅笠手に持、きも入がかたのからかささして在つくにぞ、あく性ものはさやうな計にてはなく、あく性しながらも、ないせうのためになるやうに立まわる事ぞかし、これもあく性から、いろ〳〵の物のとれることを覺し、まことに獵は鳥がおしえるといふことわざ也、身のまわりもおとなしくこしらへ、ことばもしん妙に、奉公もよくつとめ、わかきもの、でつちあがりがうわ〳〵と、しくつくにかまはず、年がましく少はちえも有おとこをこまづけて、小錢のまわる男を目にてつかひ、こむすこに手をにぎらせ、勝手むき櫛かうがいも、時々のはやり物をかわせ、もちよりにて小ぜにの切めもなく、後室の寺參りも、よひほどにりつぱにこしらへ供もつとめ、折々小女郎があひにくる、おとなしく隙をもらいやどへ行、よく聞合すに、ねんごろすると名をついた男が、五六人も在て身のまわりをかくめ、いかなこと主人の切米は半季に三百文くれてもかまいなし、かのかんじんの宿をもつときは、やとばいりもせず、よほど身代居くろめし男か、又はとしより男の後よびか、きぬの壹たんも納幣（ゆいしろ）をとりてゆくつもり、すべてあく性ものは、後に身代持はよろしきものとや、けつくはき娘が、外をみならひと十四五より奉公させて、あく性にもあらず、誠ののらになりてのちは、うち野五ばん町遊べ、我と我てに身をうりに行こと也、詞おゝからぬに、あかずむかはゞおしからず、女のもの數いわぬがよいとて、ぶつてふづらしてつらくせわるき女房はびんぼうの種也、手なんどつたなからずとて、

わかひ女房がすこし筆がまわれば、となりへひやめしかりにやるにも、なが〳〵と文かいてやるもいやし、かならずすこしにじりがきもすると、うすひ紙には狀もかくこともなし、わかひ男の、人の女房といふるんりよもなし、三尺手ぬぐひかりにやるにも、いとこまぐ〴とかきつゞけ、どこぞは不埒は出來ごとおおし、男は小歌ひとつうとふも聲おかしく、二の音をはづれ、酒も口から出る程のみ、毎度こまもの店を出せば、女の思ひつくさまもすくなく、おのづから色どるていもみだれて、すこしわがおもひつきし女が在ても、醉てわすれはたす也、若男の三味せんをならひて、我がたのしみにはあらず、娘や人の女房をせゝるおとし道具にて、その男が三味せんを終夜ひき、淨るりをかたりて、茶やであそびし事をきかず、かならず行からもどる迄、女郎とゆけもせぬさゝやき計にて、つれのきやう迄をさます事也、都にて茗長などいふおとここそ、誠に三味せんのすきたれ、淨るりにも立花河内は眞實にすきて、そのげいに名をとりぬ、〔頭注〕茗荷屋長左衛門とて三味せんの妙手なり、素人野崎といふ、河内は都にて日野や菜といふ有德人也、いまの男は、わがすいたる女房を持と、ゆふげいはやむもの也、おやの申つけか、わけ在て是非なくいけぬ女房をだかべると、ゆふげいはいかい病氣か、常々のいゝ立に成こと、あたらずとも遠からず、あくせう成る遊女が果は、尼になりて道心堅固也、大酒を飲、たわひなく、きぬぐ〴ろくにおぼへず、酒のさめてかしこひ男が、大事の娘をちよろまかし、またはかのまおとこはせぬもの也、兼好これをよくさとりて、聲おかしく拍子とり、下戸ならぬこそおのこはよけれと、此草紙の卷頭にかきつゞけぬ、よく味てしたうちすべし、

自程曰、木のまたから生たらば、色欲も知るまじ、世界の若後家尼は、和尙のとぎをするにきわまり、るいをもつてあつまるならひ、はく人は野郎とねんごろして、せたひをもつことしか〳〵、御所方の文庫持は、夏冬なしに沖戸子の次上下きたるおとここそ夫婦になるならひ、わが寺こそたふとしといふもことわりかな、こしもとなどもせうたひなく、のらはさのみぜにももふけず、さわるものに何心なくぜんをすへて、はてはけんあく國に身をうる風俗、かの惡性ものは、我からくれといはねど、おとこがくれるに味ひて、錢をもふけるすべをお

ぼへる、都にても、乙女榊三なし、てんぐかなめなどいふ婢は、名代ものにて、能身のとり廻しをおぼへ、けいせいはく人が、客をだますをとろふ見て、いかさけんかいよひ程に、やどを持て身をかためる始、奉公するに、一ケ月にいとまをいく度と極め、給銀にかまひなくつとめること也、前廣にやくそくすれば、三本木邊にもよき婢をこんたんする事在り、〔頭注〕三本木邊にては、こしもとで、おくさまで、はゝでもあり、折々聚て知るべし、日本は色國なれば、おもひもよらぬかたも、おもしろきこともあり、うか〳〵と月日をおくるべからず、つれづれの初段も、大かたに男の女になれよるさまを、何となく書つゞけたり、よみて知るべし、

○よろづのこと、始終こそおかしき段、おこがましく見ゆれ共、いたりて粋はないもの、扨其すいがはじめより粋もなし、はじこの段にてけいこせし事の、はじめより其おもわくを、此一段にのべたり、

花に醉月にうたふ、年々歳々花相似たり、歳々年々人は不同と唱しは、しらがのおやぢにかはりて、代さくせし人は、いかなる粋やらん、わかい時の心もちは、大かた似よかしもの也、十六七にて前髪おとせしまんぢう、さかやきのひあたりのあとさへ、まだなおらぬに、すみをぬき、朝暮のすりみがき、ぬか袋の木綿も河内からと丶のへ、ばきだめは米糟とあらひ粉のあかをなし、はみがきは小店のおろしなみにと丶のへ、さくら楊子もさりとははやくへるとつぶやき、びげは江戸ねりぎん出し、炎天にはながる丶計にぬる、さかやきは隔日にそりて、眉はかゞみに向ひおもしろくつくりて、我とわが男ぶりになづみて、いまのせかいにおれほどよひ男は在まじ、たとひば雲の上人、小町もどきの娘にても、殘花にてもなづみたりと、みだりになびかじと心におもひ、古伯の帶をも、腰より三里のやいとのきわ迄卷たて、延紙もはんぞく計貳つ折にして、掛香など匂はせ、石だ丶み小紋の手拭、手のうちににぎり堅めて、たまごいろのたび、八幡黑のはなおの跡をつけ、羽織のひも足にて踏あるき、草鞋も三がいめははきやぶり、二かいめをはき出し、開帳萬日、みこしあらひ、神社佛閣殘かたなくめぐれ共、いづくの娘よりとて文も見ず、なにがしの後家からとてくどきもせず、雲のうへから戀もふらね

ば、よき價をもとめてとりおきて、町々門々へよび、男に御用はないかとふれても廻られず、町内に少ししぶりかわむけたる、こめろ上りの娘にざれをませて見る、あのこしもとぐわひにほれられるとは、ホンニ御茶のこなれどとおもひしに、守する子を手を引ながら、婢はげびたる目もとにて、おまへは美男じやけれども、うわきそふな御人じや、きのふけふまへがみおとしてこしやくな、わたしらとねんごろなさして、もし身持はら持になりまして、そのときくめんが在かへ、てう妙寺の新地で、なんぼうねぎつても六拾匁はとる、自程曰、てう妙寺新地にて、鶴の丸などは月よととみ療治也 おまへにいふてしらぬといはれると、私ひとりのなんぎ、ひとつある小袖でも賣やうなことはいや、些と小遣錢でもくれる人と、ねんごろせねばならぬわいな、きり米は高のしれたこと、油もとゆひは高し、それは〳〵あわぬもの、わたしがわるひ事はいわぬ、おまへもしりはらやまずのてんやものをおかひなさせ、お德でござすと、戀も色もねからはなれたる口上、さて〳〵むさひ女郎かな、戀といふ事は夢にも見ぬやつさふな、おれがやうな男とねんごろせずば、男めうがにつきおろうとおもへども、婢がいふにちがいはなし、下の町のふる道具やの娘も、この比みがき入れてよほどきれいな、おれがとふれば、さみせんを引さして、障子のすかしからのぞく、さらばしかけてくれんと、やくにもたゝぬ鍔や小刀を、付札のとおりにかいつけこみ、三味せんをならひ、有栖川のばちぶくろをはづみ、銀目かろきかんざしを、はな紙のあいだよりわざと出しかけ、もろふてくれがしに、何ごとぞいふてみたい折もなく、むねにせまりし數々と、かわのたるみし仲のいしをならひて、母おやがとなりへせんたく物打にゆくあいだに、しびいて見れば、娘はつぼ〳〵口にて、わたしはきりやうは人並よりはよほどよいげな、それで三味せんをならひ、御大名へ御奉公に出るつもり、もし御手がかゝり若殿でもうむと、ふたりのおやだちらくにやしなふ、いまのうち、すこしがしんぼうじやげな、おまへもねんごろにいふておくれるほどに、此月の宿代五匁かしておくれ、錢で三百四十文ほどじやげな、月並の三味せんのいと代で、さし引しておくれと、紅ぬりたる唇をひらつかしかたり出す、戀もいろもとりおき、ことしも來年もさめたるせん

さく、(自程曰、近年下々に少し目はなまんろく成娘をもてば、こと三味せん舞をしこみて、大名がたの御茶小姓にいだし、すて銀何十枚、給銀何ほど、野菜銀何匁、下女一人四度の御仕ぎせなど〻約束してさし上、ふと御氣にいると、御部屋様御前様ともてはやす事あり、其御かげにて、親々が俄に汁わんをうつむけに、ひもにてぶりつかせしのりかんばんもさげおけ、もふくろうのつにむせたるやうなかたもしさいらしく、しほたれし前だれもざうきんにするは、大かた西國すじの大名がたの、舞子をかゝへるなぐさみにやなり、此まとがはずれると、かの宮川新地、手かけ月切、その外三本木瀧の下あたりに、あみをかけて待身となりゆくならしとや、)二三年はいろ〳〵とすりみがき色どれ共、中々とふ人もなし、よほどおとこぶりみがきにもたいくつせし折ふし、町内のむすこにさそわれ、二軒茶やあたりに行かへり、もはやそろそろ火ともし時、かのむすこにむりにす〻められ、わたりに船と繩手に立より見れば、つれは折々かよふ所と見へて、助さん御出なさんせ、あなたはどなたゝよふこそ御出なさんしたと、すいつけたばこ、ふたせか茶をもつ花車ともおぼしきものが、御上りなされとす〻むる、つれははしごの段半分上れど、さすがははづかしくうぢ〳〵するを、むりに引上られ、酒さかな色もありたけ出す、誠に見せつきのきわまりにて、あなたはさても八樣によふ似た、ちよとみたればとりちがへた、これはマアうれしいものじやと、むかしより極の口上、耳にとまりこ〻ぞいろのとりちがへ、かちつたへ聞、お花は半七、かみや治兵衛は小はる、けつく小町の女こそみづくさしと、心に念じ床へ入ば、さだまりしことゞも、中居が屏風ごしにかりにくる、おきわかれし上り口にて、どふやら女郎がなづみしことばのはし、耳にのこりておもしろく、四五日もすぎて、此方から助をささふもおもてぶせ、芝居と出かけ助を誘ひ、かへりにさしづめながれこむしあんにて、いそ〳〵と木戸を出て件のかど口、近所になれば助は、サア立よりて一ばい飲でかえらんと、とものふはうれしくも、はやちかづきなればうゐ〳〵しく、さながらによほどあいさつも、間に合したいけもなく、一二座遊びてかへり、よく日助とはなしあいつ〻、二三日もすぎてまた、助をさそふて見る、けふはきう用ありて得ゆかぬとことわり、せひなく七つ過に、かみ月代ねんに念を入、衣紋つくろい、藏おろしの扇をならし、たばこ入日に無用のめせき笠を手に持、寺町より四條へまわり、繩手を上へいろがおもてをとふり見つけて、くれ時なればおもひ〳〵に、衣服をかざり店先にこぞる折に、わざと東がわへうつろひて、みじまいはやう仕廻し、傍輩のいろが見付、小女郎に言付る、仰によつて快童丸見るやうなちよつぼりが、袖口もはをりもかまひなく鯊づかみに、蟻どもが虻を穴へ引こむやうに、のうれんの内へ引入ると、ほうぼいの女郎が、ゆかたにしごき帶、立ひざにてたばこすいつけあてがい、けふはどこへ御出なさんしたちよと御寄なさんしてもとがにもなるまひ、氣のわるひ、マアおあがりなさんせ、など〻あいさつに、サテけふはおやぢのめう代に、深草の法憧寺へはかまいりしてかえりじや、助へことづけはないかへと、あがり口へこしかけ、二かいの上り口ばかりしりめにかけ、とびたつ程上りたひをじつとこらへ、はりつよく傍輩ふたせが手を取て引ずるにつれ、はしご半分ほど上ると、はや袖もなひこと、うたひかけしめて名古やのふたへの帶がと引かける、いかにくたびれたとねころび、盃も二三べん廻り、露うちと硯ぶたの梅干、かまぼこ二つ三つへる比にも、色が出ぬ内へ、すこしムット氣になり、はやういぬるとそばへる所へおときはふろ上り、身仕廻の始るところへ、青豆ときの客なれば、おしろいを鹿子まだらに、ふじのさん、扨も〳〵きがせいた、おはやさんに、すじたて〻もろふたれど、半ぶんでやめてきた、ア、あつやとはな紙で扇づかひ、おなじ家の狸ども、おまへのすいた御方には、きついきのせきよう、ひがしのとういんのかの權兵衛さんへ、その半ぶん心があらばとて、こをかへば、またわるロをと、あいずりのごまのはいども、つまみぜににてもむしる仕かけ、おまへの所の文は何所へやると、はやふ屆へ、うちかたへ飛きやくでやつても、いかゝととわれて嬉しさ、やまと橋から半町ほど下に、さかいやといふ芝居茶やが在ば、そこへ出せばさつそくといけると、名殘おしくも、内の首尾も氣づかひ、狀を出すならば、おれがかへ名は三木といふはと、ねんごろにおしへ、よく日あさの間に手紙をした〻め、かのさかいやへ遣し、三木サマトいふ

か、助さまといふ文が來たらば、うけとつておいてくれ〳〵頼、また明の日わざ〳〵芝居茶やへゆくに、何のけもなし、すご〳〵かへり、さう〳〵毎日行れもするわけもなし、文はほし、助にあひ、この中おときが何やら貴樣に用がある、狀をやりたいといふゆへ、さかいやまで出せといふた、もはや出てあろふ、貴樣下へついでがあらばよつてみやと、わが狀のほしい計につれをつかふちえ袋、つれの助はうなづき、さいわい寺町の四條までゆく、よつてみんといへば、添し助がかへるをまち、たいくつくれ時に、かの狀を持てかへる、ふうじめにかよふ神、むまれて三四年といろどれども、生物より文をもらひしことは、けふがはじめなり、文をひらけば、

文とはなれ〳〵しく、御らんもいかゞとおもひ候へども、筆染り〳〵、まことにえにしはおかしきものにて、淺からぬ御こゝろがけ、いまに〳〵そのうつりにくらしり〳〵、いよ〳〵もらしま樣に御入下されまじやきゝましたく、わが身しも御げんのふしにたがひなふしのぎり〳〵、申度事はやまやまながら、御らんもむもじと筆留り〳〵、夕方助樣御どう〳〵にて、御あゆませ下され候ほど、なを助樣へ文ましにあしからず御つたへさせ頼り〳〵、時ぶんがらに御さつられのふたのみり〳〵、申度事御ざ候まゝ、この中に御あゆませ下され候べし、

かしこ

などゝにぢり、返す〳〵はおかしうひきずりて、かゞみに向ひて、はへ際のしらがをぬく女郎でも、返す書はいまだわかきこなたなれば、あしき事は御しかり、いつ迄も御心御かわりなふたのむと、文づらうれしいやらおもしろく、何となく心もいさみ、鬼かいがしまの流人が、しやめん狀をよむやうの心地にて、いただきおがみ、なでさすり、まことにしんせいの比丘尼が、ふるふんどしをひらいしとやらん、餘りに持なやみて、うすき杉はらも、わたけてちぎれやぶれもゝけてさけてうら打して懐へいれ、また色どるもうしうのよれかね、くだんの狀を、かの大名をねろふまと娘が方へ持てゆき、たからかによみかへし、もしやまた、すこしはほうかいりんきでもするかと思ひて、かの色がめつたにほれたやうに、はなしをすれば、かの娘は象牙のかんざしにて、ひたひのあたりをかいて、

あつたら金をわしにくだんせいで、米を一度に五斗程かふて、こちのからとはじまつてからなひめづらしい事して見るものと、ねからかふばいのあわぬてうしのもどる三味せんひくともおかしからず、大名をねろふ娘がかたへ、しだひにそろんになり、ひくじやとひとりゆるせしおとこも、縄手のつなわたりよほど覺へ、石垣ぐるひたばこ入に、女郎の紋を縫にして持ても、おかしからぬ樣子をすこししりて、宮川邊へ垢離を素人のひとつがひ、又座もせあしからず、後迄あそびてかえれば、よほど素人に喰おけも在、はじめ戀しかりし縄手も、いまは其門をさし足して東側へがたよつてとふる、惣高拾四兩もつかひて、はや粋の顔の思入、おなじ友達に出合、遊所咄しになると、きせるを糸切歯にてくわへ、あそびも女郎の狀のうれしいうちが、はなじやの耳じやのと仰、未一門家ぞくの異見もうけぬに、ずんとわけしり顔、わがおりおりはゆく石がき京屋が本の誰はよほどなじみ、いまでは一向に、つとめ氣をはなれて居るゆへやめられぬ、それに淡やから出るかしわがりんき、さて〳〵つとめするものは、けつくりんきふかしと、おり〳〵はかの持病のおとこ自慢がおこつて、町内のめしたき兒婢迄に、まゆげをよまれ、いまだ親父のまなこにかゝるほどはいたらぬとも、よほど母をたらし、もらひし銀の緒も、しばしとふざかり、人がさそへばこちの首尾のなをる迄は、陳をひくなど、中々いふ首尾の段へはゆかず、銀のまわりしばらくあしく、うちの銀をくらます事はいまだおそろしく、さはさりながら一念のすりみがきはやまず、當時よひおとこじやとてほれる女と、むらさきぼうしきた女はなひものぞ、遊びにゆくに、ひんそうけふたんの衣ふくにて行やうになれば、銀遣ひにはかのゆく事おびたゞし、すこしとしもより、東西の郭の味を覺れば、むかしすりみがきせし事をおもひ出てかほが赤なり平、よくよく思慮すべし、

自程曰、祝陁が公義あひ、宋朝の尻毛までぬき立て、すりみがきも、よる年はみがゝれず、よいおとこじやとてほれるは、いまにても大内の地うこんか地白かため口たる尻大きな女中のたのしみも、其外の女は目のつけ所かわり在、前がみおとしてわかづめをかうはすくなし、大かたとしまを悦も

のにて、五十よりうへの男隠居禪門がしゝは、ふり袖をねぶりまわし樂ことじや、

○あわでやみにしうさを思ひ、あだなる勢をかこつもあそびによほど油をのせかけ、むかしかよひし繩手石がけの事、人がいへばきえ度ほどに思ふ段をかきたり、

我にひとしき人しなければとは、いつ歌人の口説ぞ、や、宮川あたりの水せゝりも、中居娘の伽なれば、祇園先斗町の夕げしき、華頂山よりきしり上る、月のゑがほ我ひとり見る心地、はるはさくらのしよげたる、二けん茶やにまくうたせ、花見とて娘中居にかしづかれ、竹本大津鶴澤などがほしがるをあしらひ、めしひと箸ほど喰て居る素人をよび、料理人が金杓子を持てはしり廻るがおもしろく、明日はまるやまのさのやのと、くれにおよべば芝居のやぐらまく、夕陽に色そひ一ばい機嫌にわなり遊、小女郎がづしへきゝにゆくへんじいかにとまつに、ほどなく追付御出難有と、はや待氣になり、娘中居のやりくり聲、おかしくもげら〳〵わらひ、川原のいかのぼりもたゝむ川ばた、井俊藤代がほとりも日覆をかゝぐる折、らうそくのこしらへに、扨々是はおそひと、ばんとう中居がせきごゝろ、これもはや出にはおそし、くれからか、いや〳〵中はんのと評ばんとり〴〵、(自程曰、むかしはくれといへば、きつしりとくれにおくる、今はくれといふを、初夜過におくり、大かた女郎が辻子新地またけをかけ居、兩方はたしき、扨はじまひのはく人のうりがさをきめごまかにするゆへなり、おゝく新地をはたらく女にて、おりにひるをうるゆへかくおくりもおそし、ぎおんゑみこしあらいには、七ツ向も後のならぬうちにとることしかり、すべて東素人のならわしあしく、おのづから錢かんせうつよく、それゆへ小判せにしかけおゝくして、少しもくるしからざることか、)十四夕の長かけも武寸ばかりなだれるころ、お傳樣御出と下にはまわしおとこ、中はんなりとつけ屆け、はながみたばこ入、持かへ、ひちりめんのしたぎのすそふみひろげ、はやりいしやがはをりをさばくか、鷄が翅のすやうに、すはらぬ内に夕べの醉たはなし、おとひの芝居うわさ、さきおとゝひの山ゆき、二軒茶や北野まいり、主夜神まいり、心中かけ落、はしり坊とりまぜ、

盃をおかしう三味せんはきものごしにさする、吸物はお殺をもとらず、中居がつきあいといふてくゝめてやれば汁少し吸ふて梅干をねぶり、膳どきは座をたちて、はしこのそばにて花車をとらへ、こよひは中はんとくれと二つにしてくれと、花車をいじりて客をそしり、膳がすむと沖の石に石橋獅々がはたらく時分に屏風をひく、ちと御やすみなされとたばこぼんに火を入る、こゝへも茶をと小女郎上りの中居をつかひ、吸付のけぶり新田のかほりも、御さだまりのとほり、油じみたる木枕に延紙を打しき、これも唇にてかみをさばき、うつむけにね、はらばひし、からだをたひていにては横にはせず、かんざしでくびすじあたりをかきまわし、おかしいにおひのねまきの袖をかほにあて、目ばかり出して、文治松兵衛鯉長がとりざた、北側の初日ばなしするうちに、中居があとをとひにくる、干要の事はすまず、返答さだかならぬに今やう〳〵初夜すぎ、せめて後迄とゝめる、こゝにて中はんといふ事を言外へあらはす、うちの首尾も心元なく殘多く、はく衆もきせるくわへながら、御とまりなさんせと、けぶりを口からとはなからと一度に吹出すに、中居はおとなしく、内かたのかたひはよふしつている、しかしきつふよひなれば、まづしばし御やすみと、中居がはしごの段一つ二つおりる比に、茶一服のむ間を、十年もねるやうに身ぶり、帶をときうちとけし御けん、おかしうもじや〳〵するも、あそびの手品、さして物語するともなく御むかいと、中居ゑんりよなく屏風引まくる、ゑんばなにみづつかひ、繩手にかんばりな義太夫、われにはかまわぬいやらしいかたもつな、おもしろそふにうたひくさると打ながめ、茶をのみ、白衆は立膝に延紙持そへ、きせるもいとまごひの一ぷくすいつけ、ちかいうちに御出、介樣へよふこゝろへてをくれ、おさよとのいのへと、馬奴のあるきながら小便する樣につれへの傳語、中居へのいとまごひをたれもつてはしごをおり、跡にひとり二かいにもいられず、庭からかごへのりのこわひふとん打しき、ちかひうちにおこし遊ばせと、中居が棒のさきへ家のもんのてうちんくゝりつけ、紋日やくそくのあししろ、門口より半町計中居がかごのたれへとりつき、まへだれのしりへぬけるをかゝえながら、涼のうちに外聞でござります、二日は御やく

そくいたしますと、ふるがねかいに見せても、金二兩ほどがものをかごのうちへ言入れば、どふなりともはなしやくそくをあひごしにのせて、内の首尾あんじて、親父がおきていたらばかふいふてと、かごのものにときをとへば、もはや八つでもござりませふに、南無ざんまださうは在まひと、ねぎつてみても八ッ時にあまり違もなく、わが家にちかきこころになれば、かごのいき杖のおとも、おやぢの耳にはいらんとあんじ、一町ほど手前にており、そろりと内に、よく日しぶひかほを見て、味なひ朝めしを口をふさぎかきこみ、下の町の煙草入屋へ行て咄する所へ、おなじ友達も入來る、さて〳〵夕べは大づくしと咄の席ひらき、助はすましがほ、日暮に店へいたれば、松がいふに、こよひは木戸番いたしますといふた、おれもあとから行とおもふた所、にはかに大坂へくだしもので、エ、殘念と舌打、ホンニさよが御やくそくのものをはやふ下されと傳言した、何をやるぞといふに、すゞみのまへだれそろへやるはづじやと、咄の所へ狀くばりがさし出す一からげ、とるまおそしと符をひらけば、花舍が一通にキ雨子が文、御定もの文言に、追分繪のふぢの花みるやうな、かへす書に中居がそへ狀、夕べ御たのみ申上候涼の事は、いよ〳〵さやうにいたし候と、かすがひうち、助がかたへたのみの狀、まづよほど間も有と、しかしふつかの内一日は、是もやくそくせずばなるまじ、いまだ素人の文十通許ならでもたねば、うわ紙によくつゝみ、羅紗の三德の間に納め、花舍が狀は紙入やの女房がすき紙にやる、めぐるひかげの十日も過ぬに、鴨川の蓮千鳥の音ゆかしく、助をさそひたそがれ時より出かける、鳥又が家鳧もよほど見知有、河ばたに舞鶴からすもゑしやくする心地、何となし面白、助がつきあひにいざなわれて、祇園町いづゝが方へよるもうゐ〳〵、さながらかのれい落なるけいも見たし、大せいの中居がまへだれ、らうそくにひるがへり、娘が三味せんに、何となく爪をくわへそふな勢も、つれのかいほうにて、盃もよひかげんに間が廻りて、娘中居があなたは御なじみが有かといふに、助がキ雨子といふに、りやんともゆびも出サず、のみこみさゝやきて聞にやる、追付御出といふに、素衆も御來光、それ〴〵のあいさつ物ごと、又ほんとより花れいにておもしろく、夜半に

歸るとおもひし後もとひこず、屏風ふとん引たて、さしもやかましきだいどころも、おきばん中居が棚もとしまふ音して、しばしまどろむに、御迎と鐘は七ッどきなれば、キ雨子もしみ〴〵と、目やにをば繻絆の袖口にてむしり〳〵、この中おさよがいふ通、涼には出るぞへと、とれることはしみ〴〵とめひさのして、つれの素衆も屏風ごしに、おちかひうちにへと、だゞびろき二階ものすごし、中居がさゆを諸々の屏風のうちへはこび廻る、臺所は中居めしたきがねごと、小女郎がはぎり、八方の火かげも心ぼそく、うちも首尾心本なく、水ぞうすい喰氣なく、怨籠へのり中居がいんぎんにあいさつも、いきづへの間もまたるゝ、飛でかえりたき心持、うどんうりもねぶり、繩手の怨籠の會所もたかいびき、三條のはし河風すごく、かの千鳥の聲も耳へはいらず、おい出し鐘計耳たぶをつきぬき、中島あたり旅人がわらんづのしめくゝりよき、うちの門をはいりぬ、明の日かのさよが狀は何事やらむとひらくに、

わざとふみにて申遣〻〵、あつさの折から御さかん樣御めでたくぞんじ〻〻、さやうに候へば、ゆふはよき御なぐさみ、井筒のもとはかくべつ御たのしみあそばし候、わたくしかたは、いつも〳〵さう〳〵の御事にて、御さうにゆる〳〵御じかうあそばし候よし、夕にうけ給り〻〻て、わたくしなどなりとも、さんじまし候ものを、御しらせも下されず、よく御出あそばし候ても、御ひけにもなり申まじく候、きうし樣こそきこへぬ御事とぞんじ〻〻、けさ湊やのおとこ衆にあい申候へば、きうし樣より御ことづてにて御ざ候、御しらせ下され候へば、御じやまになり〻〻御事御ざ候や、さて〳〵きこへぬ御事と、みな〳〵申〻〻、なを助樣へよく〳〵御つたへ可ㇾ被ㇾ下候、ばんほど御出可ㇾ被ㇾ下候、申上たき事も御ざ候かしこ、

返す書には、すゞみもいよ〳〵御やくそく申〻〻、お傳樣の御文もとゞけると、夕べの井筒がしこくのくゝりかせになりて、いやともいはれぬやうになり、助がかたへも恨のたら〳〵、お傳よりもさよにねだられ、めいわくらしき文のかきやう、涼までは少し間もあり、この中に御出とせつ〳〵出られぬ事はよふしつている、助と相だんするに、どふでもやくそくせ

すば成まいと、あつき日のほどなく祇おん會になりぬ、かねてく〳〵られしやくそくの日なれば、前日よりもあたご參りと内をつくろひ、朝めし時より出かけ、小者は芝居へやり、こしづけの行厨もかたづけさせ、井筒の言わけやら、内の不首尾ばなし、床のらんかんによりかゝり、となりに助がおてきかくるすだれごしに咄をして、ゆかの下をながるゝ西瓜の皮うなぎのくしをかぞへ、河原のこやもそろ〳〵見せものごしらへ、鳥やがあひるもやどへかへる時分に助もくる、宿やのゆかたをきても、かえりあしの時分になれば、面白さもうすく、やう〳〵らうそく出す比に屏風をひく、十町そこらは極らくのてい、泣わめく、歌ふおどる、石垣のまんどう、麒麟はやくこへ松のけぶり星をてらし、まことにこれぞ日本一のはんくわともいべし、かゝるおもしろき最中にいぬる此身は、いかなる先世にわるひ事をして、ろくにあそぶこともならぬぞと、心もあぢ氣なく、中居がたゝみつけておいたかたびらをきかへ、まじめにつくばへば、助は中居を逢手にけん酒、コレよいわいの、さりとは正氣なそれほどにおやぢがこわひかと、わらひわめく、凉のうちは三味せんはならず、花火せんかうもおかしからぬ、河のはたへ床几を出させ、となりへきた小市豐七をまねき、和尚がほんひんふき吹もつてつれありく冶郎をかり、井筒の中居が付合にくる、其心よき事をさしをき、みすぼらしく歸こそむざんなれ、わざとしりきれざうりをはき、櫛をとゝのへ、道すがら小者にせんめうをふくめてもどれども、うそはあとからはげて、小者がはなしとふにおちずかたるにおつる、しれたもんくの狀もしだいにたまる、正月はつ午、御忌、三月せつく、五月の粽、大かた紋日をかづきつゝ、あまちや〳〵な遊も、少は尾ひれが付合に、外の女郎も箒てみる、後からむりにもらひにやる、その間に中居のちよがすへよし町のやどばいり、鉢目の雜器に仙人を一疋そへてやりしが、さらばこよひいへ見にゆかんと、中居むすめをつれ、嗚ごめはこれは忝と、俄に新ばしにて鯛をかたみとゝのへ、吸物ざかなを引張、外聞に藝子さまをよびませふとすゝめられて、いやともいはれず、勝の樣御いでと、くすり箱のごときをもちて、年比三十歳計の女性のずんと色くろき、黴毒跡まだらにおしろいをぬり、いくよおりの八つ

過なる帶を、うしろとまへとのさかいにむすび、さてしやきり聲にて、小栗の道行はた〳〵てう〳〵かひ、かた〳〵ことまじりに、ふしおかしくもわなるうちに、むかひにくるさよが、何やらん私語、アノ子は内證をつとめて、てこずりますと、きうし樣へさたなしに、私がところのふとんびらき、ちと御やすみあそばせとしいられ、新地の女中も御つきあひと、せんかう三四本ほどねてみる、酒小賣やの鯛の煮たよりは味なく、後すぎにかへりて見れば、夜中のかねも半分すぎ、らうそくなだれ、きうしも來たと見えて目おぼへの有かゝみ袋とりちらし、ゑふた顏にて、二かいの口からじたひ、おすみはさいかく者にて、よいやさ〳〵とたゝけば、えの吸物うどん豆腐はお傳がしやうばん、こよひも辨慶どう〳〵じやといえば、中居が何事じやととへば、ハテ七つ道具じやと屏風のうち、少はおだやかならず、よひの新地のもちこみて、口せつのやうなれども、とうふにかすがへこたへなく、キ雨子も快ね入、うちへもどつてみる、さしてりんゑもなく初戀しかりし事は、少はわれながらおかしく、櫛笄貰てやつたがおしいきみ、到來の文もしはすの月はうるさく、くる〳〵卷にしておしこむ、しからば少粹にもなりしかとおもふに、中々以その段へは及なし、あそびに少し目はなの付たおもむき、伊藤玉忠が印かのものはすくなし、金口春は二軒茶や、丸山にてはく人やらうの輩にのり、芝居は貳軒つゞき、娘中居を御籠にして、其身は中居牽頭と飲つゞけ、逸風がよいやら、慶子が面白やら、月は三本木安井、雪は湊屋さのやのさわぎ、はてはきうしもおやかたの手をはなれてしまひばたらき、はゝ親とふたりぐらし、内には女郎の二三枚もかゝえ、せたひじみて面白こともなく、のちは役者の女房きはまる、ェ、あたら金をすてゝ、その金をもつて柳が下に立よらば、むまひめに大木のかけかぶとやら、まぶとやら、よひ事のあるとおもふはふかくのいたり、そも〳〵柳陰色のすいとりやうは、また〳〵東郭などのごとくこまひになく、鮴のはつかねづみよりはむごひ仕合、むかしの西色女はわけしなもよかりしが、當世のよねは隨分ひすらこふして、先以て時節から不相應に高直なり、南香のとまりし打かけ姿は、よく〳〵しあんしてかのさとにおもむくべし、

自程いはく、當時じまひの素人は、まはしのおとこをとらへ、中はんの大はやのと、自身づめをせわしくいゝおしゆる事なり、或沙門いはく、此一卷はまへがみよりあそび出し、素人をかひ覺るまでをかく、その文字やう〳〵としてひろく、故々としてゐりくりのゐりくりまでをさらえ、建長寺のとりほうき客を言外にほめて、わけなき中になづむを毀る勢有り、

○人の心はおろかなる者、匂ひなどはかりの物なるに、しばらく衣しやうにたきものすとしりながら、えならぬにほひに心ときめきするとは、吉田の法師も粹なれば、此だんこまかなる所に、心をつけてかきつゞけたり、

柳陰城は、柳下が惠が親里かもいさしらず、中華は青樓妓樓といふ、古より九條の三筋町とて、九郎判官のふかくなれし大文字屋の靜より、色脈綿々として絶ず、吉野野風金太夫花ぎし小太夫抔いふ名花ひらき、客の心を和らげぬ、東武の高雄、浪花の夕霧はこれをしらず、君子は不ㇾ知ことは闕如スと、仲尼といふ粹のおじえ、都に住ば及ばぬまでも、其地のことをしるが干要ならんかし、海に臨みて渡りをとふことはなりもせん、西色はそのしる人のなければうかみがたし、東郭のあそびも何となくうつろい、助がさそひもさしておもしろからぬ折から、おもひよらぬが風のさそひて、柳が本に立よらんといふつれこそたのもしく、こよひ夜みせを見ばやとさそはれ、放參時よりもゐもんつくろひ、かのひがし風をもつて、うへにはつたんかけの羽織衣ふくそろへ、下着はふる手染の小紋、はちくのうら付、きびすをぐれつかせ、二條の番場をすじかひに、さながら衣紋坂へはおもいゆく、入日もまだかゝやかぬに、朱雀を西口へまはり、いまだ女郎出る時分にもあらず、麥の浪のどかに、平郊の菜花うこん色の如くたつ氣しきは、四條河原のよそほひとは、はるかにことかわり、水茶屋のかゝが黒木をたきつける比、人らしきものとふることもなく、新柳の大木戸こそ氣味わろく、つれの源がゆく揚屋はみなみのはしなり、兩側ののうれんみぞ石をねぶり、のきにならべし大つゞら、ふぎんもどきの日がらかさをたてかけ、大ぶろしきづゝみを、いくつともなく棒にさして荷ひ行、いかなる事ぞと源にとへば、されば、こそ、天神以上は夜具つゞらへ入、はし女郎のともがらは夜具をふろしきに包、口の茶屋北の茶屋にては、はし女郎をよびてあそぶ、これもたいこきりとて夜四ッどき迄、それすぎては揚屋にてとまりあそぶ事、よく覺へおしえられ、さてかのあげやとやらんへゆくに、何のけいきもなく、中居らしきもの、ふるきまえだれをつゞり、花舍は臺所に座頭とさよ衣をさらへ、いとこまゞときこへ、花舍は三味せんをさしをき、よふこそ御出あそばせ、あなたはどなた、御上りあそばせ、コレ此きやく人は、かねてうはさをした三木といふわろ、まいどすゝむれども東鳥にて中々うごかず、けふはやう〳〵夜みせ見たひと、御意がおりたゆえ御來迎、何とぞ此さとの本尊になりたまふやうに、花舍がきねんたのむと、くわんたをいふに、よふこそ忝、いまからひがしの御かへりに御より下されませと、中居茶だひにてはこぶ、花舍が吸つけ金孫草もだゞびろき臺所にくんじ、ひがしの新田とはちがひ、服部のまひとめとて、一ぷくにてよふこたへ、八はすくなしすみ〳〵はくらし、何とやら物すごくおもへども、二かいへあがるに、替らぬものは梅ぼし、しばらく有て禿ならんと思もの、油にて殊外ひかる小袖を着し文を持、花舍がそばへより、アノ此文を明日までに、茂七のかたへとゞけておくれなさと、口上いゝすて廻る比に、大ふり袖のかぶろ源がそばへより、太夫さんのよふ御出なされました、追付さんじませうと口上いひてかえる、禿に花舍がアノ子いんでならば大夫ゝにはやふ御出なされと花舍が傳語、扨是からよねサマがたかりませうとせめかける、源がとりさばき、太夫をかりにやれといふに、程ありて表に數ある下駄のおと、たゞいままで郭公鳥のなきし臺所やかましく、梯子のあたりにゐもんつくろいゆるぎいづるよそほひ、引ふねが付そひて、よふ御出あそばせとあいさつ、御上人樣座に付たまひ、引ふねが吸付ぎせる、花舍が盃を奉るはおもわくらしき幽靈のごとく、申と計聲をかけ盃をさし、こなたも太夫の盃をいたゞくことなれば、何となくかど〳〵しく、盃をとればゆるりと御遊びと立しな、花舍ゝのちほどへと、あいさつの色をのこし座をたつに、花舍はぶでをもち、地ごくのめう官を見るやうに名をとめ、今のはわか紫樣と、それよりだん〳〵おなじやうなるあび

さつ、しよていめくろほしき來る程に、まなこもちろつき、顔も形ちもどぎまぎしてしれがたく、源が逢ふ松の位も來り、あなたかねておうはさのかた樣かと、あいさつしほらしく、花舍は筆を下におき、大夫樣みなかりました、御物數奇いかゞとうかゝへば、しからば是といふもおもはゆく、こよひはかえらふときはまりし口上有圖なれば、花舍は心得、こよひはまづ始て御出下され候事、せびにおとめ申ます、もし御氣に入らずばかさねてかへて上ませう、太夫さまも、ひとつ御あひなされてはかえることはなります、二つ御逢なされてはなりませぬ、重ねてともかうも、はじめてなれば御もの好と源も中居もせがむ、こゝにひとつのぼんのうは、三番めにかしにきた、ひぢりめんの帶付に、くろ羽二重のうちかけせし太夫とあれば、高橋サマとてかどやの太夫樣、それをとおもひの外なる注文と、さつそくよびにやる、いまだくれぬうちからふけたる御物好、むべなるかな此里にては、二番とさがらぬ年まのけんかひなれば、外々の太夫よりは、そばへよりてかしにきた時の盃もしつぽりと、さて名物のにほひに氣も上り、御門跡樣の佛だんの心持、はしごをおりしなに、あとを見返り心ありげに見えしが、初段のやみつき、日もくれかゝり、しよくだいも二ツ三ツならべ、橋サマ御出といふより、しつぽりとそばへよりて面白イめもと、しかれども素妓とはちがい、太夫が三絃持ことなく、座もめりかゝるを、花舍が源にそうだん、太鼓女郎をよびませうといふに、又別にあげせんかゝれども、せひなく藤波といふ三絃の手だれを招、ていしゆはまかり出、はじめての御かた樣、御ゆう引下され候難有とさんたし、晝時よりいなりへ參詣仕り只今罷歸り候、御盃ちやうだいといんぎんに相のぶれば、かねて源がいひふくめしことなれば、盃にそへて一角をはづむ、おしいたゞき座敷を退出し、神の柳の鈴がら〳〵、扨こそいまの一角が鳴とほどなく夜食、ひがしとは違て、その料理の見事さ、節のやうなる獻立にて、六月比までも鰤のかわらけ燒をつかひ、五月比に正月の鹽小鯛を用て、夜しよくにても夕はんにても、くはれぬやうなものが此里の格式とて、自まんは何ぞに旨味の有事ぞかし、膳のうちは、女郎もうちかけぬぎ座敷におき、勝手へ立ば引ふねがきうじ、太鼓女郎がめしをしいるが花舍が平ざらのふたをとる、夜みせけんぶつはわきへなり杉原折のたばこ入のかほりにふすべられ、初夜とおぼしき比、門前しきりにさはがしく、何事ぞと尋れば、今よみせがすみました、此中に御出あそばし候時ぶん、御らんなされませいといふうちに、かぶろがみゝもとへさゝやきにくる、ハヤ氣がゝり、むかひへかしにやるかへりがおそひと待かねる、その顔はしれたはなうた、東ではやるは沖のいしの手をつけかへ、鯉長がおしえてくれたといふに、花舍が心得、三味せんとつてあてがひ、藤浪スとちと御つれ引あそばせに、藤浪がおしへてくれたとのせる、ひがしとちがひ、御性がつきませうともたせぶりに、しどけすがたにてもどる橋が顔付までも、まさ都スの盃のむりにはこまると、おそかりしいゝわけせぬばかりにそばへより、源がおてきも神妙にはなしするうちに、アラふしぎやあら男一人料理人くる、女にどたゞくと二かいへ上り、何事やらんとおもへば、かの大つゝらの中の夜具なるべし、一間を引まわし有明をしかへ、太夫さんめしかへませと、盃を花舍が取入、かさねぶとんに二ツよぎ、引ふねが心得にて太夫がねまきをきせ、ねん比にたゝみ付、引船が伽に吸付たばこ、さして咄す事もなく、もはやくるかとまてども足おともせず、(自程にいはく、わかき太夫にはふねをば置て、客の掛をとる、高橋ごときのざれたる太夫には、わかき引ふね故、此場所にてさして客の氣をとる事も入ぬものならし)こよひこそ太夫とだかれてねる、兼々けいせいはふるとこそきけ、一生のいろとる時節此時にあり、東にてよほどわけをしると、橋をなづませおもはれんものと、東とはまた一風かわつた里であろかと咄し、七つ時分にはいぬるべしと約束かため、源は手をうち、七つ時分にはかえると、怨籠を云付る、源が御てきは二かいへあがり、三木サマ御やすみ、のち程とあいさつ、こちのはなせにおそひ、またとこぞへかしにいたかと氣にかゝり、あぐびやらのびやらまぜる折から、難有御來迎、隣へことばをかけ、太夫ス御やすみと打かけをぬぎ、ねまきにしごき帶、かのけつかうなる匂ひにむねもどきつき、ふとんのうへにつくまひ、緋ちりめんの小袖をば、おしげもなくして着こなし、かぶろが吸付眠に煙をふきませ、手道具のぶんこ、次の間にとのひする引ふねが枕も

とに引よせねるに、まくらならべしよそほひ、素衆とはかわり、髪のすがたもいやらしげなく、銀出し花の露はおもひもよらず、十日もはつかも髪をもつことはせず、毎日々々ゆふとみへてねばりけなく、小袖はうならぬにほひ、なるほど南香とはおもひながら、橋が身から、此やうなよいにほひが出る樣におもはれ、さて駕籠がまわれど出くすみ、やう〳〵と源にせつかれ、名殘おしげにふとん立出、むかし坂田某といふ役しやが藝言葉に、ホンニ太夫とねたときは、ほねがなくばひとつになりたひとい、しは確言哉、あかぬ別の駕籠はものかは、臺所にてきぬ〴〵をおしみ、引舟花舍がおくり、源は太夫に引そひ大門口へおくるに、うらやましく、此中にえとことばを殘し歸り、源が太夫が道すがらねんごろに、かならず〳〵ちかきうちに、源スをつれて來てとたのむに、東のしらむ比に、柳の招木陰もさびしく、本國寺のかね御堂の大鼓、耳めづらしく思る、あし六本にてとぶがごとくにかへりし、是大病のはじめならんかし、

自程曰、西郭は、およそ初客ついはなづむ地にはあらねども、屏風のうちのからくりよくしかけたるが、あとを引ことしかり、すべて人げんのたねなれば、其味をおぼへば、此さとをはなれて外色になし、東になづみし男が、思ひきつて西色にいたらば、そのむねをしるべし、近き比、京師におとこ自慢のきやく、はじめて郭にいりぬ、花むらさきにあひしが、そのさまおかしくおもひしが、屏風の中おだやかならず、そののち人のさそひしに、西郭は五月雨の比へたなる座頭の三味せんをきくに同じといふは、かのふるといふ事にあひしゆゑぞかし、

○風も吹あへず、うつろふ人の心の花に、なれにし段は、東の色も今はうつりかわり、西かせにうつゝをぬかし、家もくらものしをつけて、かの色にやるほどのいきほひをかきぬ、

よをうつせみのから衣、此身はいろにうつゝなきと、淨るりの道行がゝりのやうなれども、夫にちがひもなく、いつもよりあつまる紙入屋へ來てみれば、きう子が文を大事そふに出してあてがへば、むかしにかはり狀の符じめ、あら〳〵しくきりほどき、まばらによみおはり、何やらたらぬ顔付、まことに繩手石垣の女中のねごと口上にちがひなく、かも河の瀨と男の

心は、一夜にかはるといひしもこれにや、ホンニきのふまでは、キ雨子が文はてんにんの筆とおもひしが、けふはひがしのなつかしき事もなく、狀をねぢて袂におし入のすみに鼠のうぶやとなる、いつもかはらぬ助がきたり、きのふ八百清にてキ雨子につきあふた、十九日御身拭をやくそくたのむとことづて、きいてもおかしからず、はや馬の耳に風をひかぬにはなぶ、しまばらのしだひ口へ出し、はなしがしたふてならねども齒をくひしめ、おのれちかきうちに、柳がもとへつかみゆかんものと心に念じ、いつもとかはり、只せけんのうはさに助もてうしのらねば、紙入屋にてしかみがほ、ふうつの狀をあけもせず、折から源が表をとふるをよびこみ、うつりとてゆかしく、昨日は添と一れい、助はいづくへ御出ととはれて、蛸藥師のうたひき、にと問に合、源はしほりとさぞ御たいくつとあいさつ、これはめいはく、近々又うけ給たしといふ袖へ、源が手から一通を入ぬ、表を見れば花舍が文なり、そのことばにいはく、

口ながら一ふで申上〱、まづとやきのふはじめて御出下され添存上〱、何の御なぐさみもなく、御せいつき候はんと、げふしもたゆふ樣とつきぬ御うはさ申〱、この中に御しゆかうあそばし、御出下され候やうにねがひ〱、まづは御禮御とはせまでに、あら〳〵かしこ、

何事もない文なれども、太夫とうはさがきうびへこたへ、茶わんわつたやうなかほにて、文をくわい中すれば、源はさすがにくるはの正月にも逢ふたものなれば、さゝやき、コレ太夫の一ッかひと、鮎のひとこゑは火にたゝるぞや、きん日まいちど御出なされ、そのあとは勝手しだひとすゝめの添く、しからばこの中に、御影どうへいなかからたのまれし扇子をかひにゆくほどに、貴樣御手すきのせつしらせ下されと、わかれてより、けふや源がさそふことか、あすかと待に、助がかたより先斗町へさそひの文、何の面白もなひめんどうなりと、よぎなき障入、殘念とへらをつかひ、キ雨子のきの字もおもはず、袖に殘りしうつり香こひしく、鮒のごみにゑふたる心地するおりふし、源が手紙に花舍が文、御出下され候へとの事、今日は川事に付松原堀川邊までまいる、花舍が文も御ゑい堂いかゝとたづねに來、御出候はゞ七ッ時分に、壬生の

南の門の内に茶や有、御まち合といひ來る、難有と返答して、七ッ時分迄は待たひくつ、その間に親父が用事にてもいひつくれば、難波と思案し、かみさかやきはさいはいと今朝すむ、北野參詣とうそをいふきの小袖に、郡内じまの下ぎ、黒羽織、はや東風もすこしは替り、未申の風がさそひて紙入屋へ立寄、助が見へたらば、今日はざんねん一家ともに、七十の賀の振舞が有參ると、よふ心得て下され、仕出し煙草入調へ、壬生の地藏と出かけ、かの茶やへ行て見るに、源もいまだみへず、此茶やも並々ならぬ茶見せとみへ、いまづやいせや大龍寺のつじとの間のものとみへ、ちやみせよりは盆やが本職とおぼしく、おくにすだれおろして、奉公人の出合かぼい〳〵とはなしするおと、何やらこのもしくおもはれ、たばこにも醉ほど待合すに、壬生と會式のこしらへ、小屋かけする東の堀へ參會のものがざはつく、もしやしる人が有ばいかゞと奥へ引こみ、茶やの荆婦に何時ぞと問ば、もはや八ッ時でもござりませふといふに、コレハ七ッ時迄はよほどあひだが有、さて〳〵このはるは、いつもの春よりは日がながひとつぶやく、かの籠の中には田樂酒などにてたのしむ、少は美太夫をかふては、町のものはむさひとひとり心にたかぶり、帶などしかへて待に、源は足ばやに來りて荆婦に近付とみえ、おそふ御出あそばし、あなたは壹時分から御待、是は御待遠、道にておもひの外ひま入と、こゝから小ものをいなす、貴宅へ用事はないかといへば、コレ庄吉、もしうちからそちへ尋に行ば、北野からすぐにすみやへ、うたひを聞にいたといふてたもとたのみて、味ない茶を一二はいのみかゝる、折ふし戀無常の世のならひ、三十斗の女がとりあげ髪に珠數もちそへ、見せをかりて涙ながら風呂敷包よりしほ〳〵とはこ入の人ぎやうとり出し、袋も赤地の男の子、守り袋をもちそへて出せば、荆婦がおいとしや、御子樣を御いなしなされましたなととぶらへば、アイとなみだに、下ぢにめも泣はらし聲くもり、六ッになるひとり子、はやりものにていなしまして、けふはゑんまサマへ人ぎやう上に參りましたと、あはれをもつも人間のならひ、ふたりはさゝやき、何とやらんむねしほらしく、とかく女房は持ぬがよひ、もし子でも出來、アノやうな事に逢てはいちらしい事、知たこぬかあきないがましじやと、つへにすがつてもあそびに行しあん、千本通を一もんじに、いし橋も三ッ四ッこへ、西口の木戸も此中とをりしよりはよほど心よく、はきだめ山田樂やのさびしさも、けふはわびておもしろくみへ、大坂やの軒には日がさ立かけ、揚屋町もすぎし比とは逆て、太夫天神の道中、しかも寄べき下駄のおとに、東の方より怨籠にておし來る、呉服所の手代らしきもの付そひ、田舍のさぶらひを連て來りし體、南無ざんけふはいかふにぎやかなり、もしや橋をどこぞへ揚はせぬか、それではいかふ氣のどくと、宿坊へゆけば、この中は御出下され難有、さてまづけふよふこそ御越あそばせと、ていしゆ夫婦があいさつ、けふは下京へまつり立よりしと、すぎしよりは梯子のはゞもよほどせまくおぼへ、花舍、源に何やらんさゝやく、これは橋がひまが入といふかと、はやむねもふさがりあんずるに、源は耳のそばへよりて、なんと色をかえるか、橋スにやはり渡るかととはれて、案堵の心地、イヤ一度でもなじみしがよひと、半分花しやがき、はつれの有小女郎が格子へ啄にゆく、程なく引ふねが口上使、花舍が傳語、いらたぬ氣をいらちて見せる、見せ先へ御出なされて道中を御らんと、これはよかろうと、のうれんをへだて、おもてをながめ、此中よびし太こ女郎が、又も付こみ、花舍は見せ先へ出て女郎をかる、のう〳〵と甲を干に出、天神又は頭きんふか〳〵とかぶり、揚屋町をうさんらしくあゆむ侍も有に、北の辻より家の紋の日がさ高くさしかけ、夕日も照そふ紅スおかしなさと、ニットゑみて盃とり上て、申上ませふに、花舍は紅樣と申、橋サマのいもと樣といへば、紅は御うはさはきゝました、三木スカへ、今から御心やすふと、かわひらしい言葉をのべ、座を立花屋へゆくも、田舍客のやくそくじやと、扨々けつかうなるものを、呵者にだかすはおしいことゝおもへども、うり物なればせひなく見送るほどに、はしはしとやかに、禿にきり花もたせ入來るを、角やからかりませうと聲かけられ、てきにうしろも見せ先から、三木へゑしやくしてかしにゆく、すみやからかわりに萬太夫をかす、せわしくよび立ること、人間かいにはきゝなれぬ聲、三枚がたにてぶち又へかきこむ、松と梅とゆきちがひ、引ふねかぶろが使あるき、遠國の順禮のもさが、ゆかた短くきなし、赤もめんの

ふんどしのたれたぶやかに、揚屋の軒をのぞき廻り、そのなりかたち見るにつけても、かはいや田舎に生れて、此けつかうなたゆふのあんばいしらぬなど心に觀念し、ほどなくらうそくも立、かはらぬ夜食も見せに賞くわん、家の犬尾をふるもかはひらしく、櫻つつじ冬ぐさなど、ひきびやう風のうち廻し、御げんよりはかく別むつまじく、ちとねやふとすれば、せゝりおこして膳をすへる、抑恐母が胎内を出しより此かた、かやうにしいられしことはなく、ホンニおもへば、はくじんは味なきものと、獨したうちして、いきやすめにはたばこ吸付、橋はさもおもはゆげに、おまへ東によしみもあれば、何をいふてもはづかしいやうなれども、初て御げんなりしよりよしみをかさねし心と申さば、おまへは粹なれば、何をだますと思召かもしらねども、さら〳〵さやうの心底にてはなし、あそびの事をよく御合點ゆへ、けつく打とけて物が申よい、此里もむかしとちがひ、今はことの外さびしく、私共もおやかたの手前心ぐろう、紋日はおゝし、ことに私を新造よりせわになされ下されし殿達も、去年御はてなされ、便にする殿達はなし、あちきなき身のうへとおぼしめし、御心替りなふおり〳〵は、文にてなりともおとひ下されかし、あそびのわけ御知なされぬかたへは、はなしのならぬ品々と、未妙の所より持込に、左も有そうな事かな、此くるはとてゑようには身はうらぬ、親のためせひない事にて此つとめと、しかつべらしき口上に、橋はしほ〳〵としてゝくがひほどよにつらひものはなし、中々にも此さとは、外へ出る事はかたし、東のつとめは方々〳〵へなぐさみにゆく、せめてもたのしみ有、何にもしらぬ殿達は、女郎は間夫ぐるひするとは、それはむかしの事、その時分は此里はことの外繁昌ゆへ、おほくのとのだちにもまれしうへ、遠郡のかたむくろなる客にいぢられ、氣もつきる故、粹なる男となれ合たのしみしが、いまはとのだちもおもしろくあそび、殊におまへのやうなすなほな粹も有もの、ナンノ間夫が入ものぞと、又だきつきて、こちから心中を立てもとゝかぬ時はつみかさなる、よく〳〵たび〳〵逢れぬとて、心の替るはまことにてはなく、またせき〳〵あふが嬉しびものにもあらず、たとひ一年に一度の逢瀬であはふとも、心中をたてとをす氣でござるとしめつけ、しかしかやうにいはせて、東で御わらひかもしらず、されども女はおろかなもの、ほんに心便のなひわたし、それはまだ〳〵ふかひ咄、言出す所へ源がのさのさおきてくる、さて〳〵邪魔なおとこ、ことにこよひきつひ夜のみじかさと思へば、はらはもゝにてしめつけて動かさず、うち〳〵するうちに、七ッかねやら鴛籠やら、よひゆめみさひてめの覺たる心地、なごりおしさは海山なれども、源にせりたてられ、柳がもと迄つれだち、大門口にても橋がさゝやき、此中に鳥度御出下されと耳へなげこむは、それをきかひでもくる氣なり、はや東がしらみて、丹波口に東寺あたりの小便かへが、はなうた遙にきこへ、雲雀が金次郎金次郎と鴛籠の名を呼をきくも、ひとしほうらめし、

自程曰、此一段は身毒の段となづく、橋が打とけし風情は、中々わかき女郎のおよぶべき事にあらず、たとひ朱買臣なりとも、此段にはおよくべき餘情あり、柳がもとにさゝやきばなしの殘を結ぶ手段、よく〳〵味て、親の折檻一門の異見をきくことなかれ、

○名をきくよりやがておもかげ懷し、ひとり燈の下に文よむとぞ、なぐさむわざのだん、

浦しまが玉手箱にはあらねども、あけてくやしききのふのけふ、いかゞしてすぐさんともおもはれず、おもてのひとまにとりこもらんもしんきのたね、紙入屋へ行とてもおかしからず、助にあふがうるさく、いかゞと思ひわづらふ折ふし、源がせきばらひにて見せへ來る、橋に逢心地してうれしく、かのひとまにいざなひ、たがひにねぶたそふなめもとにて、夕べはとあいさつに、源はわりひざもとへ、いかさま三度飛脚もよほど見事なる狀、ちん取べき文のかさ、ふうをひらけば源がてき催馬樂が消息、橋よりも源への文も有、まづ〳〵源がてきの文を見れば、

まわらぬ水くきのやう、御らんもいかゞながら、きのふのうつりにとはせられ〳〵、いよ〳〵御き嫌よく御首尾もよろしく候やいぶかしく、ゆる〳〵御一座嬉しく、けふしも太夫スと御うはさ申られ〳〵、太夫スにもそのよはに御入候、御しんやすくおぼしめしられ〳〵、ちが〳〵に御一座こそねがふ、かしこ、

これは忝し、さて〳〵見事よひふうの手跡と、ねんを

入てたゝみ、さて橋が文は曲尺にて四寸計のあつさ、封じにかけて五大力菩薩とかきすへたり、何とやらんふうじをきるもいた〳〵しく、このまゝ守りにして、首にかけてねたひ物なれども、つばにてぬらしひらけば、三よし杉はらおしげなく、伊せ音頭かゝりの文句なる文、

あひみての後の心にくらぶれば、むかしはものをおもはざりしことの葉、けふこそ心にこたへ、むねひとつにたどるは逢坂の道かや、われにひとしき人もなく、御心のそまぬをひとりこふるも、ぐちかに候へども、別てけさのつらさ、いつそむすばぬ帶ならば、とけし心のおくふかくしらせたく、末たのむも水にゐをかくならひ、かはるふちせの人心、よく〳〵我はかくおもひこめし心なれば、むげにえこそすぐさまじと、おろかなる心にこめ、筆のあゆみもしどろながら、きぬ〴〵のつらさ、袂にのこるうつり香をおしみ、いつのつらさになきそめしとりをうらみ、かねをかこち、のこる月影のうらめしく、又逢事のいつといふ事もおぼろげなれば、ゆびをおりてかぞへん日もなく、御なつかしさは御さつしにもおよぶまじく候、まづとや夕べはよくぞや御心がけ下され、殊にみちぬる御げんにむかい、とし月かさねし枕のやうに、あやなき事どもはづかしく、しかし殘はことの葉、心ももだ〳〵しく筆にていはんもつゝみかね、其儘に御入あそばし、御かえりはおそくはなかりしかや、御首尾のほどもあんじ、けふしもさう〳〵此もとへまいり、うわさもつきぬひとつと、源様へよく〳〵御つたへ御たのみ申たふ候、主計も（引ふれの名也）よく申たきよしに候、

かへす書もいやしからず、ちかきにしばしのうちは心がけたのみ上ると、源は背をたゝき、貴様はどふしこなしたれば、二會めに貴札到來せしめしや、天神がやう〳〵二會めに短文をとばす、ましていはんや太夫においてをや、何ぞよひくすりをふりかけることか、きびしい事じやとそやされ、にた〳〵とわらひ、心のうちの難有さ、結ぶの神をおがみ、又はみちのくの金勢大明神のかごをいのる、かやうの事は露しらず、これ迄むだにくらせし二十年來、源もいとま乞してかへれば、またいつ行ともしれず、めねぶたく、で

つちの岩吉が夜食時分に、箸箱のぎんみ、箸と橋と音同ければむねにこたへ、夕べ今比は橋と盃のとりやり、こよひいかゞしているなどむねにつまり、めはねぶたく心はさへ、夕べのうつりがはなのあたりにのこりし延紙に、はしが口紅のつきしをそばにおきあり、明をちかくよせ、かのふみをよぎの袖から首を出して、よみかへしくりかえし、布ざらしの人形見るやうにたぐり、この中きてくれと有が、一寸いてすぐにもどらんか、どふいふてかふいふてと、心ひとつにたらふくしあん、煙草も夕べとはちがひ、舌もさゝけて味なく、文を枕の下へ入て、せめてゆめになりともみまほしく、二更にもならざるに丸ねするこそ、

自程曰、二會めにはしがもちこみは、かはりし所よりよくつなぎ得たり、若年のよねが工夫のおよぶことにあらず、此文の文段は、むかし此くるわ慶長年中にひらけし時に、元祖上林又左衞門といふもの、女郎のために文の書やうをおほくつゞりぬ、その文の作者は、北山の邊に貞德の弟子有、出家して隱とんせし僧の作なり、其文をよせて錦木といふ書あり、四十年前火災のとき燒、間々有之、もとめみるべし、名をきゝてもおもかげのなつかしさは、はし箱のはしがむねにひゞくならひ、此一段は人人心にて意味をしるべし、

○飛鳥川のふち瀨、つねならぬ世にし有ば、色々にかはりゆくがならひ、四條がわらすつぼん泥（どじょう）鮨汁（すいもの）のさきしきを、夕べの夕だちにて、けさは三文づゝにて川ごしをやとふも、ことはりなり、

わすらるゝ身をばおもわずちかひてしと讀しは、右こんがいらぬ貞女だて、きのふのさまけふは定なく、よこ槌も海棠（さくら）々々といはれしが、この比は東ふく風もよほど面白からず、毎日々々行紙入屋も、うと〳〵して、下の町によをむつまじく夫婦くらす、これもむかしは梅位（てんじん）にてもあると見ゆるかゝが風俗、夫婦あしうち、店にはうたひ本など少し出して、源が郭の文を取次所と近付になりて、日ごとに橋が便を待身をなりしさま〴〵、紙入屋にはいかゞとあんじ、助とうはさすじより東の狀三四通もたまり、ことに昨日到來の一ぷうは、喜雨子が用事の文、なか〳〵その分にさしおきがたく、助をたのみよびにやる、ぶせうながらも立よれば、かゝが片顏をゆがめて、きつひ御み

かぎりなされやう、せめて一月に一度は此みせへも御出下されませ、キ雨子さまの文ども、ねからとゞけぬかとしかられ、いかふ氣のどく、用事の文とさしいだす、ちかひ比はなせにやら、外へは出ともなくうちばかりに居ますといひつゝ、此文見たい事はなけれども、紙入屋が手まへも有、ゆびにさかむけの出來るほど、むごたらしうふうじめをきれば、

御らんも有まじ〳〵と思へども、文にてとわせ申らん、その丶ちは御うと〳〵しくぞんじ申らん、いよ〳〵御機嫌よくまん〳〵めでたく、この比は八百清にて助様へちよと御めにかゝり候、御ことづて申らん、屆き申らんや、きつひ御みかぎりなされやうにて御座候、まづ〳〵夕べは助様御出あそばし、こなたも御客にており申らん、もしや御出も御座候やと、後までも見合申候、御出なくかえり申らん、きつい御みかぎりやうと存申らん、さては十九日は日がらにて御座候、こゝもとへいで申たく候、はや〳〵御出下され申らん、かしこ、

かへすゞ〳〵御出まち入申らんと花舍がそへ狀、十九日には御やくそく、いたし申らんまゝ御出下され候、キ雨子もひまか、さて〳〵きつひおしつけうりとはおもへど、また助がたき付る、中居どもがせがみし事が約束ひとつのかづき、十九日にいたとて、おさだまりの事もおかしうないが、助が手まへいかゝなればまづうけ取、かの源が中やどへ立寄みれば、源はおくに文をみる折から、コレハマアよひ所へ御出、今貴宅へ行ところじや、といけものとさしいだす、文のかた書にきう用じと有、是は何事ぞとむねもとゝろきのはしが文に、花しやがそへ狀、

わざ〳〵文にて申上申らん、いよ〳〵御機嫌よく御嬉しくぞんじ申らん、さては此十九日は道ならぬ日がらに御座候、太夫様が事きうにまちがい御座候、御やくそくの事は御だんがうあそばし御頼申上申らん、何とぞ御りやうけん進られ下され申らん、太夫様御ふみもたせ上申らん、御わもし御入口下されかしこ、

橋が文をみれば、貫之の長哥見るやうなる文章、十九日の事少ばかりかき、たゞ逢たひと計也、これはめいわくともおもはず、約束がまちがひたらばさぞ難義と小鼻をうごかせば、源はしさいらしく、いかさま約束も一度はせずば成まじと、尤らしき口上、さいわい十九日は御身ぬぐひ、嵯峨かよひ鰐じや、源がてきは花びしやへ出るげな、なぐさみに行べしと相談きわめぬ、此やくそくがはじめよりもくさんの事、約束まちがひのまの字はひまのまの字にて、客のすくなきゆへなり、さらば返事をかいてもたせてやらん、横町の七助こそ折々駕籠にもゆくげな、さとへやる文は俗筆のかな文、花しや引ふねに嘲哢せられては一分たゝず、膝ともだんがうの太郎左衞門は居す、(自程曰、大塔宮三段めをのせたり)高直の紋奉書二三枚相とゝのへ、筆も玉氣流を壹本かひ、かの藥研のごとくなる硯に、橋柱を見るやうな墨をすりながし、かきそこないまわる下手の長文、橋へやり手が見るもいかがと、いらぬ日事にゑんりよして、七助をつかひ、そしてもたせつかはし、扨これはよし、こゝにきのどくは、キ雨子も十九日やくそくいかゝすべし、東へ行たいことは、ホンニ小人島の鼻くそほどもなけれども、助がおもわくもきのどくとつぶやくに、源はよろこび、それこそさいわいのなぐさみ、七つ時分より東へゆき、暮時よりはしをわたるべし、これはいかふよかろふと、十九日をけふやあすと待かね、日かげもいとどながく、やう〳〵その日にむかへば、昼時より二軒茶やへ出かけ、中村やにてなまやけなる田樂をくひ、八つ時分に行てみれば、中居どもがまだ大はだぬぎにて、たがひにかみのすじをいれあふ時分なれば、みな〳〵川のはたへ出て油手をあらひ、まへだれをあて盃を持てくる、辻子へ人をやる、中居がとり〴〵きつい御見かぎり、何が御氣にいらぬぞい、つじなどへ御出か、ほんに文もたび〳〵上ました、き雨子サマもせつ〳〵御出ては御たづね、姉川新之助さんは、座敷へ出しては女のやうな、大吉様が子をうまんした、其靜様は御引なされまして御隱居様同前、ほんにいつ御出たまゝじやぞい、むかし噺がいかいこと有、楠がおもしろい御客と見にいた中松のよしが、此季からこゝへみへた、さつは井俊へ行ました、河原の馬のかるわざ、あなた様はどなた様じや、よふ御こしあそばした、きうし様はやふといふてせがみにいたか、御肴もておじや、御てうしのかえをと、そのとりませし物語、乞食のめんつうに入ておくはなし、申あなたへ御盃あげませふ、こゝな御かたは源様とて、かたい

御人、日外よりうちのしゆびがあしい、それゆへあの人を頼で、けふ嵯峨へ參といふてやう〳〵出た、暮切にかえると匂はせ、それはせわしい、たま〳〵御出、外ではゆる〳〵あそばすであろ、それ御吸物と、鯛にさんせうのめやら鯛のめやら、いきづへのおときこへ、程なくキ雨子樣御出と、高聲によぶとひとしく、ゆるり〳〵と座につき、さて〳〵こゝなおはつが、せわしういふて見えた爲、三さんにけいこをして居た、ひとつもおぼへまい、めづらしい御出、申あなたもよふ御出と、さして聞へぬらしき顏色もなく、いつかどうらみをいふいきほひも見えずして、さらりとした風景、繩手の女郎ども、ゆかたをかたにかけ、湯あがりに二上りのけいこ、芝居もはて太鼓をうつとひとしく、四條のはしは蟻の熊野へ參ほど行あひ、かつはやの油くさきも、大かたにかた付て、もはや此座鋪に居る心もなく、もし橋が外へかしにゆかねばよひがと、ひとり心にあせり、上り口かうらんのあたりへうそ〳〵するに、中居どもはもし何をうは〳〵なさるる、あなたは御せいがつきませう、さしこみにたれぞよびにやりませうと、すゝむるくどくとも成佛する西方へ行たい色目、源は見てとり、もはやかえりたらよかろふといふに、中居どもはくち〴〵に、雲をつきぬく調子にて、何の事じやいなア、けふこつな、イヤ〳〵けふ親父の手まへから預つてきたむすこ、嵯峨にひま入ともいわれまじ、よふござります、せめて後までと留てもとまらぬ草ずりあひ、すりあふたをいがめて膳を出す、せつかく物すぎした料理もせゝりさがし、しばし御やすみと屏風を引て入日をかくし、源ははしらによりかゝり、中居二三人相手に酒をのみ、むかしのきつ岩扇忠一力がはなし、牧野清野が俤をはなし、花靜をり三ぶがたていりをかたり出す、屏風のうちは八百清にて、助にことづての言をのべ、いわのが文字へ嫁入、おとゝひにはかに山喜から北野へまいり、こゝがおまへの上のつゝじやと、おしえた芝居もおもしろひ、瀧のしたうかむせはいくよのうらみ、けいけしけし粒ほどもなく、なつかしさふなよそほひもなし、程なくおきてくる、源は駕をいゝつけ、キ雨子サマさぞつもる御もの語なされつらんと、中居はおくる、是はきつひさう〳〵、あなたは嘸おせいがつきません、駕籠の衆はやうたのみますと、

ことばをかけつゝわかれ、三條河原町からすぐに郭へとばす、大宮松原邊にてはや初更の時をつぐ、大門口はどこへと與左衛門が鳥のこへ、かんこくはとほるとも此關はやらじ候、引ふね中居が、さて〳〵おそひと駕籠につき添て行ちがふ、さすが御身ぬぐひとて、よく垢はさらにぬけぬ、たいこまつしやのさわぐうへを、風の吹ぬにおどり場の柳そよめき、ふみならす下駄のおと、かしかりのよねのゆきちがひ、大坂やの格子をたゝくはしごの下に、申太夫サイサイサイと叫ぶこへ、こと三絃尺八どらたいこ、誠に極樂の紋日かほどには有まじと、心もそゞろ臺所にかきこむ、花しやは待兼ました、たゆふ樣もけふははやふ御出なされ、にし口東口へたび〳〵御出、たゞ今となりへかしに御出なされしと、程なく橋は顏に待かね、山のほとゝぎす鳴程まちかねしそのふせい、おもて座敷は天神嘶の客うたひわめく、さすが松位客とておくの座敷になほす、はしは座につき、もしや御出がなければいやな事じやとおもひましたと、心をこめしことも極上々吉の場所、袿子が仕うちしろ告てはゆかぬげい、源スけふはいかいおせわ、かたじけなしといふうちに、禿が源へ口上言にくる、引ふねがはをりをたゝむ、源がよほど醉もまはり、今日はこゝのせうわるにさそはれ、あづまの色につき合、朝めしどきより罷出、ことの外せり立、やう〳〵たゞいまになりひら、三とせもこゝにとめてぞなれまつとするでは有まひか、たひていせついた事かいなときくに、橋はけふさめがほ、そんな事とは露しらず、やかたの御首尾をあんじ、もし又きう用が有かとくれすぎまで、花しやスとうわさ、ホンニ入らぬ心づかひをした、あんまりおそさに、臺所酒にしんきをはらす折から、松やへとのだちがみえてかしに行、家太夫の酒のむりみえたと聞て氣が落つき、醉が出てあつひと水をのむ、ひざの水はゆとなりしが、これは茶わん酒の御かげにて、五郎八で水をのむ、東とかわり毎もかわらぬ後くえぬ料理、十夜かうのごときものずきも、茶に漬てゑかうし、箸をねぶる時分に幸原がかしにくる、下からよぶ、何やら引ふね花しやが、もしや〳〵といふとひとしく、四拾四匁の利づけにてもらいにやる、さつ速御意にかけらるゝ、いかなさばけし客やらんとおもひしが、おもへば身揚にて有しよな、そのへんぼう

に酒をすけさす、おさへる時分も夜半の太鼓のころ、客せんにいたると見えてしだひにさびしく、郭中しづかになり、はるかに壬生の時ばやしのしやてんでもきこへて、臺所もゆめ見るこしらへ、門口に錠おろし、はやいびきももよふす比に、源にさそはれ、紙そくをこしらへ棚さがし、揚やも常々心得有て、よひほどにあてがひ、たまなり二ッ三ッたこの足、酒もたるにすこし殘、かんてらの邪魔にならぬほど、めしも二人まへあてがひ、よいさかなは料理場の生ぶねに入錠をおろし、ねこよりもきやくの用心、茶がまなどたくかひせうになき女衆が香物鹽のせい、誠に帶下病がやけだされし同前、かまもしやくしも屏風の外へおしやり、延紙に油をしたし酒をあたゝめ、また咄も一入油がのり、橋はしごき帶のはしをひねり、東のキ雨子スとやらはよしみなれば、なるほど御出なされたがよひが、こよひでも東からすぐときけば、どふやら心がひがみ、おかしいもの、サアサ心と申ものはあちきないが、すぎし夜心おかず御はなし申せしあとにて、ひとり床のうちにておもひますに、二度御めにかゝりしおまへには、そこひのふいふて下さりますゆへ、つらひこともはなす、もつともよしみのとのだちもあれども、けふの日がら、俄にたのむほどの心いきは見えず、おまへにはたのみよい、けふの事はきうな事ならぬとて、きこへぬことも思はず、きのふけふの御まへを便にするわたしが心は、われながらもがてんゆかず、ほれもせず、いまだ年月かさねたるよしみもなけれ、御いとしうもなけれども、何となし御たいせつにぞんじます、このほどはうき世もあちきのふなり、やさしういふて下さる人も有に、ちいさひからなじみし親方は、むごひものじやとおもひ、もの日はおゝし、もしやまたまちがふたらばどふせふぞ、すかん御客へたのむはいやなりとかたるに、心も忽にしほ〳〵として、石のからとから鬼の手も出して見せる氣にて、朝がほをにえゆへ入たるすがたになり、いまから紋日がちがふたらいふておこしたまへ、大事ないことじやと、ぐにや〳〵とほんに石花菌のゆうれいを、こんにやくの馬にのせたるさまに、イエイエいかに私が逢たいとて、御やかたの首尾が大事、ほんに女ほどぐちなものはないと、梅がえが、りの口上いふて、またしいる、一膳はくひてはらがふく

れ、ねいるともかもわず、西六條のかち〳〵、怨籠せり立、煙草に名殘おしく、まだいゝたい事が有、この中に文にて申べしと、鬢をなでわげをなをしてくれると、いましばらくあたゝかな床に居たけれども、うちの事おもひてかへるつらさはたれにかたらむ、

自程曰、此段東の風味うすくかきなして、西の風味をあつくかくゆふなれども、其人の氣邪氣故格別におもふ其風色、さしてかわりはなし、橋が心のほどをあかし語しやうにみえしが、大水をのむ下地、これ大病のはじめなり、

歌爺曰、江南の橘も江北のしぶがきも、其土地による、此段其人を見るが如し、文章のぐわひよく氣をそへたり、ちよい〳〵が品玉、よこ槌をゑのころにかゆるよりも、はしが其しな玉見所おゝし、

○下部には酒のますまじき段、下部は酒をすぐせばけんくわか、またりかうばなしをこわだかにやるか、旦那の恥のかきあきの段をのぶ、

うかぶ瀬は江南の名酒器、ゑんまわうでも一盃のめば娑婆の帳につく、般若水とのみかけしは、沙羅双樹のはな見、難波の伊曾羅といふ大臣は、氣逆水と之をもてはやせり、橋のわたりもしげく、女郎揚やへ付屆、持おもりしてよほどかんでうもあわぬやうなれども、いたはりふかきは母の親、むかしつくりし親父の手まへ云なをし、勘の一字にもいたらねども、うちの首尾あしく、北野まいりもならず、ものあしらいにてとなりの事はさてをき、よる夜半囲へ行も小奴がてうちんをともし、囲の戸口から旦那樣はやふ出なされとせがむ、これは扨おもふやふに用事もさせぬ、此やうな事とは露しらず、わが心がかわりしかと、橋がうらみてわたりもたへしかど、おもひわづらひはせぬかとあんじるに、橋は百ばいの心なるにや、千束の文はかよはせども、返り事さへなきあかぬ便をきひて、もし氣でもつまろかとあふかかちんにはあらず、六條寺内のかめやみちのく、菓子にそへし文に曰、

今ははや、おもひたへなんとばかり、けふやかえり事、あすは御げんにむかふかと、待し心にうちおどろかるゝば、やかたの御首尾ぞや、まかせぬことのしんきといふにおろかに候、我身ことも便ときくも、すぐにつかえにてふしら〳〵、心ひとつにあん

じ、もう〳〵御わづらひも出ばや、たがひに逢ことはかたしとも、すへはほんもうものと、心にこめてかわらぬたがひのむねにこめしうへは、我身ことは御あんじなく、かならず〳〵御やまひの出ぬことのみいのりられ、

あとはかくにおよばず、來てさへくれゝば、橋が病はなほるといふか、いしんてんしひやうにて町内の宿老の娘が相はて、ほんこく寺やまは八ツの葬禮、うちからも名代もたてがたく、むすこひとりはこわもの、ふだひの一助御供にて、母がかたく云は、一助はやふつれて歸れと有ば、かしこまり、西堀河もとほさぬくせものゆへ、道々思案をめぐらし、さう禮いんどうもすむ時分に、俄にむなさきをおさへ作病と出かけ、どふもあるかれぬと顔をしかむれば、一助はまこと〻思ひめいはく顔、寺へ御よりなされといふ、いやさいわいうら門前にちかづきが有と、おろせがかたへやう〳〵にはい入て、さゆにて黑丸子をのみうつむく、瓢德はヨク心得、三木サマ是は御難義きのどく、千場立安と言はり立を呼ませふかと露情もどきの口上をのべ、揚やへ人をやり手にしらす、一助は作病人のせなかをもむ、イヤもむほどいたむ、我はやすめと、亭主は一助をば、章魚の足で茶わんを二つばかりあけさせ、こなサマいかひくろうじや、おもひがけなく途中でナア旦那様の御病氣、おもつた時は御難儀、よい所であつたと新酒でいたみ付られ、さすが武剛の一助も、新酒に急所をあてられて、大事の手なればたんだよわりによわりて、申旦那様、いかふはらが痛できやひかわるか、うちではよひやふにいふほどに、とつくりとよふしてもどらんせと、舌もなへたる折から、怨のものに、揚屋のおとこやりてがつきそひ、ゆきだをれつれにゆくやふに、御氣そくがわるひとや、橋サマ殊の外御あんじと、やり手はそばへより、太夫サマもいきたひと仰なれども、とめましておいた、御ひえあそばしてはいかゝと、はや〳〵怨詛にめしませ、瓢德どのいかひ〳〵御せわとあいさつ、作病のしぶしぶがほのみぶりをして、心のうちはヲット心得のりうつる、るい〳〵わやまひもあげやをさしてかきこむ、橋はあんじ顔、二かいへはふとん針たて、くすりなべとてうし盃一所に持出て、きつう御顔がわるひと、引ふねがさする高金がもむ、花しやがひねる、もつたひ

なくも橋がうつ〳〵しいうちまたへ、兩足をさしこみてあたゝめる、やりてが手をなでる、さとのあんまとりが、いたふもなひはらをもむ、よほど飯椀こひしく、うつ〳〵すや〳〵と狸ね入、みな〳〵ことばそろへ、ちと御ね入じや、ひけ〳〵と勝手へ入に、御めがあいたらあがり物のこしらへと、側に引ふねとかぶろとが、たほれもの〻番にやとわれし心持で、絲とりなどするはせうし、かの一助はめしをしたゝかにくひ、一貫町の茶わんのうへに、吸ものわんのふたにてのむところへ、橋はそばへより、コレ一助殿いかい太義じやノウとせなかをなで、御かえりなされて首尾のよひやふに、こな様たのむより外はない、どれ盃せふとまた二三ばいのみかけ、くるしきいきの下より、サモあわれなる聲をして、おこる病はせうことがない、うちはわしがよひやうに云なすと、聞て家内がほめそやし、一助殿はさて〳〵のみこみのよい人じやとのせられて座をしめ、じたひ若旦那のが道理じや、おく様はなしかねは有、おや旦那はしわひけれども、すみ〳〵までぎんみはなひ、店のわろ達もよふ出あるくけれども、わしがせわする故うちへしれぬ、じたひこちのうちにふるひうばが有、これがやかましいおく様の御姥であつたげな、まかなひして居ます、これにわしがよひやうにいへば、慮外ながらすみます、もし道で死でも、おこるやまひはせうことがない、御前はやふこちきて夫婦にならしやませ、いつそおく様へ、わしがさふいふてみましよ、わしも十二の年から居てナ、旦那のところで疱さうもする、手代にしてやろふといふことじやあつたけれど、わしが母じや人がいはるゝには、イヱ〳〵御手代になり、わかひものがだいまいの銀を預り、わる氣がつくと在所の名おれ、やはり一助がよいとの賴み、わしは近江に代々田地も有、庄屋の處へ養子にゆく筈で有たけれども、娘がわしが氣にいらなんだ、となり在所の五郎兵衛といふわろの娘は、ホンニ京にもないよい娘デナ、水口の酒屋へよめ入して、子を持ごもりて死れた、ほんにこちのむらのかめしよの御藥師様、それはよふ願がきかしやる、京からも參がある、寺の坊様が京の御所様へねがふて堂をたてなほされ、奉加して地つき、それはおもしろい事でわしらも出ましたと、酒につれてたわいなくはなし、枕にころりと高いびき、作病

も御快氣、やきみそに茶づけ五六ばい、かき込し駕籠のはなし、瓢とくが御機げんうかゞひ、甚はいかいせわとて、紙花をやりて下男までにまき、盃もよほどまはり、橋はめになみだをもたせ、うちの不首尾ばなし、とかくわたしが事は御あんじなく、御前のわづらひの出ぬやうに、何年逢ひでもといゝたひものじやが、それではわしが心がおかしうまわると俯ぶきて、しごき帶のはしをひねり〳〵て、しんきな顔もち、さて〳〵ふびんやかわひやと、不首尾の事もうちわすれ、これからはよるはやめ、くれかぎりにいぬるくめん、用があらば狀でいふたがよし、紋日でもきうなときは、ことわりいらぬ、出たがよしと、味噌のあめでとろゝ汁こねたやうになり、いふほどの事をうけすといふことなし、ホンノそれが御眞實、はじめて御げんなりしより、わたしがわけしりとみこんだにちがいない、うちでもほうばいの女郎が、わたしはよいとのだちが有と、つね〳〵うらやましがるわいなと、ことばの花もさかりに、そんなら折に甚のうちこゝへ御出、これからは上の町に丹波やといふ茶みせがある、そこへ來て下されませ、かならず〳〵こゝへはさたなし、見付られまいぞと忝し、これぞおとにきくたかしのはまで間夫になると心に悅、なるほど、よひのうちこゝへくればひまが入、それがてふどよかろと、はしがはかりごとの圖に入ぬ、（評おくにあり）もはや歸ろふ何時じや、はやよなかにおよべども、一助は蝶になるいづかたへ飛ゆきしか目もさめず、ゆすりおこせどねごとばかり、おうばどのへ昨日のもちを、茶がゆへいれたらよからふと外分あしく、三木が一助、こよぶ聲に少しめもさめ、申旦那樣、うちで何といふのじやエ、本國寺の上人樣がしやくがおこり、それで四條の權右衛門樣の所でひまが入たといふのか、いかふねむたい、ひらに明朝御かえりなされませ、じたひ御まへがせうきなで、月に十度や十五度あそばひでは女房に持たか、申おや旦那樣へ申じや、扨もいかふのどかわく、かごの衆太義じや、此脇ざしもそこへ付てもらひたひ、上下はわがし持と首にわひかけ、いとびんの西行法師を見るやうに、皆樣いかい御せわ、ちかひうちに逢ませふ、こちの方へござつたらよらしやませ、さつきにもいふたやうに、おいせ樣へまいつてなら、草津のもちやから二町ほどに、ひだりへ

ゆくほそ道が有、それを一里半ほど行とこりき村、御地頭は膳所の殿樣、うぶすな八幡の宮の前で、六左衛門といふてとわしやりませ、しれます、よひのさけがまださめず、三木にせり立れ、ぶく〳〵ひよろ〳〵、てうちんを引ずりうちへかえれば、もはや七ッ過、親旦那が大白星のごとき眼をむき、一助めにくひやつ、どこにいままで何してけつかつた、請人をよびよせ預ると、子息より殊外不首尾、やう〳〵姥がわびごとに、こそ〳〵と部やへはいり、半季五十めのきう銀も過錢にとられさふないきほひ、まだくらひうちからせど口にてきりわらこしらへ、めしたきをとらえてさゝやき、それは〳〵けいせんが、かわいがつた色ゆへじや、せひにおよばぬとはやさし、

あるひと問ていわく、文段のうちはしが圖に入ぬとはいかに、（頭注）空帝道人曰、がく如先客は金自由なれども首尾あしければしかなの客も同前、これを公界の工夫の間夫と名づく、

自程曰、此段は、不夜城年ふけし女郎の極意の方便なり、わかき子息は、此はかりごとにはおつること必せり、甚のうちばかりおり〳〵揚屋にてあそび、夜かならずよひのうち茶みせとは、此をわかき客は間夫と心得たるこそおかし、すがたをやつし、かの茶見せへゆくに、かぶろが待合て、上の町あたりの中やどへつれゆくばゞにあづけ、太夫さんへしらせませふ、おくにしやほどに待て、エ、と程なく太夫がさし足、よふ來て下されしと落間をかけて五六疊敷、煙草入のふたを枕におもしろくちぎり、露計の情をやどのばゞにはづみ、またあさてのばんとやくそくして、すもどりの夜も有、しかれども間夫とおもふ心からおもしろく、此せつくまへに金が入といふに少も引きなし、五六兩出してやる、揚やがふしんたてる、此廿一日は御やくそくなされ、尤じややり手へのはな藥、かぶろが芝居、引ふねが小遣、いやともあふともいわれぬ入用ども、これを女郎はこまげた客と名をつけておく、勝手でもはく、表へもはくといふ義なり、太夫の老功ならざれば此工面なりがたし、わかき女郎はよしくめんはなりとも、もしややりてなどしれば、やかましう事むづかし、それゆへに、わかき女衆のなぐさみ半分にするは、おふくは揚やのむすこなり、老功の太夫の此しよさは、やりてをはじめ人もかまはず、

此ときには内せうにて、女郎と揚やとあいたい有かもしらず、眞の間夫といふは、中比雲鞍といふ誹人が、

いとしいとおもふ男は金がない

とつぶやきし、尤成かな、揚やも近比はおひまはしのをとこをどうすじへ出し、風來客をおだてさすこと有、これを客をつるといふこと、ほのかにきゝ侍る、

〔頭注〕空帝道人曰、五十年來郭旎敗、故揚崖窮然引不ノ輒、客亦不ノ宜哉、

またいわく、およそ老功の太夫には、禿もちいさく引ふねもわかし、年わかき太夫に、かぶろも十四五ひきふねも三十に過たるをつかふ、それゆへわかき太夫にあふきやくは、かならず新艘を出す重荷有、今代は造用ぐるめ十五はいより二十ばい計にて、これにてわたしきりにするとや、老功の太夫は、そのせわはなし、其かわりにかの内せうのせわあり、年もくるはを出る時分は、杓をふるとてなじみの客へがうりよくたのみ、郭のしやくせんを割歩して出ることなり、

〔頭注〕又曰、老功松位、年來新總五三輩出之、其功已竟也、故禿幼引舟亦弱冠也、與ノ客戰ニ疑情ニ不ノ能ノ爲ノ之、引舟節之故傳ノ之、以ニ年功ニ禿年長、令ニ其松位出ニ新造ニ立功也、凡出艘之費令營ノ之、郭之荒敗徵也、出選千歲波平

又いわく、此段は一助が酒はむめうには非ず、道祖神のすゝむるところ也、しかしまだへどをつかず、なかにすつぱぬきせぬこそ重寶なれ、さぞかし此ざい所、はなしはきゝづらきことなるべし、

〔頭注〕甄得曰、一助が酒は維抒戸隱山之奚趣也、しかれども風流にいへるは、道祖神の賜なり

◎手のわろき人、先はゝからず文かきちらす段、よめかねても、用事があればかゝねばならず、たとひはしごにやいとすべき繪でも書に、それも文とみれば文なり、たとひ一兩度代筆をたのむも、あとからはげることひつせり、

衞夫人は王右蘭にいろはをおしえ、らゝかしこは、誰そめし水ぐきとやらん、策くきとやらん、いかな鍾馗づくりの男でも、こひの文はおもひらゝとはかかねばかなわぬ、筆もよめるほどにかくは重寶也、まことにまかせぬは首尾、まゝならぬは御げんとかひて、文もたびゝなれども、一助已來はいかう不首尾、いかなゝ返事もならず、かのよひのうち茶やの趣向も、當ぶんなりがたく、何となく源もうちの親父がすみ付あしく、繩とりがうらめしきたとへ、壹年ばかりもさとのたよりもきかぬやうにおもひしが、やうゝ一月ばかりふしぎに文の到來、橋が手にあらず、いはらかきみる文づゝ、すぎし比よりきぶんあしく引ており、心むづかしく代筆とよみて、むねうちさわぎ、さこそとあんじ、今ははや宿にもいられず、世の中の月花をむなしく露となしては、此世にすみてもおもしろからずと、内をぬけ出、わざくれ時分より出かけて見れば、珍らしい娑婆で見た三木サマかと、とりゝもてはやす、太夫サマもぶらゝ御煩なされてござと、人をやる引ふねかくる、なんと橋さまをなぐさみがてら、御出なされませぬかと相談きわめ、一町にたらぬ所をかごにのり、きむづかしきかほつき、夕ぎりの出ぞこなひかとおもわれ、いつそ不首尾のはなしもなく、三木サマもまじめきのどく、花しやは、太夫サマはもしやつわりではないかへ、それならば三木サマのあとゝりと、かづけ物する口上、うれしいやうできみわるく、又あれかやうにおもふては、懷胎になるまいものでもなし、いつそそれなれば母親へいふて、親父にうけ出してくれまいものでもなしと、いろゝもくさん、橋は茶漬をせゝりさがし、冷物の梨や桃ばかりかぶり、いかさまつわりのきみかや、やりては親かたからのつかひに來り、御情もつきぬがとふぞと見廻、ほうばいがみまいやら、橋はせんどの文はよめにくからふ、あふよがかいてくれたのじや、橋が文じや、わか紫が狀じやとおもふ心てい、はしがきもからやうめいたやうでおもしろく、もと樣申いるはわが朝の風流、こしもとはすはましたきまでも先にちりがきは大かたする物にて、それなればこそ其日すぎのひようとりも、娘の子を持てば手習やへ遣し、おれが目めくらで不自由な娘は目をあける、目をほるのとその御かげて、めしたき奉公してぢやらくらのゆきさつも、手のうらはなべずみかきめへしみこみ、節用集の世界の圖を見るやうな手に、筆を持心のたけをかいてやる、二藏はこれを小町赤染の文よりもおもしろく覺、かとことまじりもいそがわし、ひうちにかくゆへさてゝよめにくひと、おもひは色ゆへなればさしてあく筆とも見へず、きめうきたひの文言なれども、それとも銀をしてやることは見事よめるやうにかく、中々にも大がい婢(こしもと)いげめし炊迄は、その文古代にておかしく、少しうへなる

おものしなどは、やす茶やの文などを見おぼへ、御げんなしたくなど、ほのめかし、金の入ことは母びやうきゆへ、人参のませたくとよそへ事をかきちらす、かわいゝといふこせうぶくろかぶりては何にも見へず、かぢやの娘が釘のおれがせわしてやる氣になり、やぶ入出替に、よる〳〵しりから付てあるく、主人の門まで送りてやる、また年ばい三十ぢかく、もつたいある奉公人の、かしや札やう〳〵よめれども、わがかたへきた書出しはよめず、心の覺のとをりよめたかほして、おとこのかたからきた文は、やどの娘によませ、返事は主人のかたへ常々はり仕事にくる尼にかひてもらひ、扨男に逢ふた時に、そなたちと手ならひしや、文がよめにくひといわれて、つぼ〳〵口にて、わたしも親たちが三年程、政野様へやられました、手ほんも六七百本程上ましたれど、ねがきらひ、ぬひ事はすきでしましたと、しからば縫かと思へば手づゝの子にて、口がよふきゝぬのこもひまのなひはゝ親にいゝ付、ちいさい時からせなかに子をおひて、一文せにをぬすみ、切砂糖豆藏のかいぐらい、人はしらじな不破の關やに月のもるほど、うすがきぬを面かしよりすそつぎ迄黒にひきかへし、おくはさらしのちくらもの、盆も正月も此小袖一つで仕舞て、わしが小袖はみなきに入らぬ、これがいつちきよひと、そよ〳〵風にもとびさふなつゝら、鼠くひの紙のおふひ、輪違か八重梅のもん所、小袖だんすとりよせたいが部屋せまひ、親の内は火打箱程な米がらともなひ住居せんせううへをいくまんせう、それもおとこはしらず、この油つかふて見やとひげが梅花、この比服部から直がいの煙草じや、今兩替やからかうたぬく〳〵の小遣せに、あげくには腹に一滴がやどりやかましく、覺が有のなひのと父なし子をうみ、首は久助、手足は太郎兵衛、なくころは仁ひやうへに似たりけり、鵜のごとき小悴をうみおく丹波へかゝり、六貫文つけふつうにやり、あとはふたせの姥奉公、わしもでつち女つかふ兩身代をもつたけれども、ぬしが市ごとにまけ、其うへ角ざいくとさけとで裸にていとまの狀とつて出たと、まだぜいたくをやめず、かぶろ立から昼夜太夫につかわれ、何をひとつかくまもなく、やう〳〵すこしのひまになれば、やりてにしかられ、まくらはづしてね入れば、引ふね太夫にしから

れ、そのひまに火ばしに灰に手習、その家々の風をしり覺、うたのすみつきをならひ、公がひのうちいろ、東妻などにおめずおくせずかきちらし、此さとのくる客は、これを細川三齋が長明の古今のやうにおもひ、にしき純子の風袋ひやうしを拵、助これをみやさい、ば〳〵が手は見事、花むらさきはたつしやなど、こよはいやみがあるど、橘は卷軸におもわく、ひらき文をかきて三木サマ喬木と留て、家の帳面はやくとも此一卷は持てのく心なり、心ある人の目からわ、まわり書はびんぼう神一味連判帳と見ゆるべし、さとにても上林は女郎の手ぶりはよく、大一文字やこれに次、大坂やまたこれにつゞく、小一文じやは甚手ぶりあしく、近比小太夫といふ名花有、筆ふとくおり誠に似合ぬやうにおもひ、その人がらもそこねるやうにおもはる、揚やにて楓川などゝいふゑせもの、これをせうしがり、小太夫も自身心にかゝらずおもひ、楓川におり〳〵まわり書の代筆をたのむ事おゝし、しかし小太夫が代筆をさすはおもしろからず、兼好是をさとり、手わろしとて代筆をたのむはいやなりとそしりぬ、さすがかくに上るとやらん、毎日々々けつかうなる紙をつぶしにじるきとくに、おのづから狀つうもよく、さて内せうの手狀などのみぐるしさ、弘法大師のねぼれがき、ねんもあきないやへでも、みな相應々々にかたづいて帳面でもつける段は、さぞかしかよふかみさま申いるはこみをにこすとおもへども、客の目がちらつきうつくしうみゆる事ならんかし、ことに若き客は我手も鍛冶やりうなれば、人の手のよしあし中々以てみへず、こんど夢もさめなば、もとのしらがみならばと、しら地を戀してあたまをかくもおかし、

自程曰、此段は手のよしあしにはあらず、かくにもだん〳〵あり、あしき手にもかたことばかりにじるもおかし、よんべはのきんによはなゞ、うつくしいかほに何とやらん似合ぬものぞかし、

〔頭注〕里雀曰、凡廻文多遠國之客、美之揚舍里之多惡客舍二代筆一

○世にかたりつたふる、まことにあいなきにや、おゝくはみなそらごと、此段は文言にうそのよそほひはみえねども、たねをまきて其木をしげくす段、味べし、

〔頭注〕空帝曰、此段は卷二卷め有べし、古書内へ次第入ちがひと見ゆれ、後は考べし、

文章は實學に妨有とは、誰人がたわことぞや、仲尼もぶんがくには子ゆう子夏とほめたり、秦漢ののち二千餘年を過て、于鱗元美出て文辭をおさむ、かよひなれしほど戀しく、それゆへいとゞ文のおとづれあらんものと、かの日ごとにゆくやどへ行て、すみけしつぼを柿油張にせし火桶、かたずみ入よくいけたるをせゝりさがし、煙草をくすべ、とせいに暇なき夫婦は、仕事しながら相手になるを、郭ばなしげに結の神の引合か、おひまはしの男、つゝしんでひとかゝげさし上る、心のうちに三度ほどいたゞき、うわ書は源様と、たとひ親父の名當にも、橋より文のこぬことは有まじと、ふゝをひらけばすみ黑にて、三木様喬木と、其狀のかさは、御門跡様の御臺所のひやうし木見る程に、逢ときはかたゐつくすとおもへども、わかれになればのこることの葉などとかきつたへ、しばしは心がけ下されかし、源様御さそひなく、御ひとり御こしと在こそ物よ、此狀源ス見えたらば屆て下されと賴はら、もはや未の下刻やどへかえり、錠のきびしき引出しへ入、小遣銀は出しておくとも、橋がふみはいかなこと、あらひ風にもあてず、過し比までうら打して大事にかけしゃ雨子が狀は、内のこしもとにやり、手ぶりいやしく面白からずと、明暮はしが俤のみ戀しくおもひくらすは、此さとの寄さく、たとひいかなる道學先生にても此郭に入ときは、鄒魯の道はわすれいではならぬ事、いまははや源もいらばこそ、くれ過からすそつまみからげて、とぶがごとくしゆく坊へゆく、よふこそ御出あそばしと、ねぶりつくやうにもてはやし、こよひよみせ番にて、やがてしまわれますといふに、間もなく石原を蛤貝かきまわすおとたかく、橋はにかいへあがるとすきを見合、耳にさゝやき、こよひはこゝもとにとめうとも御歸りといふ所へ、年比五十計の女性一人、まへだれに目をきよろつかせ座敷へすわるを、花舍はとりあへず、これは太夫様の御姥おみやと申ますと引合せては、きゝおよびしやりてなりと盃をさし、かねてきゝし一かくはづむ、おしいたゞき、いるりとおあそびあそばやと下へおりると、花舍は申太夫様、とめませうといふに、橋はひとり、いやこよひははやうかえるといな、ちよとこちへと一間のかげ、しゆく坊のもめんぶとん高直なるものを、たゞで進上仕る、さて〳〵有難けれども、根がかりものゆへ身にならずして、禿がそばへ來て、うちがもはやしまるとてむかひがきたといふに、いにともながる橋はひいたり、酒はつめたし、あとにひとりもいられず、らうそくのしんながれ、誰がきるものもなければものすごく、よそのさはぎわらひの聲、ことにうらやましくおもひながら、花舍にわかれ駕籠にのりてかへりし、あんずるに何の用もないによびにくすは、逢たいかたゞし咄ことがあるかもしらねども、せわしうて間がなひと、かくゆる〳〵ゆかねば橋が爲にもならぬと、ねて見ても、くるわからはやふもどつたときは、ぬるひ湯にてぎよふ水した心地してきみあしく、せめて橋がたばこ成とも、うつりと吸付々々ね入ば、子供が乳豆くわへたやうに、おかしくもまたいぢらし、

小子進　此段は、我よりも年まきにて、此遊事のことを合てんせざる人のふしんを、こと〴〵く答しゆへ、第號を小子進とおくものなり、よく意味ずべし、

小子進でいわく、此一段はみなそらごとの段と在ども、そらごとみべず、何を以篇名をおくや、

答曰、此段は、信玄はこれをすてかぎりといひ、獵師は是を醉がいと言、秦漢にはこれを柱といふ、此段をさとらば七百貫めの銀もへらず、財布に瓦を入ず、しぶひ親父がかんどうはせぬことなり、

答曰、かざりとは戰場に伏勢をする事也、一兩度逢し客に、この中にしばし御出とよびよせ、あげやすゝめふとも御歸なされとすゝめ、一間におゐてちぎりをよせたるが、これてきにはにぐるやうに見せて、さきに軍せいをふせてうつのことわりもおなじ、かならずかくのごとくしてその義理をもたせ、ながく此客をとらゆるしかたなり、すべて凡夫のあさましさは、色にまよふはそのつね也、心得べし、

小子進で曰、しからば橋はかつて此客をしたふ事はなきかや、

答曰、橋が如きこうしやなる女郎の、何ゆへにかくの如き靑郎になづむべきや、たとひは在中將源氏にもせよ、ふか〳〵としたふは女郎不明なり、まして靑郎の徒にちぎりをふかくする道理なし、

小子進曰、先生ねがはくはおしえてよ、我くらふして不レ知、

答曰、おれわれ汝につげん、およそ人には得手といふもの在、はかくといふ角力は、鐵砲ざしといふことを答て谷風に勝ぬ、醫者にも傷寒をよくなをし、中風をよくりやうじする在、日雇にも井戸をよくほる、又は庭をよくつくるその得てあり、女郎にも面々に得て在て、西てかすときに引かけくふうあり、しほらしく色どる在、むせうにもつたいらしくする在、此橋はわかきの心得をよくしりぬ、さだめて東風にてその樣いろどるなるべし、橋はかしにくるより、そばへよりて、かの一兩にて五六匁の客、薫にて客のはなのけんをとり、扨座をたちしなにあとをしりめにかけて見て、心の殘していにみす、おゝくわかひ客は年のふけし女郎をすくものなり、橋此場所に得て在て、客はそのわなにかゝる、今かりし太夫こそ心をのこしかえると氣がつく、橋がなすこと客のこゝろにかなわずといふことなし、ことにわかき客は、我とわが男ぶりになづむよりふかくはまるの失あり、

答曰、方便とは大ごとなり、得手は女郎の心の自然とそなわりしものにて、わが妹女郎におしへたいとて、おしへらるゝものにあらず、方便はすべて此さとにそだつと覺ゆることなり、天竺にて釋迦無尼和尚初て說法在て、三界唯一心心外無別法心佛と說たまひしかば、わるざれなる五百羅漢、甚以無尼和尚をさみし、わが心佛ならば別に法をきく事なしと無常遍をそしる、夫故和尚これはならぬと分別しかえ方便をとく、方便はてだて也、その道をすゝめてすゝまぬものをまねく事なり、其かみ女郎の方便は、今とはことかわり、むかしは客おゝく金をつかいて、金をついやすことをいとはずして、女郎の心いきをたゞさず、それゆへ女郎わが心をそしらるゝことを憤りて、かみ爪おしげもなく切てわが心をみす、これらにてもしるべし、いまの客は金をつかふことせちがしこく、先第一直段の高直にめをつけ、太夫をかひながら、やすふつけるしあん計、それゆへくるはのはらひも、むかしは毎月ばらいなりしが、今は五節句になる、女郎もいまの風はかくべつかわり、客にだまされぬことを專一にす、今の女郎の方便といふは、先客に初くわひより內證をしつぽりとつきあひ、きやくをずいぶんわけしりぎりこがしにして紋日をくゝりつけ、狀なども古代は、太夫は三度めはやう〳〵引ふねに狀を

かゝせ客へ出す、今は二會めは大方が太夫自筆にて出す、いかふよひきやくと見れば、初會よりもおくる、古代は三公の御出にても、初會には揚やの上り口迄おくる、いまも初會よりおくるとはいわれず、なぐさみに行とて出口迄おくる、大紋日なればおよそ三ケ月もかよひしきやくは、きせうをおくりやる、それも我血もしぼることはあらず、端女郎などに小遣錢につまり、ゆびをつき血を出して四五十銅にてうること也、右のきせうをおとりにして紋日をたのむは、女郎の當世の方便也、ことに田舍客へは猶さら、四五十日なじむ內に、ゆびをきりかみをきり、其かわりにおきみやげに正月か七月かの大紋日をしまひてつかわすことおゝし、方便の指の切やう口傳、

成程やがて年もあき時分、しやくせんをしまひ、郭をも出しくれさふな客へは、ゆびの少計短なるをいとわず切事也、

小子進曰、女郎をうけ出し我なぐさみとするには、昔の野風吉野金太夫の類にまさるはなし、香もよくき、茶道つたなからず、手もよくうごきて、うたもはづかしからずよみぬ、そのかわり藪所へ出して一向に役にたゝぬ風、金銀の事かつて以是をしらず、いまの女郎は、香ははなあたりへよせても、甘いか酸かめつぽうかい、茶道は宗旦と甄旦のあいのもの、和歌文字はいくつ在やら知ず、やう〳〵すみ次覺て廻書をくろめ、一に逢事はよしかたくとも、二にひとよのふしのさゝ枕、一に萩の葉なくば、かやうなうたより外はしらず、此方から外の古歌を好と、そのうたのすみ次はまぎれて、たゞ明くれむなざん用、此月はいくつうれたると手帳をこしらへ、親かたからほうびをとるしあん、五節句前には、先やりてが方の仕送り帳をぎんみして、くろまめにてそろばんおく事也、女房にもつた時は、なる程若むらさきでもあか紫でも、すぐにまへだれがけにて身代もつのはよろしく、今の女郎はむかしの女郎よりは甚以誠あり、とかく一日にてもはやくさとを出るしあんし、それゆへよほど銀をつかひ、たいがい心いき客には、女郎もそこからまことをたてるも我身がかわゆき、凡一ケ年の內二百十日が紋日にあらず、おやかた年忌まで紋日なり、さびしければ身あがりにしやくせんつもり、しきせも七ッやへ入る、それゆへきなる物をつかひて、わけら

しき客には成程誠あり、むかしは大名も彼あみがさも、おとことおもふとは格別の沙汰也、

小子進曰、間夫とはいかに、今もあるや、

答曰、むかしの女郎は、われゆへ身をうち、冬のひひとへ物にてふるふ男を、めをしのび逢ては、親かたにせつかんせらるゝともいとはず、又はわれをふかくおもふ男の、揚やへ行ちからなく、夜ごとに格子迄くる男を、嬉しいとおもひ心中たてる、これ間夫也、吾妻かなん興平、金太夫に友八といふるい也、今の間夫は、小間物や絹布やの手代、煙草やのむすこ、六條邊のくわしや、又は揚やの亭主か、我身のために少しにてもなるを間夫となす、これは眞實にはあらず、絹布や手代は切はしをはづゝ、内せうにてうるにひとし、

小子進曰、しからば此段はいかに、

答曰、橋ともいはるゝ松位が、たとひ眞實からなづみし客にもせよ、初會から打とけ咄べきや、逢たい事もとよびしは、市町の熊膽丸反魂丹の試一粒ふるまふ道理、すみやにても藤又にても、揚やにてもかくのおそれゆへ、わかき全盛の太夫とあまりおとらず、紋日をうるも此しかけにて、義理をくゝる事也、およそ郭は東しとちがひ、一寸と御げんはなれども、年わかき太夫てんじんはそのげいうつらず、此類をいくつもこしらへ紋日をうる足代也、うけ出客があらば、赤鬼の出る在所へもゆく事必せり、そとしれて知りやすし、うそともじつともおもわず、程よくあそびたのしむこそわけしり也、女郎のしら内證もといふことあり、下部には酒のますまじき段の俤に在り、ことばおおきはごもくが出るゆへ筆をとめず、

小子進曰、太夫とは何を以名づくるや、むかし舞をかなでしゆへ太夫といふといひつたふ、しかりや、請これをきかん、

答曰、昔より多說あり、今考るに太夫天神は中華にての雅名異名也、太夫古說昔平氏の盛とき、妓王妓女佛の罪舞をかなでし故、其流とて太夫の號在といふ、考に太夫は太優也、太は甚の義也、優は美稱とてきれいにやさしき形也、天神は古說考ず、俚說に言、其あたひ二十五匁故とはとるにたらず、太夫は松ゆへ、松に對して梅といふ義を以天神と、其說ちかし、考に天神は字の誤也、轉進也、其女郎繁昌にしたがふて太夫の位に轉じすゝむ也、端女郎は考に伴姒なり、端はくち

の茶やにて遊ぶものなれ共、客の座によりて太夫と一座する故、伴はとものふ、姒は美女の通稱也、

鹿戀は其名あり、其物凶、局女郎の長也、其縷局を園とするなり、太皷女郎は則端女郎也、凡出口の茶やは晝より夜四つ時の太皷まで也、其時をすぐれば揚やにてあそぶ、夫故太皷女郎といふ、太夫を迎る客は、これを招き三絃をひかすゆへ、いまに達頭を太皷といふ、凡其客の伽をするものを太皷末者といふ、揚舍は楊家のあやまり、楊と揚と字よく似たり、楊は貴妃がさとなり、むかしは女郎みな揚やに出て居ゆへ、其美なるをほめて楊家々々といふ、今揚の字とあやまりとのふ、

引舟は對二新艘一云なり、

新艘は深窓なり、楊家の深窓にやしなわれ、初て出るゆへなり、禿は召總に歌舞侶と通ず、考に迦傅僂なり、西方に對し二十五のぼさつに對するか、迦舞侶は天竺にてぼさつにょ來の侍者なり、なを後の考をまつなり、

自程曰、此だんよく符說するなり、問にくわし、しいて贅せず、

○そのものにつきて、ものをついやすだん、あそびもおかしきと心にりきみを出す事おかし、

富貴にして故郷に歸ざるは、にしきをきて夜ゆくとは、いかなるわけしらずぞや、たとひばかりぎきてなりとも柳色へゆくは、四つ夜半でも、ゑもんうつくしくかざりて行べし、今はかよひなれし戀のはし、六月すみよしのまつりもかぶろがねりものに出も、あれが誰が禿、これは某が禿とよく見しり、盆もやくそくうけとり、七夕も梶のはのいわひにゆく、盆のかたびらは入らず、橋は四季ともに打かけ姿のことなれば、黑縮子に素縫、うらはひちりめんを付、物すき二三十兩の入用少もおしいとも覺ず、七月柳の下のおどりも、穴のあくほどヨイサアと大またにおどるを見ぬき、秋の最中も里の月見と斗口にいゝて、橋とふたりねてあかす、來年の月見はどふぞ三木樣のところで、御ふたり御らんあそばすやうにしたひといへば、橋はニットゑみ、そのやうなことならア、しんきと、嬉といわぬ計おそろしくもまたおもはゆげ、神無月ふりみふらずみ、さだめなき淋しきさとげしきに、寺寺の十夜講のかねのおと無常をつぐ、アラゑんぶ戀

しや、あきひまなき身のくるしみは、うき川たけのながれのみ、おひくる紋日はあてもなく、人こそしらぬ乾くまもなき、袖のなみだながるゝ月の影、おしき年の名殘もはや程なく、霜月の御火たき時分とて、中堂寺の涎くりどもが、紙袋以てみかん萬頭飴やおこしに戀する比、松明殿の火かげも、むねにこげつき、アラよひ客ほしやノウ正月をたのまんものとおもへども、さとのけしき物すごく、洞すじの茶見せのむしろに霜をきそへ、かごの寄場のあんどうかげ、寒さまさりて心うき、女郎の夜見せに暮のむなざん用もあいがたし、やかたのすゝはらい事はじめもちかづけば、おやかたは仕きせの物ずきせよとて、やり手にとわす、いづくへいづるあてもなく、俄に梅職に下第せふとも、おやかたがてんはせまじ、よし揚手をさいかくして身あがりはすべきなれど、庭せんにこまり入、いかなるすぐ世のつたなきや、そのかみ柳色のさかんなる時は、春二月三月比に遠國の客が來て、此さとにちぎりをおしみ、おきみやげとて、來年の正月などをやくそくし、または新ぞうを出しかえりぬ、當時はいなかもわけしりになつたか、中々がてんせず、それゆへにいろ〳〵心をくだけども、何分相手仕ごとなればせんかたなく、七月も何事なく賴しうへ、また正月もいかゞながら、せひなくかのたしなみの血をしぼり、あしきやまふをうけんと、おそろしきそらごと、土佐坊がいとこぐらひ、いつそ今にては御前よりほかの殿達に、あふことがいやになつたとさし出せば、まづ〳〵難有、ちくせうのあさましや、もはや源にかくす心になり、景清が觀音の像を首にかけしやうに、俄に赤地の錦の袋をこしらへ、紅の紐たうとく、何の無益なることに金をついやし、晝夜はだをはなさず、五七日が間は、よる〳〵これをどく誦するこそ難有けれ、程なく正月の事をたのむ、口上はいつも正月は廣しまの客と加賀の殿達と、たがひに出してもらへども、かふ御前に逢てから、夕かたあそびに出ても、こゝへばかり來て、外々の揚やへはゆかず、かげでは橋はふかひきやくが出來て、こゝらへは見へぬといふげな、たま〳〵ゆけばいなかほつきする、正月の事毎のとほりよひやふにいふてやつて下されとたのむ、いや御ざうさな事かけるもきのどくなれども、正月はやかたにもいにくひと、引にひかれぬ所へ、時分はよしと亭主花舍まかり出、旦那樣へ御願有、此正月は何とぞ太夫樣を私かたへ出しましたひ、尤かし盆もなされて進せられしに、また御願もきのどくながら、わたくしかた外に正月御やくそくの御客もなし、外分かた〳〵と、花舍もろともみ手を、やりてもはしり來り、いまさら外へ御賴もいやと仰、ほうばい女郎サマがた、親かた、此町内にも正月は太夫サマはこゝへ御出とおもふている、殊に太夫樣も外へは身にして御いやそふな、アノやふな御客にすききらひの出來れば親かたのめいわくと、きやうとひことをいゝ出ス、しからばいかやうともせいにざつと物入、そのうへに橋がたちしあとに、やり手はそばへより、盆にしんぜられた小袖を、御物ずきがよひとて、みな〳〵ほめもの、また此正月にもとは御せわな事を御まへにさしますはいやとて、橋サマの内せうにて出來ますが、おもては唐どんす、うらは緋ぬめにかくし、紋に御まへの御紋がつきますといふに、これもきいてはいられず、それも少しいはねばならず、我紋を付てくれるそのうれしさ、金の入ことはかまいなし、揚やのもちつきからだん〳〵と續て、庭せん揚代やりて引ふね禿門番までの祝儀、まことにはりを藏でもやしきでもうるに程ちかく、元日は旦那寺へ禮に行て、それからすぐに上下は道にあづけ、二日は大谷參がよひ首尾、三日にはうたい初、四海波しづかなるより、二階の衣かうに衣服をかざり、歌かまた横づちまでかざりしをみて、高直なる人形、寶びき、手まりを禿にかふては、やり手が京へ正月に遣る糸入じまのおもてまでも、こと〳〵く調るはいかなる柳色の妙術ぞや、たゞまゝならぬわうちの首尾のみなり、

自程曰、此ものをついやすとは、あそびの事はみなわかきときは遊ぶならひ、上下の別なく、二十の錢を北野の松の陰にかぞへ、六十四文の錢を床を出て扇の地紙なりにおき、又天秤でかけてやるも身ぶん相應なれば、さのみぎよふさんにもなし、おひぼれが妾宅めしたきにはらますもしかり、そのついへとは、やくにもたゝぬものに、錦の袋をこしらへ、わづかなれども大なるあまみ有、わがなじみの女郎の紋をきせるに付、または煙草入に付るは、おかしくもまたせうしなり、女郎の身にならばさぞ

とおもひやる、或沙門云、冶郎をもてあそぶもの有、かならず顔みせの衣服をこしらへつかわすことあり、しやく門においてしいて笑ことなし、答曰、かほみせの衣ふくは、女郎に盆正月の仕きせとおなじ、沙門のあそびに、ひげのあと蒼々としたる冶郎に、四條の夜みせにて、人形などを調てやるは甚以馬鹿なり、冶郎素人たがひに客にかわせ、よく日またそのみせへかへし、代銀をわけどりにするとも、ほのかに是をきゝぬ、

新つれ〴草終

茶人つれ〴草

此記は、はじめ如心齋の門人何某の隱士の述られしとかや聞へし、むかしの兼好法師のつれ〴草のふみになぞらへて、茶人の茶の風流の雅俗を、いとおかしき筆のすさみにかゝれしゆへ、本のまゝにちりばめしなり、

省吾庵主人

茶人徒然草

○つれ〴なるまゝに、日ぐらし茶の湯にむかひて、よしなし道具を、そこはかとなくかきあつむれば、あやしうこそ物ぐるをしけれ、いでや茶の湯にかゝりては、ねがはしかるべき物こそおほかんめれ、古せとの御位はいともかしこし、破風の茶入のそこ迄も、國やきの土ならぬぞやんごとなき、一代目の樂のありさま、いふもさらなり、二代目の內の取かた、高だひきはゝゆゝしと見ゆ、のんこ其子までは、はふれにたれど、猶はたらきたるだけいやし、夫よりしもつかたは、程にふれつゝ時にあひ、持主はいみじと思ふらめ、どいとくちをし、宗味ほどそんなる物はあらじ、人にはわき釜のやうに思はるゝよと、或人の言けんもさることぞかし、常夢ひじりの言けんやう、名聞ばかりにて、眞のおしがたにたがふたるなり、あかりの人は中々あらまほしきかたにもありなん、樂はかたち土ぐすりのすぐれたらんこそあらまほしけれ、目出たしと見る樂の、本性しれぬこそ口惜かるべけれ、品かたちこそつくり侍らん、土性などうつしてもうるべきや、よき人に立まじりて釜かけ、似せものにて見をとさるゝこそ本意なきことなれ、ありたきものは眞の道具、眞蹟、又由緒ある道具こそいみじかるべけれ、手などつたなからず、はなし面白く、下卑ならぬこそ茶人はよけれ、

○いにしへ宗旦のわびをもわすれ、家のそこなわるるをもしらず、萬にきよらを盡して、いみじと思ふ人こそうたてけれ、茶入より水こぼしにいたるまで、あるにまかせて用ひよ、美麗を求る事なかれとぞ、藪の內の流には申侍る、

○萬にいみじくとも、茶しらぬ人は、いとさうゝしく、名物の茶碗のそこなきがごとし、

○花いけの露かわく時なく、釜の湯氣立さらで住はつるならひならば、いかに道具の味もしらざらん、定めなき世に、久しき物は道具なるものなり、茶巾の早くよごれ、ひしやくの春秋をしらぬもあれど、あかずをしと思はゞ、千金を出してもひとつの名物にはかへじ、住人多き中に、見にくき道具にて茶を敎へ、間違ひたる手前を習ひて何にかはせん、永くならへば

耻多し、餘所へも出さぬ指南こそめいわくなるべけれ、

○世の人の心まどはする事、ほり出しにしかず、人の心は思なるものにて、しめ切などは唐ものなるに、このごろ八幡ににせものすとしりながら、えならぬかたちには、必こゝろどぎまぎする物なり、金宇仙人の萩の志野に似たるを見て、目をうしなはれけんは、誠に藥あち赤みありて白く、かうだひのあたり和らかにして、白藥たまりたらんは、外の色ならねばさもあらんかし、縣物は紙のめでたからんこそ人の目のつく事なれ、墨色は心より出る物なれば、うち見るにもしらるれ、ことにふるき紙の贋たる人をまどはし、敷寫しの似せも厭離しつべし、其中に彼ほり出しの一つやめがたきのみにぞ、老たるも若きも、目利もきかぬも、かはる所なしとみゆる、されば名人の拵し虫入には、大庄もくわされ、上手の寫せる三筆には、宗仁もはまられ侍る、慎むべきはほり出しのまどひなり、

○周防殿の釜日には、他の人を見させまじと、弟子も他へは出さず、繩ばりせられけるを、或人が見て、客の至らん何か苦しかるべき、この人の心もさばかりにこそとて、其後は參らざりけり、後に聞ければ、縱の弟子を他へ取られん事をかなしまれけるとなん、

○神無月のころ、堀川のあたりを過ぎ侍りしに、はるかなる露路のほそ道をつけ、心きよく住なしたるかこひあり、茶の湯につかはるゝ八百屋ならでは、餘の商人も音なふ事なし、奥の庭には菊紅葉抔折ちらしたる、さすがに心ある人と見へたり、かなたの庭に大なる手水鉢の前に、東吳と文字居れり、少し事さめて、此手水鉢なからましかばと覺ゆ、

○一つの燈のかげに書を置き、見ぬ書の箱を並べたて、文は文選徂徠文集、老子のことば南華經、此國の博學どもの書けるがくなどかけならべて、ひとつも物のよめざるは、あはれなる事多し、

○茶の湯ほどおかしきものはなし、あやしのさゝゐ範も、さいろうといへば面白く、おそろしき牛も香合にあればとうとく成ぬ、此ごろのさいろうは、一ふしづゝ組直したりと見ゆるはあれど、古き唐ものどものさま〳〵手のいらぬはなし、常夢が糸を撰り物にまぎるゝ古金襴と似せしは、古金の中の屑にも及ばずといへど、今の世の織出しに及ぶべきは見へず、其

余の贋はすがた下地にも大きにものを入たり、

○御菓子こそよろしからまほしけれ、大かたの所の釜日には、松葉、金米糖、唐松、しんせん豆、かきもち、常に用ひたきは羊かん、かすてら、

○藪の内は、をのれをつゝまやかにし、をごりをしりぞけるといゝたて、道具を持たず、世をむさぼりてかた意地なり、昔よりよき茶人に藪の内にはなきなり、六條に法光といへる人は、さらに道具もなくて茶の湯したり、或人あまりにむさきを見て、ひさごなりの水さしをあたへければ、ある時の夜市にかけたり、餘程の直に成けるを嬉しとて賣りつ、もとの道具にて茶を點じられける、紹億は冬の月に人參りしに、助炭を向ふへ押のけ、炭斗をも又其際に突やり、手水も遣はず茶をたてられける、是をいみじと思へばこそ人にも教へけめ、是等の人はかたりもはべらず、

○折ふしの時の花かはるこそ、物ごとにあはれなれ、ものゝ面白きは、さびこそまされと人ごとにいふめれど、夫もさるものにて、一と際心もうきやかなるは春のごとく染付物にこそあれ、雲堂のあいのしぼりたるに、月に人ありて紀三井寺とよぶもおかし、すゝめの啄のあき甲悉とびぐすりある、むき蜜柑の葉の多き、茄子たつ瓜色こく、玉堂の佳器ははるかをとりたれどもうつくしき、はりこふ牛菱牛嘉清金襴手萬暦、虫喰の中にも名物あり、屏風箱橋杭吳洲は染色もおぼろにて、周茂叔もみぢ柴かり、其外は皿鉢の手の數々、中渡りに至るまで萬に唯心のみぞ付べし、橘は名にこそをへれ、山吹の名にをとらめや、老僧滿月雪の下は吾妻に名あり、喜左講落金地院其外名物はいふもさら也、青井戸の若葉の茂る如き、そばかす脇井戸までもかう蓋に藥かゝらぬなきこそ井戸のしるしなれ、皐月ならで眞熊川の土を見せたる、枇杷の色に白露のごとき藥きらめき、河潤道の上品なる薄墨色の及ぶ所にあらず、況や鬼熊川後熊川のならぶべくもあらねど、何れもはたぞりにて茶たまり有て、香臺の土を見せてりゝしきこそつねならぬ、水無月の水の色、青滋の藥をあらはし、礎の淺き迚へんかたなく、天龍寺の風流さゝげづる、鯉耳八卦錫杖形にてはわからぬと、浮牡丹の花清らかに、人形手の下葉色づくがごとく、ひしほのあかき土の見へたる、福州のしら土までも野分けのあしたの如し、云つゝくれば皆

商賣往來入札の帳面に似たれど、又いはじとにもあらず、冬枯の氣色ふしぎのさびたるありさま、落葉のしるし有こそ、繩すだれいと淋しく、しめ切の寶珠は梢にあらはるゝ塔の如く、南蠻頭巾に寒さを防ぎ、澁藥の枯葉の如き色をなし、瓶のふたの氷とけもやらず、はんねらの土うごもてり、芋頭世にをこなはれ、木枯の氣色さびわたり、果は松たてわたしたる中の海老手も、只この名の物こそほしきと云しも、さもおぼへぬべけれ、

○萬の器は判見るこそ面白けれ、或人のゝばかり見やすきはあらじといひしに、又一人露ほどもちがひある物なれば、筆法すくなき程却て見るべしと、あらそひしこそおかしけれ、形は華押藪にも出侍れど、筆には盡しがたし、只山のみこそ人は心付めれ、されば原叟日夜に東流し去る、京人の爲にとゞまる事一つもなしといへるにて、吾妻にこそ多く賣れ侍れ、其外諸の書付ふんだめはうつし多く、漆がき油斷ならず、利休石州正眞少し、漆書判さへ墨がきのかすり多き、こゝろよかるべし、

○咄齋の不審庵におましませし時こそゆかしけれ、正傳の有樂の園、腰ばりさびたり、高臺の遠州利休の亭は後作のよし、妙喜庵の妙なる道安座敷、宗貞の奇なる宗全の兩面座敷、織部殿の園の刀かけ高きも、故ある事のよし、八つ窓のまどの目にたゝざる、すべて園こそふりたるを尊しとするにや、今日庵又隱まためでたし、

○靈山の入札の年ばかり哀れなる事はあらじ、いろいろのたから板敷にさげ、よしの簾にて棧敷をしつらひ、布の風呂敷あら〳〵敷御調度もとゝのへて、皆人はこぶありさまぞゆゝしき、

○船久の數寄家造り出されて、有職の人らに見せられけるに、永元院殿御覽じて、何條客の中を通り水屋へ通ふたてやうやある、勝手なきにこそ、しかも廣きにと仰られける、豐田殿刀かけの竹五つくりたるを御覽じて、侍三人は呼がたくと仰られける、

○村德が大もふけすれども、口の程やかましく出過たるもの也、武藏國江戸あたりにては、所の者下手賣と申侍るとぞいひし、

○手前わろき人の憚らず釜かけちらすは、よし見とりなればとて、人にばかりかけさするはちからなし、

○或人天然上人に、夜市の時、直打におどされてものをかぶり侍る事、箇條の事いかゞ侍らんと申ければ、目のあきたらむ時、求め給へと答られける、いとたうとかりけり、又直段は一定と思へば一定、不定と思へば不定なりといはれけり、是もたうとし、又うたがひながらも、ひたとかひかゝれば、後には目のあくといはれける、是もたうとし、

○田舍のうちに、中の入道とかやいふ人の、茶の湯規矩よしと云て、近所の何もしらぬ人、あまた入來たりけれども、此茶人只規矩のみ言て、よね鉢に杓子を入る入れぬなどばかりの事言て、更に外の茶の湯をしらず、かゝる此ごろの茶人何しるべきにもあらずとて、人ゆるさざりけり、

○唐橋の邊りの武士の子に、雪舟僧都といふ僧ありけり、鼻の落る病にて、年の漸くたくる程に顏中はれふさがりたり、夫もかまはず方々茶席へ行れける、人人さしむきて言ねどもうるさがりけり、後には目眉などはれふさがり、二の舞の面のやうに見へけるが、たゞおそろしく鬼の顏の如くなりて、後は坊の內の人にも見へず、茶席へも出られずとなり、僧にもかゝる病も有事にや、

○東寺の末下に、神泉僧正と聞へしは、きはめて口あしき人なり、むかしは坊の前に柳の木ありければ、人柳の坊といひあへり、此柳いつしかなくなりければ、其ほとりの池の有けるにぞ、人々いけぬ僧正と申けれ、

○上京邊に、庭をつくりてこのむ常印といふ茶人あり、度々庭を造られしゆへ、皆人庭造りとばかり申ける、

○或人横山へ參りけるに、出たる物くさひ〳〵と申ければ、何事をかくはの給ふぞと問けれども、猶言やまざりければ、あるじ腹を立けるにぞ、かく申さねばあまりかづき給ふと申せば、藪の下に薩摩屋殿、只今法師にておはしますが、今や鼻の下ひあがり候はんと申されし、

○まけ來りて賣んとするものを買事なかれ、古しといふもの多くは是わかきものなり、はからざるにあき起りて賣んとする時にこそ、初てあやまる事としらるゝなり、あやまるとは他のことにあらず、高く買ふべきものを、安くかふゆへに、過にし事のくやしき

なり、

○風も吹あえずちらしやすきは道具なり、花となれにし重寶を、人にわたさん事本意なかるべし、されば大宮院百種の道具の中に、

むかし見し井戸も唐津もなかりけり
百目ばかりのとゝやのみして

殘り多きけしき、さる事侍りけん、

○家屋敷ゆづりの節會おこなはれて、九穗の內儀所かべし奉るゝ程こそ、かぎりなふ心ぼそけれ、身上おろさせ給ひてよませ給ひける、

道具かひ道具のしろは餘所にして
はらはぬゆへにかけぞちりしく

今の世の人心、東洞院へは參る人もなきぞ淋しき、かかる折にぞ人の心もあらはれぬべき、

○寶曆のころ、島原より禿の茶人なるを見せると云事ありて、其比二十日ばかり、京近邊の人彼茶人見んとて出まどふ、上の町棧敷のあたり、更に通りうべうもあらず立こみたり、かく立さはぎては、はては鬪論おこりてやかましき事どもありけり、そのころをしなべて、若きもの二三日みへざる事あり、彼茶人につられ居つゝけしたるにぞといふ人侍りし、

○疇田寺に、或法師年よるまで茶の湯しらざりければ、心うく覺へて、ある時思ひ立て唯ひとり六條よりかよはれける、竹臺子高麗卓、をの〳〵覺へて、扨かたへの人に逢ひて、年比思ひつる事はたし侍りぬと、炭取より茶を點るまで見せらるゝに、年老たる法師の、角前髮のごとくひぢをはり、きくり〳〵とやらるるりつばなる茶人なり、先生はあるべきものなり、

○是も疇田寺の法師各あそぶ事ありけるに、師匠、とかく釜あぐるに、五德のはなれ心よくいかぬものなり、心得あるべしといわれしより、或釜日に大勢の中にて茶たつるに、炭取持出、扨釜のあげやうこゝぞと、鼻をひかめ顏をしかめあげんとするに、思ふよりはあがらす、頭に筋いだし、いきもつまり、一座の氣もつきたり、いりほか成よりかゝる事もあるにや、からきめにて漸五とくはなれけり、

○人の語り出たる茶の湯話しの、道具のあしきこそほゐなけれ、少しにても茶の合點ゆきたらん人は、いみじと思ひてはかたらじ、梅田とかやの茶の湯、近衛殿懷紙小丸釜を釣り、宗全手造の香合に、井戸筒茶わん、利休とも筒の茶杓、時代のなつめ、かくしまらぬもなし、

○獻立の後は、家具をむねとすべし、飯はいかなるものにもまらる、あつきもの皿にはわろし、深きもの燒ものわろし、あさくて長きかたよし、こまかなる鱠、染付によし、內の黑きはすましにわろく、內の赤きはねり味噌あしく、用ひにくきなりを用ひたるは、見るも面白し、菓子椀はよろづの用にも達てよしとぞ人の定め侍りし、

○武者小路に、宗哲僧都とてやんごとなき茶人ありけり、さねがしらといふものをこのみて、若きときより多く喰らひけり、不斷の茶席にても、膝本に置てくひけり、頗ふ事ありて三年療治とてこもり居て、思ふやうにさねがしらをくらひ、漸病いやしけり、きはめて貧しかりけるに、師匠死ざまに坊の柱一本ゆづりたるを、柱を四貫五百目にうり、彼是とくひあるきけり、又棗七百を拵へ、京なる人にさづけて東西ともにくひける程に、其銀みなに成にけり、七百の棗をこしらへてかくはからひける、眞に欲どしき道心者なりと人申ける、この僧都ある誹諧の師の見て、黑ぬるりと申侍りしに、とは何者ぞと人の問ひければ、はげるものを我もしらず、もしあらましかば、彼ひかりが顏に似んとぞ云ける、此僧辨說人にすぐれて、少し歌學あり、誹諧に名あり、千家の法燈なれば家にてもおもく思はれたりけり、世の人を輕んじ、いき過ものにてわる口を上手に言なし、大かた人に隨ふといふ事なし、午時夜話しにも定めてゆかず、才智を以てうそつきありく、幸にして人にゆるされけり、惡のいたれるにや、

○大會の時こぼしこぼす事は、定れる事にもあらず、建水たまるゆへなり、たまらねば此事なし、多くは大勢寄合事、常にしも下京に度々なり、百ぶくだての事いかゝ仕り侍しにや、

○交趾門院のわかくおましまし候は、紫ぐすり、柘榴黃藥の類なりと仰ける、御歌に

ふたのうへ牛と布袋とせに龜と
菊牡丹より鴨はわかきぞ

たぬきも古くはましまさずとや申き、

○五德目の五つばかりは何によらずよし、物によりて三つ四つもよし、餘り多きはわるきとあるべきと

仰られし、此比のさはり、昔よりはるかに高く成たるなり、こぼし棒のさき、紫銅白銅又よし、古代の抱捕持たる人いまはまれなり、

○市の會本講本は、平久六彦なり、人の常に言立る事なり、一年茶の湯出されしに、買たる道具ども過ると、其まゝ賣られしとなり、六彦はみだりに賣買する人と聞しは會本なり、猶限りの近ければと申侍る、ある和尚のうたに、

月をめで花とながめし道具ども
買ふかとすればどこにありはら

をのれらよりは中々よき茶の湯はあるまじと、うやうや敷き體なれども、茶人にてはあらず、道具のひずみにて人の口にもある事多し、

○加賀に宮の越しと言もの有けるが、道具を萬にいみじき物と思ひ、年ごとに多くめしける事年久敷なりぬ、或時浪花北濱の戰ひに敗北して、敵をそひかこみ責けるに、館の内兵どもあまた命をおしまず戰ひて、ついに敗北を取かへしけり、いかなる人ぞと問ひければ、年ごろ折々召つる土道具等にてさふらふと云て、道具は殘らず失にけり、ふかく好めばかゝる德もある事なり、

○慶長のころ、名物の井戸破れし折から、小堀遠州むぐらのもやうをかゝせて、われを付られければ、其後家具どもの葺のもやうはじまりけるとなん、

○名に聞へて、保までをしはかられ、茶の湯に行て思ひ出るまゝの人こそなけれ、昔の茶人も、この比の誰誰ほどにかあらん、今見る人の中にも、宗左宗室などは今の人のむかし忍ばしく思ふごとく、後々の人も思ふらめ、只今の人目に見るうちは、さほどにもおぼえず、いつとは思ひ出ねども、正しくむかしの人を思へば、いまもまた後にはかく思ふらめ、

○いやしげなる道具の多きは、菜籠の炭の多き、三重棚に道具の多き、二客三客の詞の多き、文の懸物に茶の事多き、多くて見ぐるしからぬは、水指の水、砲烙の灰、

○蟻のごとくにたかりて、表へ行裏へゆき、高きあり賤しきあり、老たるあり若きあり、行ものあれば歸るもあり、上の稽古日に行きて何事するにや、名をひけらかし傳授を求めて止む時なし、左やうにして何事をかまち、期する所はたゝ茶の湯に有り、其稽古に來る事は度々なれども、念の間にとゞまらず、手前ばかり覺へて何の樂かあらん、まどえる人是をしらず、名利借上ばかりなり、規矩手前ばかり覺へたる愚人は、夫を樂と覺へて變くわの理をしらず、世の覺へはなやかなるあたりに釜かけ樂に、人多く行き訪ふ中に、聖り法師のまじりて、規矩手前のよしあしいひたらんは見ぐるしくこそあれ、違ひたる事ありとも、法師は茶にうとき顏にてこそ有度事なれ、

○世の中に、頃日もてあつかふ旦座花月など、よく案内しりて人に語るこそうるさけれ、僧法師の茶あるものを、世の人と同じやうに手前をそしり、規矩の噂さするは、いかに茶は疎きにや、いかでかくはしりけんと、人の思ふ程にいひちらすめる、箇樣の人はいかに事知りたりとも、まことの茶の湯はならずと覺ゆめり、

○法師の身にもあらず、上京下京に茶を好むひと多かり、百度亭主して百度客をせずんば、茶人の部へは入がたし、其故は變に乘じて茶の湯を出す事、手前ばかりにては成がたし、茶の湯を心安くして始て名をあらはすべきなし、いけらん程は茶に誇るべからず、我流にあらずんば非を言て益なき事なり、

○屏風襖の物ずき圍の建やうにも、物ずきにて主の拙きはしる〻物なり、大かた出だす程のうつわにても、心おとりせらる〻なり、さのみよきもの出すべしとにはあらず、珍らしがらせんと客へあてがふは僭上なり、わるふすればきたなし、こと〴〵しからぬやうに、心より出たるがよきなり、

○茶入の袋損じたるが、上品なりと覺へしは、侘しき人の言葉なりと笑へども、和久田の切も金ぬけてこそ見安けれ、鴻池宗智が茶の湯にも、物の位を一樣に調ふたるはつたなきとて、新燒の類取合せたるはいみじ、垣なども悉く新しきよりは、古竹青竹打交りて、仕殘したる所あるこそ面白けれ、

○鍵庄といふ人、初代寒雉作の、松花堂と文字すはりたる釜とて見せられけるに、或人初代寒雉に松花堂の釜はなきものと申し〻かば、左候へばこそ世に珍らしき物とて、いよ〳〵秘藏せられけり、

○道具屋に猫またといふ者ありて人をくはせ、方々に丁稚のへあがりて猫またになりて、人くはするもの有けり、何寺とかや云僧の、壬生の會に行しに、音

に聞へし猫またども、堅手の茶碗とて何かしらぬ物をくはせける、段々はたより直を付上るに、欲心に肝心もくらみて、やれまけてくれ、にや〳〵とさけべば、終にかの茶碗手もとへこけ込けり、内へ歸りてあたりの人に見すれば、こは何の役にたゝぬもの成けりとぞ、

○箱に緒つけること、底の内外に見へぬやうに付たるを遠州箱と申、又箱の上を黒柿黒檜などにてはぎたるも申と、有職の人申侍りし、井戸茶碗の箱に、木地の箱なきものと又申侍る、

○出雲やきといふものあり、伊良保などにまがふもの、彼やきを持たる人に尋ぬれば、則しるゝ事なり、見しりて置べし、

○其物につきて其物をそこなふもの多し、釜にさびあり、茶巾に茶澁あり、初心に安買あり、上手に伊達あり、福者に借上あり、伊賀に耳あり、三しまに疵あり、

○尊き茶人の言置ける事、一言法談と名付て書付侍る、

一買ふか買ふまいかと思ふ道具は、大方買ぬがよし、

一茶の湯を思はん人、甚兵衛やきにても持まじき也、茶碗水さしにいたるまで、脇寵持はよしなき事也、

一數奇者は、道具なくて事かけぬやうにはからひて、とりあわすを最上とす、

一上客になるは、目利者は不目利になり、辯舌者は不辯に成り、學ある人は不學になるべし、

一茶意をねがふ人は別のことなし、いとまある身になりて、餘の藝は心がけぬを第一とす、

一亭主ぶりは、客の心よくさはかず、立端も忘るゝ程の居心よくて、主はじだらくならず、心ゆるみなきこそ茶の湯の上手なれ、

この外にもあれども盡がたし、

○堀川の常幽は、道具屋のたのしみ人也、其事となく過差を好みし、少し借上なる人なり、御子何某は病身にして、帳合めされけるに、此唐櫃見ぐるしとて、改ためらるべきよし申されけるに、この唐櫃はむかしより傳りて、其元直をしらず、累代の店に置、古きを以て規矩とす、たやすく改めがたきよし申されけり、

○遠藤殿茶席にて飯めしけるに、かよひ三人前の飯持出ければ、不足なりとて山盛してぞめしける、

○佛橋寺殿にて、近所の人々目利して解れけるに、樂者の何某參られけるに、白き大壺の何の用にもたゝぬものに、花を生て何ぞと尋ねられしに、我朝の物とも見へぬ白壺かなと申されければ、價ひ二百五十文を直打して笑はれけり、

○閑空上人、茶器の大ぶたを向ふへ取やうに教へられけるを、口きける男、あしく上人の規矩を云ひなどしけり、上人いと腹あしくて、こは稀有の一言かな、上の弟子めよな、宗掬より宗拙はおとり、宗拙より宗眞はおとり、宗眞より揚甫はおとれり、其弟子の弟子たる身にて、かゝる直弟子をそしるは如何と仰られければ、口きく男、いかに仰らるゝとも、直弟子にも下手多くと申せば、上人猶いきまきて、何といふぞ、茶杓ひさくの持やうもしらぬ男と、あらゝかにいふて、きはまりなき規矩者なりと思ひける氣色にて、こぼしを持て立れけり、

○高名の茶人といふものあり、或人に言けるは、茶の湯過て和らぐ時にこそ上手下手あれ、茶たつるうちは大切に思ひ、道具仕舞取入て後、心誤り有ものなりと申されけり、

○大佛の洞雪殿茶をせられけるに、後の入に花生に椿を入て、既に茶點せんとせられける時に、花生の底ぬけて、入子の筒落て爐のあたりへざつと流れける、こは稀有の事かなとて、立んとせられし時、膝手より下男雜巾持出ければ、をのれ座敷へゆかん事茶人にまさりて得しらじと、自身ごて〳〵とふかれけり、此洞雪殿へまかりし客ども、一人は膝口、一人は悉くぬれ、一人はごう服、一人はうとましと申されけり、

○花入茶杓の銘、よろづの物にも名を付る事、昔の人にはなし、此ごろは見たてのやうになり、銘あさましく殊の外拙きなり、目馴ぬ文字を付んとするも益なき事ながら、餘り此比は拙く覺へ侍る、宗匠あさまゆへにや、

○茶の友とする人に、面白からぬもの七つ有、一つには高き道具のはなしばかりする人、二つには脇寵ものつかふ人、三つには何もしらぬ氣強き人、四つには變好む人、五つにはせんじやうなる道具屋、六つには客き人、七つには自慢する人、よき友三つあり、一つには物數奇いはぬ人、二つには好事なる人、三つには學文ある人、

○鯉のさし味、茶にはあはぬ物となん、二の膳に專ら付るものなればつかひにくし、鳥には雉は鴨より面白し、大鳥は茶の湯に拙し、殘りを二三度にも遣ふやうにて惡し、小鳥の類よし、松茸などはつかひやうあらめ、今の茶の料理、大方けし葉、かひわり、はたけ、な汁、吸物にちまろぎ、松菜、菓子碗、蕁さい、なめ茸、香のもの、鉢にさかなと取合せたる、八寸にからすみ、木の葉鰈、しぐれ蛤、はか〴〵敷人さふらはぬゆへにこそと、さる人申されたりけり、

○鎌倉彫に辨藏と云ふ者、左右なきものにて、此比かぶるなり、獨樂のちひさきに、きんま甚だまぎらはし、是もさる人の申せしは、かやうの膳ものむかしは仕出さず、世の末になれば、いづかたまでも入わたりけるにこそ、

○唐物は樂種の外は新渡いらぬものなり、昔より多く入わたりたり、又得がたきを尊むも愚かなり、

○初心なるものは規矩を以て茶とし、功者なるものは茶の湯を以て茶とす、をのが分をしりて及ばざる時は、やむを智といふべし、分もしらで自慢する人多し、初心にして分をしらざる人は、人の言し事を盜み、功者の分をしらざるは、そしりをうくべし、

○室町の澄心律師とかやいふ人、ある時鏡を取て顏をつく〴〵と見て、餘りに我顏の見にくきとて、太夫買を思ひとゞまりけり、難有覺へしか、其後茶室にばかり籠り居て、世間の茶を嘲り居たり、されば顏は鏡にうつれども、茶は何にかうつらん、數奇家園の茶の湯、なるほど茶じみたる茶人なれども、廣座敷の伊達なる茶の湯は、一向ならぬ人なり、我をしらずして外しるといふ理りはあるべからず、をのれを知るを物しる人と云べし、道具ども拙からず、手跡も心掛よく、茶の道もなみ〳〵ならねども、鹽からくじみたると言事、かゞみにうつらねばしらざるにや、されどもかほどの數奇者も今はまたまれなるにや、

○或茶人朋友にむかひ、わぬしの問れん程の事、我何事成とも答へ申さんといはれければ、彼人答いふやう、我いまだはか〴〵敷事はしらねば尋がたし、はしりまはりのそゞろごとの中に、いぶかしき事の候、尋ね申さんといひければ、ましてあまた事は何事も申さむと云はれける、こは興あるあらがひなりとて、人人息をつめたりしに、彼人きんまのまといふ字と、いらぼのいらぼ如何かきはべるやと尋ければ、其人はたとつまり、是は何の用にたゝぬ事なりと申されければ、さればこそ、深き事は存じまさずとはじめより申せしと申されければ、其人まけにどよみあはれけり、

○山田雪明、茶席にて柳坊と話せられし中に、辨才天の財の字もあり、才の字もあるといふ話しに成たるに、柳坊申されけるは、先辨の字も、第一に中を言此字にかき候、又リの字はあしく候と申されたり、才の程まであらはれたり、今はさばかりにて候へば、ゆかしき所なしと申されけり、

○茶かけて後、遊金ありて道具につかはんとせば、所願はつくべからず、わづかの身代にて何事をかなさん、すべて皆妄想なり、所願心にきたらば、妄心迷亂すと知りて一品をも買ふべからず、直に萬事を放下して茶道に向ふ時、さはりなく所作なくて心身ながくしづかなり、

○八つに成し年、人に問て言、茶人はいかなる者にか候はんといふ、人のいはく、茶人には功者のなりたるなりと、又ふ問功者とは何としてなり候やらん、人又茶人の敎へによりてなる也と答ふ、又問ふ、敎候ひける茶人は何か敎候ひけると、又答ふ、それも又先の茶人の敎に依てなり給ふなりと、又問ふ、其敎はじめける第一の茶人は、いかなる茶人にか候ひけるといふ時、其人は家よりや賣けん土藏よりやうりけん、野郎の增長して成給ふなるべしとかたりて興じき、

茶人つれ〴〵草終

難波常雄
田口重男 校
文傳正興

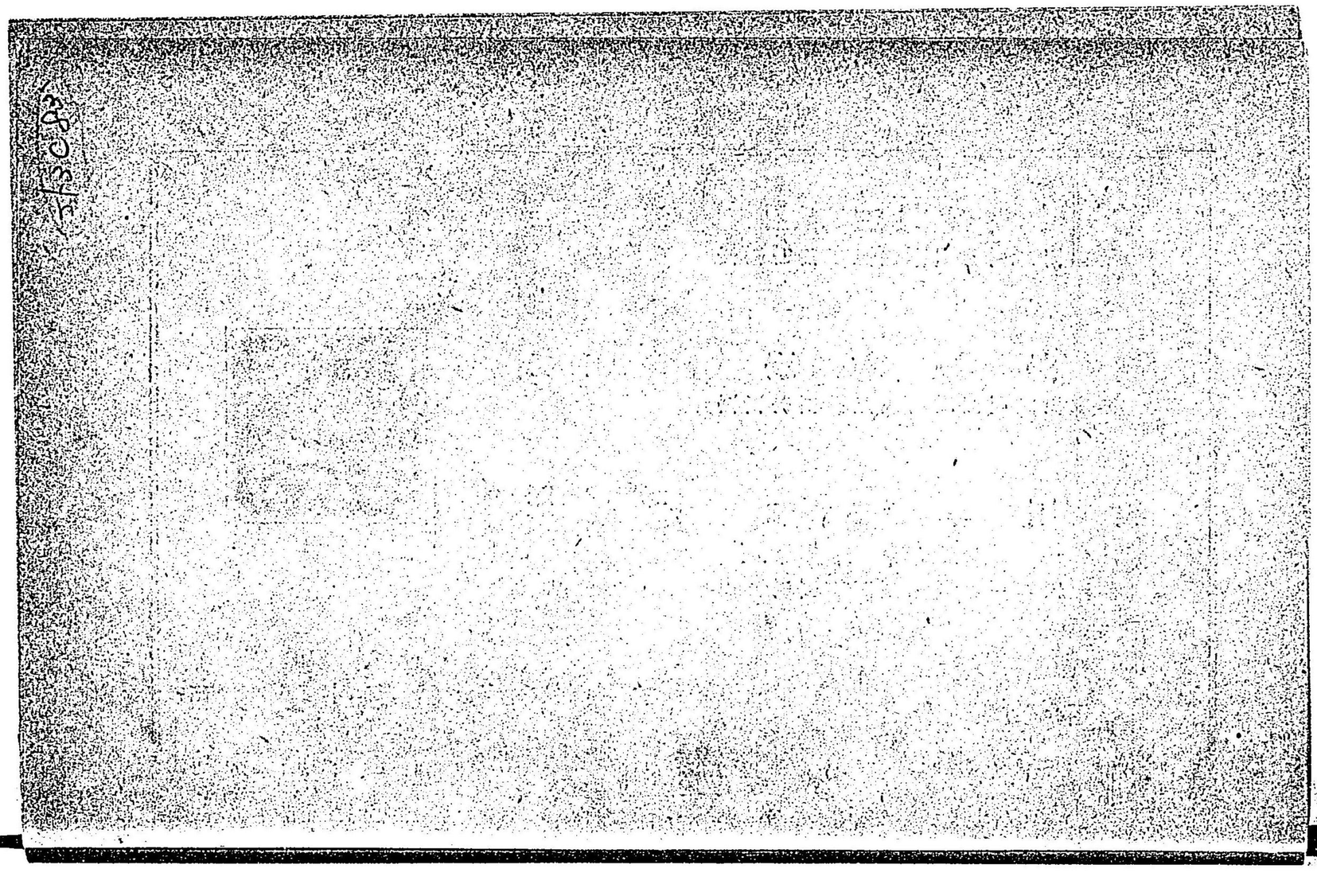
近世文藝叢書第七 終

明治四十四年八月廿五日印刷
明治四十四年八月三十日發行
（近世文藝叢書第七奥附）
非賣品

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
國書刊行會代表者
早川純三郎
編輯兼發行者

東京市京橋區新榮町四丁目三番地
高橋赤次郎
印刷者

東京市京橋區新榮町四丁目三番地
國書刊行會第一工場
印刷所



910.8
Ki249
K